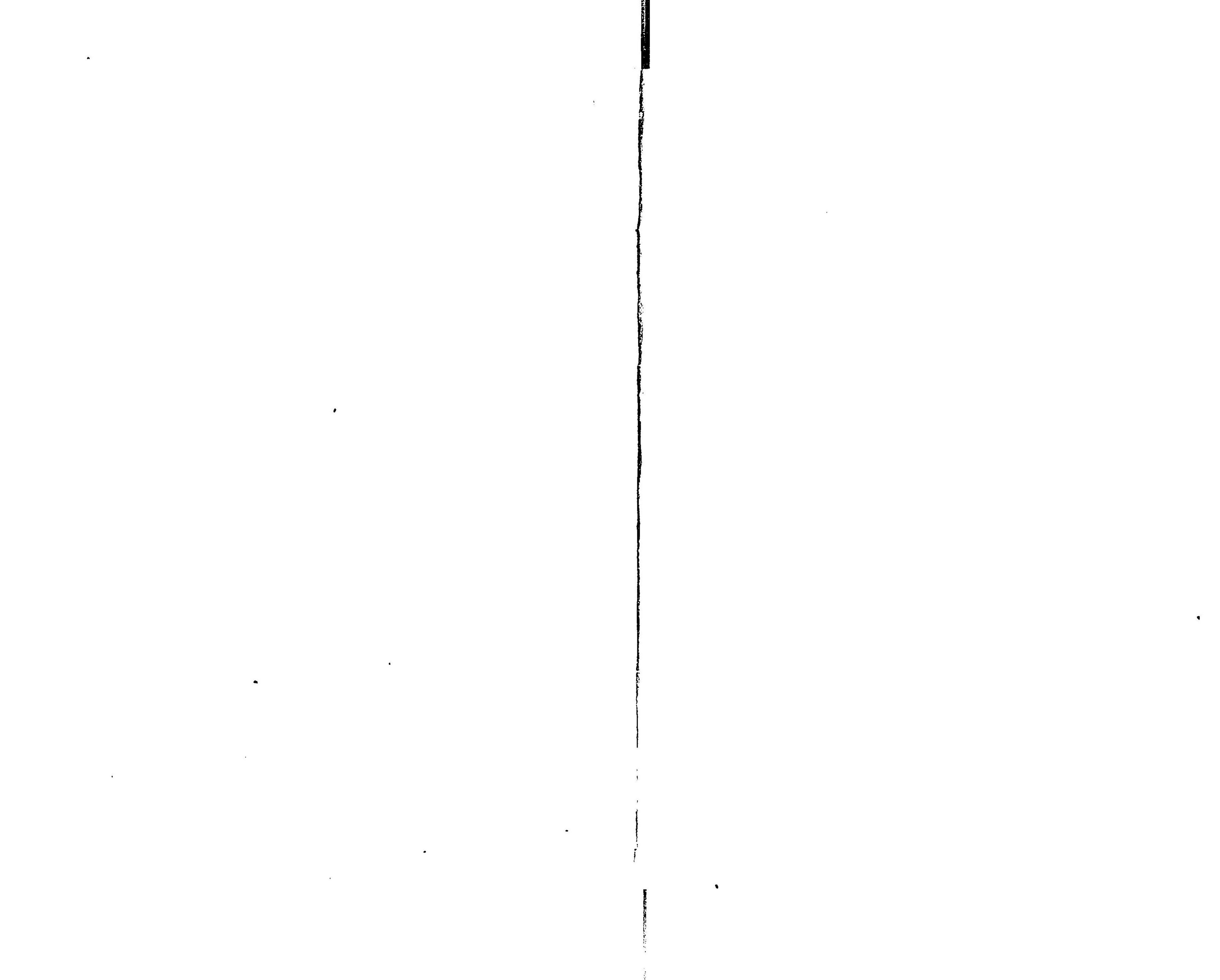


戰 雜
記 波





繪本大阪軍記序

天正の昔し豊臣秀吉不世出の英才を抱きて身下賤より起り織田信長に仕へてよく忠を盡し義を重んじ逆臣明智光秀を誅し強敵柴田勝家を亡し西を靡け東を平らけ勢威朝日の登るに均しく遂に天下を平定して都を浪速に建て位人臣の極に登る此時に當りてや宇内諸將皆風を望みて屬し威を海外に震ふるに至れり然るに忽然薨るに及び其子秀頼暗愚にして事の曲直を辨せざ狼りに奸臣の言を用ひ大阪の居城に據つて無名の戦を起し徳川家康のためは攻め亡され僅かに三世を過ぎざして系統全く滅するに至れたり此戦鬪の顛末をものしたるを世に大阪軍記と名づけて先づ年より普ねく行はるれど其卷多くして覽むに便ならざ聞る人之れを憾みとす頃日文

泉堂主人之れを活版に上して体裁を洋風より更め且鮮明なる畫圖を
 さへ加へたれば携帶便よして讀む易く恰も勇士の利劍を帯び
 美女の錦繡を纏へるが如く完全無缺の好冊子となれり然して此冊
 子たるや素より實事を綴りなしたるものなれば架空の妄説をもの
 したる稗史小説等と日と同ふして語るべきものもあらねば世の少
 年子弟之れを閱ちて修學の助けともなさんとは編者の苦心も盡餅
 ぶ屬せど書肆の歡喜も何もの心之れも若んや
 于時明治二十歳九月即ち陰曆七月既望浮雲全く散じて玉兔空よ
 輝き涼風ゆるよ起つて落葉窓を叩くの夜新橋日吉坊の寓居の燈
 下よがて

梅亭主人誌

豊臣秀頼

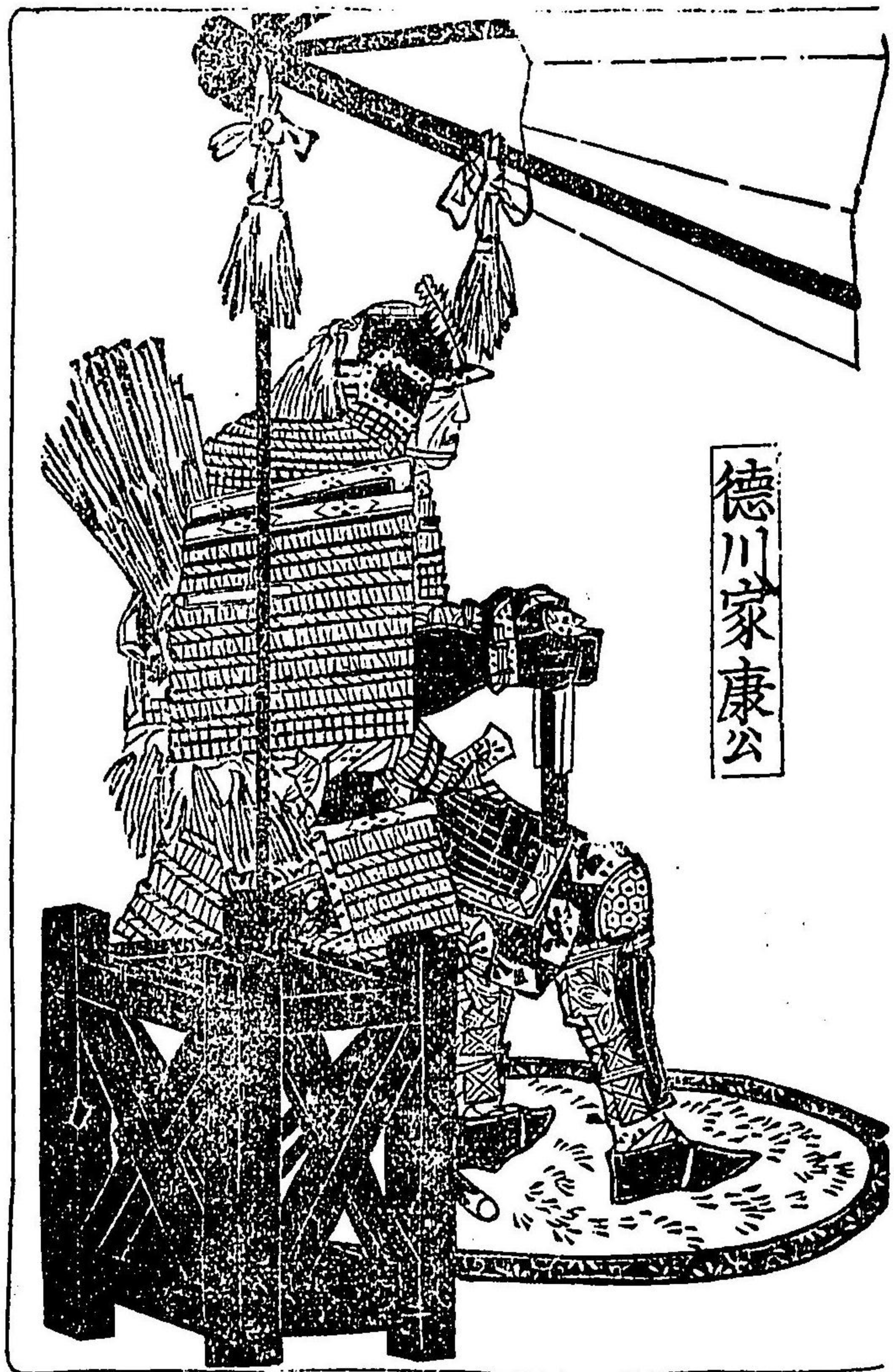


本村長門守重成



眞田左衛門幸村



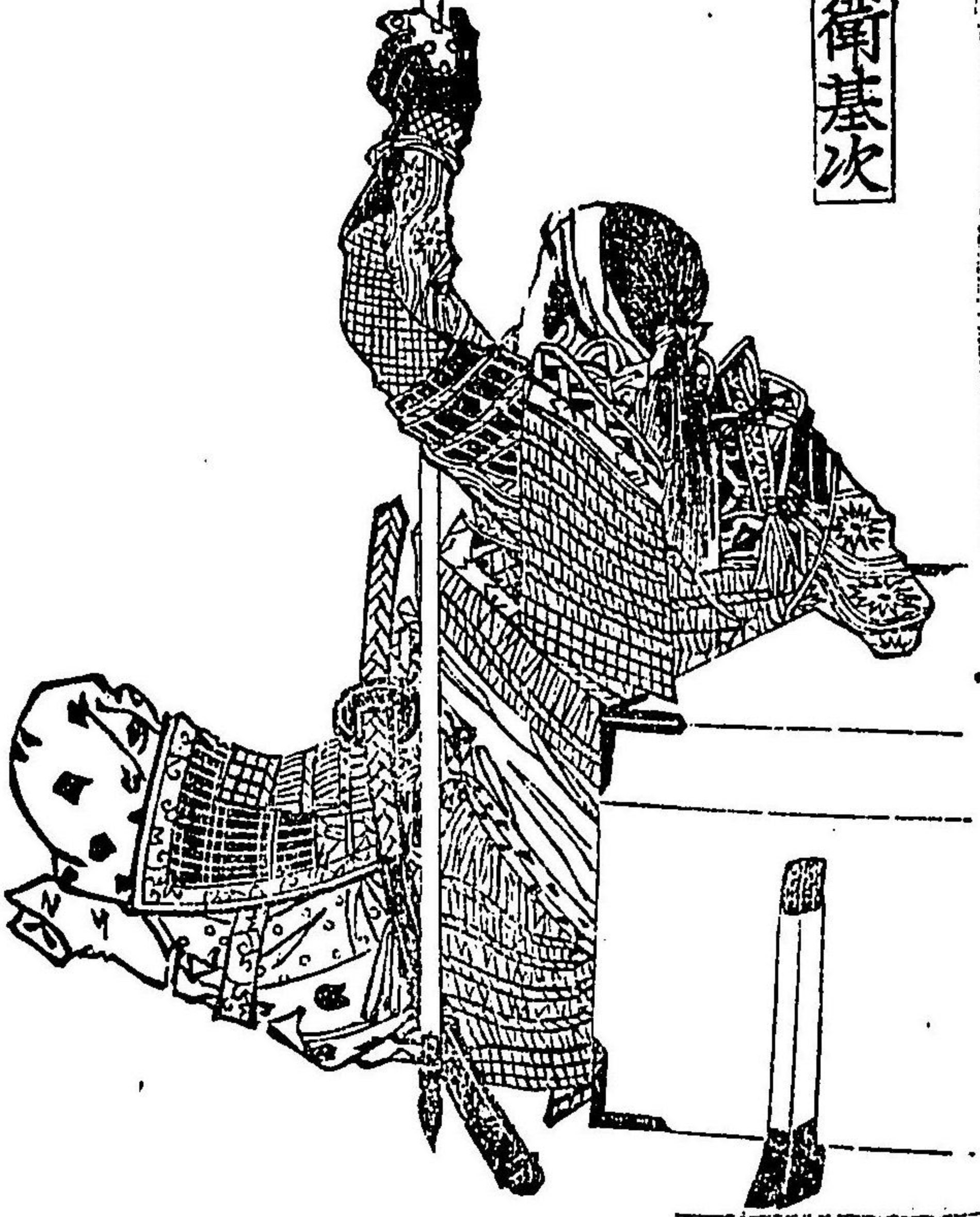


徳川家康公

子息大助治幸



後藤又兵衛基次



難波戰記目録

- 豊臣秀頼公上洛の事
- 京都大佛母三建立の事
- 大佛殿供養評定の事
- 片桐大野等駿州に下向の事
- 大藏卿始め三女駿府へ下向の事
- 并三女片桐を疑ふ事
- 片桐大坂城に立歸る事
- 并大野渡邊等の奸臣片桐を説する事
- 秀頼公片桐を疑ひ給ふ事
- 并速水甲斐守和解を計る事
- 片桐且元大坂可退の事
- 并攝州茨木城に籠る事
- 真田幸村父子大坂入城の事
- 并和歌山城下通行の事
- 大坂城へ諸浪人を召抱ゆる事
- 并烏合の者評議の事
- 中島一繁の事并片桐の兵士等討死の事

- 大坂城中軍評定の事
- 并真田後藤異見の事
- 大坂城兵持口を定める事
- 并真田幸村等を構ふる事
- 大坂城中不和の事并七組の頭忠諫の事
- 大御所駿府御出馬の事
- 并秀頼公矢野和泉守を召出さるゝ事
- 大野治長渡邊糺と口論の事
- 松平左衛門督中島を乗取る事
- 真田隠岐守真田左衛門佐方へ使ひする事
- 穢多ヶ崎の砦を乗取る事
- 野川福島合戦の事
- 政宗秀頼公の使者和久半左衛門を捕る事
- 今福台戦の事
- 鴨野合戦の事
- 伯耆が淵の砦を拔事
- 福島を乗取るゝ事
- 船場町を乗取るゝ事

- 玉造口合戦の事
- 天満船場寄手へ御下知并睦合戦の事
- 藤堂高虎豊志谷口を攻る事
- 有架修理が使者茶臼山へ参る事
- 城中和睦評議の事
- 城兵蜂須賀の陣へ夜討の事并戦功の者へ褒美を賜る事
- 秀頼公并淀殿城中寄手兩陣御覧の事并秀頼公諸將士を勵むる事
- 兩軍御和睦の事
- 青山石見守城中の内通露顯の事
- 大坂城惣堀石垣取崩しの事
- 禁裏より七ヶ條を仰出らるゝ事
- 并眞田幸村原貞胤の事
- 大御所東國御下向の事
- 并秀頼公の使者岡崎へ來る事
- 大御所御答に就大坂城中評定の事
- 并大野治長難に逢事

- 將軍家江戸御進發の事并京都騒動の事
- 大御所重て和陸の儀仰入らるゝ事
- 諸國の大小名上國へ馳上る事
- 和州法隆寺災上の事并堺の津放火の事
- 京都火賊露顯の事
- 并織田織部正父子切腹の事
- 後藤又兵衛軍評定の事
- 紀州一揆蜂起の事
- 秀頼公天王寺表御巡見の事
- 兩御所京都御進發の事
- 并河野櫛右衛門御勘氣御免の事
- 大坂勢手配の事
- 大和口寄手軍功後藤又兵衛討死の事
- 薄田隼人正討死の事
- 大和口後軍合戦の事
- 并眞田退口の事
- 矢尾久寶寺表合戦の事
- 并渡邊勘兵衛功名の事

- 若江表木村長門守討死の事
- 并井伊功名の事
- 小幡勘兵衛景憲反間の事
- 并小笠原秀政本多忠朝討死約束の事
- 越後少將忠輝朝臣軍評定の事
- 五月七日兩御所御出陣の事
- 越後少將忠輝朝臣先登の事
- 并寄手備配りの事
- 大坂勢備立の事并御和睦術計の事
- 眞田幸村干息治幸を城中に歸し遣す事
- 並前勢合戦の事
- 并眞田幸村御宿政倫討死の事
- 松平伊豫守忠臣朝臣高名の事
- 本多忠朝奮戦討死の事
- 并本多の家臣等へ御威状を賜はる事
- 小笠原秀政父子討死の事
- 小笠原大學助忠貞勇戦の事
- 并忠貞父兄の家督を継事

- 天王寺表御旗本合戦の事并井伊家武功事
- 岡山合戦事並水野青山兩親の士勇を爭事
- 將軍家御旗本合戦の事并御旗本勢奮戦事
- 阿部正次父子高名の事
- 石川嘉右衛門坂菟の事
- 大坂城中放火の事并搦手合戦の事
- 大坂落城頼宣卿勇言の事
- 并小出大隅守正直の事
- 秀頼公御母子御命乞の事
- 并大坂北の方御出陣の事
- 秀頼公御母子御生害の事
- 并眞田大助忠孝を守る事
- 兩御所凱旋の事并御參内の事
- 長曾我部盛親大野道大等生擒るゝ事
- 并大坂殘黨御所刑の事
- 秀頼公の若君姫若生擒るゝ事
- 仁世四海謳歌の事

難波戰記

難波戰記

○豊臣秀頼の上洛の事

古人云ふ天崇大あらざれば即ち帷を覆て廣からず地深厚ならざれば即ち物を載て博からず然は豊臣秀吉公は其身卑賤より出ると雖も雄才碩量として忽然四海の激浪を鎮め終に天下を掌中に握り位從一位官は攝政關白太政大臣の尊さを極め四夷八蠻迄恐怖従ふと雖も天は満るを惡む故に二代にして終に滅亡す其理由を尋るに去慶長三年八月十八日太閤秀吉公薨御の後世上濁水を穢思ひをせし所徳川家康公仁義を以て衆を撫し武威を以て逆を誅し給ふ故世上忽ち靜謐になりければ愈々幼子秀頼卿を補佐し四海を治め給ひしにより寛仁恩を荷ひ徳を敷く輩ら招かざるに集り迎へざるに來り歸順しける其勢風に草木の靡が如し是又因て五奉行石田治部少輔三成増田右衛門尉長盛東大藏少輔正家淺野野正少輔長政大谷刑部少輔吉隆并々所司代前田徳善院立以下下の輩ら妬思ふ事一方成す何卒して其勢威を傾けんと謀る事度々に及しか共討手の役人徳川家の威光に畏れ謀計泄策谷まり遂に事成す其後慶長五年庚子の秋石田以下の謀叛人秀頼卿の命を稱して大軍を催し濃州關ヶ原の驛に於て關原の軍勢と大いに戦ふと雖も石田方敗軍して諸將之或は戦死し或は擒て成首を六條河原に晒し反逆の名を万代に遺す耳ならず秀頼卿の命にも及んと思ひしと敢て其沙汰もなく刻々へ大坂城に其儲居住せしめられ攝河泉三ヶ國を御廂料と死行はれ加之江戸大納言殿(徳川秀忠公)の姫君を以て御入興あり斯の如く徳川家御恩意厚ければ大坂の繁昌昔に異らず世上も愈々太平の化に浴しける是を徳川家康公寛仁大度の高德に依八鳥の外迄靡さ奉つる

一、長十年四月十六日征夷大將軍の職を江戸大納言家に譲り給ひ御身は駿河の府中に御隠居
 任し是より家康公をば大將所と稱へ奉つり天下の大名小名は言も更なり大坂の七組馬廻り
 の輩ら迄妻子を引連れ江戸駿河へ勤番する世と成れば大坂は秀頼公の御母淀殿を始め妬
 しさ限りなく織田有樂大野修理亮治長等股肱譜代昵近の輩らを召集め折々内議秘計を運し
 加賀島津伊達上杉最上等へ内々密使を以て申送らる、は故太閤の御厚恩とも無却は有まじ
 因て秀頼公御大專思存立れなんには必ず頼まれ申さるへしとて太刀金銀若干を使者に添て
 遣さる、又加賀中納言利長卿は一審其ノ事を駿府江戸へ注進有ければ兩御所も油斷成難
 く御用心専らなれば何となく世上穩か成す見えにける大御所は御早七下に餘らせ給へは百
 年の後の事を思召何卒万代不易天下萬民塗炭の苦を救はせ給はんと種々御心を悩し給ひけ
 るが慶長十六年二月御上洛二條の城へ入給せひ夫より使者を以て秀頼公内大臣宣下以來未
 た上洛もなく豊洲大明神へ参拜も有す又大御所久々御對面も在さねば今度上洛有て二條城
 へ渡られ給へ御遣はさる淀殿聞給ひ當時大御所在すとも大將所大坂へ下られ給ひては對
 面あるこそ道理なれ秀頼公を二條へ引付て請大名同前と對面あらんとは不審なりとて同意
 なし片桐市正且元は兎角波風立す時節を待んと胸智略を蓄ふれば加藤清正淺野幸長を語
 らひ種々淀殿を諷め漸く衆議定まり秀頼公上洛の爲慶長十六年辛亥三月廿七日難波津を發
 向ありて翌二十八日伏見より肩輿に乗れ花浴に赴かせ給ふ御輿の左右は加藤肥後守清正
 右主計頭淺野紀伊守幸長(始左京大夫)歩行にて扈從し御後には騎馬の面々歩行の士卒等
 行生勝公常備天を陣かし次第を遣て數千人供奉す見物の貴賤僧俗擡敷を排へ或は街に滿

て拜見すは容貌人々卓越て美しく其の形狀を見るに付ても故太閤の在世に於ては如何ばか
 りの寵愛も有へきにと嗚き落涙する人多かりけり此時二條の城より迎として宰相義直卿
 常陸介頼宣卿途中迄参らる既にして二條の城に在し大御所御對面在りて秀頼公の成長を
 賞し次に加藤清正淺野幸長池田輝政等か扈從しける事を勞せらる期て御養鷹のゆ盃蒸は取
 替あり故太閤の政所高臺院殿も爰に在し對面し給ふの供の輩らには加藤淺野池田其他織
 田長益入道有樂片桐市正且元同半膳正貞隆大野修理亮治長をも養應し給ふ其席上へ大御所
 出給ひ清正に仰られけるは足下は秀吉公の幕下に在て只勝軍にのみ馴て利を得し人なれば
 負軍の勝負は如何尙東なき由仰らる清正畏まつて諛詞の如く秀吉公は猛將にして然も天運
 に叶ひ給ふか故に敵に當る事堅きを碎き強きを破り變化機に應じ圖に適ら幸と云事なく遂
 に天下を一統し大平の御世とあし給ふ因て某し加さの弱士等も勞せずして一戦の中に利を
 得る故に適々負軍の合戦は大軍に圍まれ難儀仕りぬ然れ共勝軍に馴たるも而巳も申されま
 じと御答すければ大御所誠然も有へしと仰られ斯て加藤は大坂にて母君も侍衆給ふへし
 御暇申させ給へと頼り催せしかは秀頼公二條を退らせらるれば大御所は玄關越道迄
 御送りあり秀頼公は直又大御殿に立寄給ひ柱建等の事を仰せ定められ豊國大明神に参拜有
 れ終て三十三間堂御遊覽の後禁裏へは名代を以て扈從上陣路に赴き給ふ加藤清正先驅し
 て伏見の秋宿に立寄御養鷹の用意なし船中よ於て御膳を獻し扈從の輩らは御船縁に薄涼の
 席を設け上よは悉皆く日覆して種々奔走善を盡し美を盡し其結構營るに物なし既にして秀
 頼公の御船伏見を發して大坂へ歸り平常の座に着給ひて後清正肌を惹せし刀を抜一見して

後輔に納め押越、涙に咽ひ嗚呼清正冥慮に適ひ故秀吉公の厚恩今日報じ奉つると云り是は
 清正今度秀頼公は供奉し二條に赴く時方一人有て扈從が持し太刀を奪ひ取れたりとも懐中
 に藏したる腰刀を抜て指違へんと謀りける故なり秀吉公若千の士を抜立給へ共清正の如く
 は實に稀なる忠臣と云つへし四月二日大御所より義直御願宣卿を大坂に遣され秀頼公が上
 洛を賀せられ白銀一万枚母君へ同く二万枚綿三百把北の御方へ白銀千枚綿二百把紅花三百
 斤を贈らる其後兩卿大坂を出立同く五日二條より大坂の景況を言上し給ふ其時大御所
 の仰せに秀頼は愚蒙なる嬰兒の如しと聞しか然にわらずと御喜悅をましけり初秀頼公大坂
 を御出給有て伏見に到らせらる、迄一里毎に飛脚を立置只今は何所迄御着只今は何方に入
 せ給ふと御母堂定殿へ汗進しける又異儀なく歸城有ければ悦ひ給ふ事一方ならず然と同六
 日淺野彈正少彌長政卒去し加藤清正も今年六月初旬御地肥後熊本へ歸し後何方となく氣分
 悪しと癖に若しか醫療其驗なく同月廿四日五十一歳にて逝去し池田宰相輝政も翌々十八年
 正月廿五日淺野紀伊守幸長も同年八月廿五日日本去せり此人々の斯成行ふ付ても秀頼公御趣
 の末と見る大坂は何となく衰微の徴し現れたり斯て大御所御在京の間公私の御政事殘御方
 なく間給ひ四月十八日御出京にて同廿八日駿府へ還ぬあり
 一書に板倉伊守勝重自ら慮に我多年徳川家の高恩を蒙り今京都所司代と成て 朝廷を
 護し中國以西の事を正すと雖も追々老年に及び此後戰場にて功名を揚君恩を報せん事對京
 なし然に今度秀頼公上洛の節幸ひ豐臣家股肱の臣加藤池田淺野の輩ら御陪從して二條に來
 る由とても戰場は向て彼等一人よても容易に計取事能す因て今度我が一命を差出し彼等を

亡はば是に増たる忠はあらじと覺悟を極め密かに毒を入れて自、餓死を製し御養應の席に持
 出清正始彼の人々に向ひ此饑饉は禁裏より拜授せしま、豐福分申なり尤も御疑ひは有まじ
 けれど當時彼是申世の中なれば御毒味仕つらんとて人々の前へ据し饑饉を半分づ、喰て是
 を進めしかば清正始辭する事能はず是を喰しけるにより其後程なく各々病に罹り死なせし
 どあり然れども其中且元壹人は疾くも勝重が敢死の謀計なるを覺り板倉殿の御芳志添けな
 ければ老母に與へ喜悅せん云て是を喰せず懷中して大坂へ戻り此歿ひを免れしと又板倉
 勝重は覺悟の如く何もの毒味を少し多く喰ひしを以て毒氣速かに廻り其夜自宅にて死去せ
 しなり其身を殺して忠を立るとは此人をや云へし然々とあり此説の眞偽は後人の高評を俟
 のみ

○京都大佛殿再三建立の事

抑々洛陽大佛殿は故太閤秀吉公天正十六年に南都の舊規に擬せられ年を経て成就しける所
 に慶長元年七月十二日の大地震にて佛僧悉く破壊ければ秀吉公御下知として信濃國善光
 寺の兩彌陀を此堂に移し給ひ其中佳なく秀吉公御し給へば後室高臺院殿御計ひとして御
 佛を本地へ歸さしめ重て數百人の鍛冶内匠を招集られ數万斤の銅鉄を以て佛像を鑄造しめ
 給ひしよ七分通り鑄造畢りて御首を造鑄に着手する時如何しかりけん火所の火堂の内へ落る
 よど見る間に材木に燃付ければ諸人驚き是を消留んと手を揚足を空にして喚き叫ぶ折節鹿
 風頻りに吹來つて忽ちよさしも結構成大佛殿灰燼と成り失しかば奉行棟梁は言も更なり
 洛中洛外の僧尼老若此天災に肝をぞ消たりける斯數年の善功も一時は焦土と成ぬるは只事

是非秀頼公果報慶く天下を知し召給へど仁もなく徳もなく只聚斂の臣を愛し万民を苦め百姓を虐げ其身の榮花と極め尙も虚名を後世に残して巨大の佛像を建立す元來神佛は非禮を請給はず豈餘歟無らんやと諸人言合り其後大佛殿の跡は茫々たる野原と成て繼に礎のみに遺ける其頃大御所は片桐市正且元大野修理亮治長を召て秀頼公并に御母堂へ仰らる、旨あり其故に故太閤數年の丹精よて建立爲給ふ所の佛像地震に破壊し又火災に燒失す是前世の感報ならん然は秀吉公へ孝養の爲且は秀頼公安堵の爲旁々以て大佛殿再建然るへしとの由を仰せ遣されければ秀頼公及び御母堂も御同意在し願て大佛再建の儀をは急かれける此事を世人評して大坂に金銀財寶限りなく貯へ失有て徳なく故に大佛再興有ば金銀も諸人の手は渡り天下の潤澤とも成且は無益の寶多ければ却て殃ひを爲により斯計り給ふにやと申合り故太閤倉庫へ納給ひし財寶を以て大佛殿を度々建立の爲に費し給ふ事實悖て入者又悖て出るとの謬さ思ひ知る世と成りけり

○大佛殿供養評定の事

同年四月十六日大佛の鐘を鐘終ければ吉日を撰み供養有べしとハ其用意をかし秀頼公も上洛有て執行然るべしと大坂所思召る。由片桐東市正且元より申上ければ秀頼公は早々織田上總介信包同有樂大野修理亮治長并に且元が舍弟主膳正負隆以下を召て此度上洛の事如何有べきと胸臆なく是非を申上べしと仰られければ修理亮進み出て申けるは御上洛無しとも此供養行はれざる事にも候はず御不審に思召御事も有んに於ては御上洛御延引然るべき山々言上す織田兄弟も此儀然るべしと申ければ秀頼公も此儀道理と思され御上洛は有まじき

事に定り各々退出しける。織田上野介如何したりけん坐を立て血を引ければ大佛供養の評定に不吉の兆と人々囁きけり斯て市正兄弟を始として秀頼公の近臣大坂上洛し其役を定め已に供養明日と披あわりし程。例の物見高き京都なれば十日以前より機敷を掛へ幕を張貴賤男女群を爲し車馬巷に充滿し女童子は歩行も安がざる程押合つ、前日より參詣しける其賑ひ筆に遠盡し難し又大佛殿の近邊は數十町の間假に設たる商人屋敷千軒小路を割て建速ね都鄙遠近山海の品々を所寄。送賣鬻ぐ實に平安城百年の繁昌を一日に成かと思ふばかりの賑ひなり斯る所に京都所司代板倉伊賀守勝重使者を片桐市正方遣し申入けるは今度大佛殿の鐘の銘又關東御不審の兼少からず其他棟札の書様等惠さど申物あり因て大御所御氣色宜からず明日の供養は先延引あるべしと有り市正答へて既に供養の儀式相調ひ明日と定りて遠國の貴僧等悉皆く参り集る然るに供養を停止せば幣幾千ぞや所詮此供養を執行し後日に爾御所は候り有に於ては日元切腹仕つるべしと返答す板倉再度使者を遣し足下切腹するよ於ては己身の申譯は立べきが某しも不肖の身と雖も京都の所司代として在京しなから關東のは意に適はざる供養を執行はしめば勝重が罪陳するよ辭なし伊賀守斯て在内は供養の事叶ふまじと急度申送ければ市正も近臣等も力及はずと供養を止て各々大坂へ歸りけり遠國より來りし貴僧等も退散する故大佛の近傍に群りたる貴賤男女此事を聞て各々輿聲本意なけに右往左往に散行は家人は殘て機敷を取毀し商人は早々店を仕廻其混雜一方成す是只事に非ざるへし今年打續く天變地妖有しが斯る不思議出來り去頃叡山覺林坊の奴が天狗の評定を聞しと云しが誠と思ひ合せたりしと人々眉を顰めけり其後韓長老も京都召

籠られ今後關東より何成嚴重の沙汰有んかと諸人恐れ慄きけり

○片桐大野等駿州へ下向の事

然程に大佛供養停止の後秀頼公の近臣相集まりて種々評定しける中に大野治房進み出去二月南禪寺崇徳長老駿州へ下向して大佛殿鐘の銘に國家安康との文有是關東を調伏に紛れなき由上る儀て大野所居機嫌懸き山に承まはる此儘差置れなば愈々兩所御心中計り難しと申ければ一同然るへしと其意同ト夫より片桐日元大野修理亮治長等陳述の使者として四月下旬大野を立て駿府に着しければ直ニ御城下へ参らんも恐れ有テ鞠子の徳願寺に旅宿し此度兩人下向の由を本多上野介正純が方へ案内の鐘の銘を書したる韓長老をも則ち召連たる趣きを申送る上野介是を聞て各々遠路の勞を慰め次に城下へは來る間暇言を返答す其後本多正純此由を大御所の内聞に達しければ上野介を始め安藤帶刀直次成瀬隼人正正成并に傳長老彼宿所に行尋問へさし由仰付られしかば四人の輩ら徳願寺に來り對面し上野介兩人に對ひ未だ大野所の内言は承まはらずと雖も秀頼公の御行跡關東へ聞える所甚だ宜しからず或時は諸國の浪人を集られ只管合戦の用意ありと言或は兵器を調へ練兵す共言り秀頼公御異心ありと評み思ふ所に今度鐘の銘に關東調伏の文顯然たり其他棟札の書様旁々以大御所の御旨に適はず故に御機嫌宜からずと申に三使畏まりて陳じける此御尋の條り一り承知仕つる彼浪人を集令兵器を調ふ事は跡形も無淨説にて全く謬者の偽言成へし况や鐘の銘棟札等の事は聊かも秀頼公の知し召さる所韓長老が作りたる文に自然不祥の辭あるものなりと答へければ正純始め是を承まはりて歸り此趣きを大御所の内聞に達しければ直に

彦阪九兵衛を召れ韓長老を預らる其後折々上野介が宅へ長老を招き正純一人にて詰問及ひけり片桐兄弟大野等は四月より六月迄徳願寺に逗留して御氣色を伺ふと雖も變る儀もなし是に因て市正本多正純に就て申けるは秀頼公の御事兎にも角にも仰を承まはり罷上り秀頼公へ申へさし由を伺ひければ大御所何の御挨拶も無くして當今は歸ひ既に傾けは定めて將軍同様に孝行有へしと頼母敷思ひしに案々相違し我を調伏せんや鐘に調刻するのみか刺さへ數多の浪人を集め兵器を調へ老我の我を傷はんとせらる、事は何の謂そや下郎の説を信ぜするに足すと雖も更又又形の無事を言へからず我故太閤の遺言通り聊かも違はず秀頼を寄佐して異國本朝の亂を鎮め諸人秀頼が前に階躍する事全く我が力なり然は忠有て罪なし然るに去歲長五年石田三成が勸に因て西國東國の大名を令せられ我一門を亡さんと爲る、と雖も天道私しなき故に小勢を以て大敵を引受遂に國を出賊將を擒にし其折秀頼に生ぜさせんと衆人言しかども舊好を思ふが故又助命し大阪をも其儘に居城とし七十餘方石の領地をも進らせしは我に於て豐臣家に背く事おし然を秀頼には故太閤の遺訓に違ひ動もすれば我を召さん致さる、事度々に及ぶと雖も未だ若年成は兎角の沙汰に及すとの細談にて別に當り無りし旨を聞て片桐大野等心を痛め片桐重ねて正純に向ひ當地に久く逗留して種々辨解と雖も其後何等の仰出されもあし然る上之江戸に下向し將軍家の内意を伺ひ奉り重ねて御評訟仕つるべき由を申ければ頓て上野介是を内聞に達せしに大野所江戸に下向す共將軍家何の差圖か爲べしと仰せられしにより正純は又此趣きを市正修理亮に語る等、是を聞て甚だ迷惑す然る所七月末に成て大野所の仰せに市正修理亮等久しく當所に滞留す

るも早秋熟の時節と成ぬ彼等駿府に滞留するに誰が差圖成やと仰らる是を聞て各々驚き然
ば修理亮は歸國し市正一人逗留し猶大御所の気色伺はすと且元は駿河に止り治長は
子の驛を發足す

○大藏卿始め三女駿府へ下向の事并三女片桐を疑ふ事
然るに大坂には兩使下着して數月を經ると雖も是非の沙汰なき故秀頼公も御母堂も最良東
なく思召八月上旬に重て大野修理亮が母大藏卿の局并渡邊内藏助が母の正榮尼筑後守の
母の從二位の局等駿府へ下向す前々成ば直に御城へ參ると雖も今度は御機嫌宜からざる山
を傳へ聞其上市正も前部川を隔て徳願寺に逗留す旁々以て恐れありとて七間町と云所に旅
宿して上野介へ此趣きを通する上野介より阿茶の局へ案内申入しにより阿茶の局は早く
も此事上聞に達し早々御城内へ參るへき旨阿茶の局より申送る是に依て三女は參殿すれば
早々奥へ召遣され大坂所仰も秀頼并に母堂姫とも安泰なりや又淀も平常健かにて滿
足と御懇切の御意まで伺の如く御機嫌あり此時大藏の局始め申けるは今度大佛殿の鐘の銘
は韓長老が撰文の不都合より御機嫌悪き由秀頼公并に御母堂姫君等御石如何ばかり御機嫌
の由申上ければ大御所苦からざる由仰られ御機嫌平常に變る事なし因て三女も先は安堵の
思ひを爲早速に此等の由を大坂并は市正方へ申送る扱八月の末の事か三女申は今御野の
時節來りぬれば三人の大坂へ罷り上り御機嫌申し御事を秀頼公へ申上度由を伺ひければ
大坂所仰らるゝに折角遠路を是迄參る上はとてもの序に江戸へ參り大坂の景況を御覽
へ細々物語りし又關東の形狀をも歸城の上御母堂姫等へ申上との御意にて傳馬以下の事迄

る然るに沙汰有しかば三女は直に江戸へ下向致しける然るに九月上旬に本多佐渡守正信
并は天海上人見舞として徳願寺に致り種々物語の末正信申けるは今度鐘の銘に關東關伏并
ひに棟札の書様武器を調へ浪人を集め合戦の用意ある事願然として云譯の辭無らんか然ば
大御所の御憤なり何れの日にか散せられん大御所の思召も只今の如くんは近き中に兵亂
起らんと御推量あらせらる貴殿忠を思はば深く諒り遠く感はかつて天下を鎮定すへきを申
上られよ定めて近日仰出さるへしと言は片桐暫く愚案して云様天下を鎮定すへき計策愚案
に及す願くぞ敬を聞ん正信然は我心も考ふる所を試みに申へし天下の人民安堵して世上翽
翽成んの策略第一は秀頼公居城を他國へ移し給せんか其謀之大坂の城は天下無双の名
城成は世人疑惑を爲秀頼公謀叛を企て籠城の用意有由専ら風聞す依て他國へ移り給はば此
沙汰無らん第二に秀頼公と將軍家とは御舅の御好在します然と折節は關東へも御下向在ま
して水魚の思ひを成給はば諸人の疑ひ顧に散せんか第三に淀殿は將軍家の御臺所とは御姉
妹なり浮對面の爲は天下安全の計策成は東國に下向あらば世人疑ひを散せられんには
是計策の基礎たるへきか右三ヶ條何れ成共君諾ひて秀頼公を謀先奉つり得心に於ては天
下は最も太平なるへしと語りければ天海上人も正信の思慮に天下を鎮定するの計策なり
と語を添ければ片桐坐を進み只今の物語は國を安し天下を治るの道と雖も此三ヶ
條は苟且乍ら天下の大事秀頼公一世の浮沈に關する儀なれば臣下の身として計らひ難しと
申けるが又心中に思ふ様此事は本多が私しの語に有へから申定めて大御所の内意を受けて
斯中ならん此三ヶ條一も承引せざれば忽ち事の假となり何ぞか計策有へしと思案し中に

語を變て秀頼公の御心底聊かも不軌を謀の御所存なし然る上は天下靜謐の基と聞召れば尋
 せ御承引無からんや能思慮を回して三ヶ條の諫言仕つらんぞ申ければ本多も天海上人も然
 るべしとて各々宿所へ歸りけり同く五日には本多上野介方より市正の許へ使者を遣し徳願
 寺は餘程遠くして折々の會合も不便故東西の屋敷に移らるべしと申送りければ片相頼て
 彼屋敷へ移ける九月九日には重陽の嘉儀として出仕の大名群をなす夜も入て市正大御所の
 邸前に出立目見せしかば大御所久敷院府に滯留の勞を慰められ次は此度の一儀を尋ね給ふ
 抑々頃年秀頼を頼む浪人よは扶持すへしと觸言す故に日本國中の破落者大坂堺に充満し或
 は夜盜強盜し又は往還に出て旅人を惱そ由は何の爲ぞや其上秀頼の近臣等事も無き武
 を調へ駈引を習す由凡泰平の世には劍を鞘に納め弓を箱にし萬民を安堵させへきに何の
 必有りて兵を集め武備を調らる、や是等不思儀の所爲と思ふ所も今度大佛の鐘の銘も予が
 の字を以て國家安康の文を書せしは我名を切て國を安んずると言訓なり斯る調伏の儀則
 たる由世人是を謠歌す此故に兵を集め武器を調ふるは逆の企て有と言事を知れりや仰右
 に片桐謙んで申けるは秀頼公浪人を招集らる、により日本の賊徒等大坂堺に充満して往來
 の人を惱す由御聞に達する事秀頼公の不祥と申べし其故は假令叛逆の企て有と言其諸
 人或は山賊強盜の類を以て如何して將軍家を調し一口片時も挑み戦ふ事の以へきやと若
 叛の志し有は従はざる迄も故太閤恩顧の輩らを相語ふへき等なり是は諸國の大名等に觸ら
 るる廻文あるや否やを御紀明を遂らるへきに浪人數多大坂堺に唱まり有を以て不審を蒙
 ると雖も今按するに大坂堺は土地廣く物價下直にして貧困の者平常の産業に安かるへし又

遠國の従らは其故郷に於て世を消光に易きも其國の領主の他は仕官を求め青雲を望む道も
 なし然ば大坂堺は西國の大名江戸駿河に到る往返の通路なるが故に此二ヶ所渡世に易く主
 を需るに便なるにより浪人集りしなり又鐘の銘は韓長老が書にして聊も秀頼公の御存の事
 にあらず又韓長老心有つて是を書しにも非ず只不祥の語自然と有し而已思ふに世人銘の句
 毎に種々理を付て誦歌せしを遂に御聞に達し御不審を蒙りし事兎角秀頼公の御不運と申へ
 きか實に君を調伏し奉つるべくんば何ぞ人の見易き處の鐘の銘を書申さんや異心のなき段
 宜く御賢察下さらば公私の大慶此に過べからざる由言上す大御所宣ふに鐘の銘に巧なき由
 小供之知らず心ある輩ら誰か之を實とせんや併し汝が辨解一通り聞えたり然ば市正が申所
 を用ん予齡七旬に餘りたれば予命久しかるべからず予常に思ふは秀頼も追々成長に順ひ國
 家を治る事を心懸んと推量爲しに然はなく却て亂を招き我在世の内すら斯の如し死後秀頼
 と將軍とは聲刃の中必ず不和と成て天下の兵乱實に鏡に見るが如し汝深く謀り遠く慮はか
 りて後世迄も秀頼と將軍との中水魚の思ひをなし永く泰平の計策を致せよとの仰に且元畏
 まり天下安全の計策某しが愚案に及ばず但秀頼公居城を他國に移さるゝか又は時々關東へ
 御下向在すか御母堂淀殿を質と爲か此三ヶ條の内何れ成共秀頼公承引に於ては天下の人疑
 ひを解べき事に候へ共此三ヶ條は皆容易の事に有ねば大坂に立歸り候はずんば私しに定め
 難し然共淀殿御下向の事は叶はざる迄も愚案を以て諛言仕つるべし其例は昔秀吉公と小牧
 合戦後御和睦調ひ秀吉公の御母堂大政所を人質とし遠州沼松に遣さるゝの例あり秀吉公だ
 も斯の如し况や秀頼公に於て之を定めて承引有べきかと言上す其後市正本多上野介に對ひ

若淀殿御下向に於ては江戸品川の邊にて四五丁の御屋敷を賜り新邸を作て渡御有様に致し度旨申ければ大御所宅地の事所望に任せらるべしと仰出され其時の日に永々の滞留其勢然こそ有ん今年も中過て最早鷹野の時節に成ぬ市正は早く罷上りて休足すべしとの御意にて紅裏の衣服を御手自下し置く其後市正持病再發して顔色快からず然ども拜領の御小袖を着し重ねて御目見す其時の仰に之且元は病中と雖も遣し衣服能似合て一層若やきたりと宣ふ或時市正上野介に申けるは御暇は賜れ共病氣未だ全快せず五六日療治を加へ少も快くは出立せんを伺ひければ心任せにせりよの事なと豫て市正は本多佐渡守と縁者成ば彼一族等も大に心配して日々市正が旅宿へ到り其病中を慰めしと又大御所よりも度々御使にて市正が病氣を尋ねられ御菓子など賜はりけり扱市正が病氣追々快よければとて十三日に駿河を發足す又大藏卿正榮尼二位の局の三人は市正より先に江戸より駿府へ歸りて直に登城し江戸表の御物語などにて阿三日御城内に滞留す夫より本多正純に就て御返事を伺ひし上に歸らんと云しかば正純此趣きを御聞に達しけるに大御所何故に今更秀頼公を捨られんやと而巳にて外に御事なし依て此趣きを語りければ三女悦びて即日駿府を出立す扱市正と病中成ば道中も餘に行故遠州濱松にて彼三女は追々片桐に對面して二位の局申けるは豫々申しは大御所許御憤怒在すと世の風説したれば秀頼公も御母堂も幾程か御心を惱され我々も如何成憂目にか逢ぬらんと一向心を精慮しに思の外に相違して餘り不審に思ふと云ば且元否とよ此度三ヶ條の御所望あり夫は秀頼公他國に御移り有か然らずんば御母子の内にて御一人東國に下向し給へとの事なり若此儀御承引なくば事の破れと成なん此上は御母子の

片桐と不和あれば好機なりと心に悦ひ尙種々に讒言を構へたり斯共知らぬ市正は京都へ到り板倉に而會し駿府にての事を語り九月廿三日大阪へ歸り出仕の上彼三ヶ條の儀を言上す秀頼公は豫て大藏卿を始三女か辞を信じ給へば片桐が申をは疑ひて容易に異見を聞入給はず然るに淀殿より使をして仰らるゝは我未だ其許に對面せず斯の如きの一大事は人傳を以て聽へさす非す何れ吉日を撰ひ對面の上直に聞取其後駿府への御返事を兎も角も計らふべし先宿所へ飯て休息致されよとの事なれば再度秀頼公へ言上するに彼三ヶ條の儀は全く某しが心より出しに非ず大御所より内意成ば此中若一ヶ條も御承引なき時は忽ち事の破れと成べし能々思慮を回され御返答仰進せられ然るべしと申上其儀市正は退出しけり

○片桐大坂城に立飯る事 大野渡邊等の奸臣片桐を讒する事

然程に秀頼公は大野修理亮治長木村長門守重成渡邊内藏助等を御前に召出され今度市正若し駿府の仰と号し三ヶ條の難題を申も皆是一大事成ば返答の御思慮及ばず幸ひに織田信雄入道常真當地に在行て密談すべき由仰ければ三人畏まつて常真の亭へ行仰の事を委曲に話して後治長申様今度市正御使として駿州に下向し秀頼公の浮沈を宜く執成ならんと思召れし處豈計らん本多佐渡守が縁者たるを以て諸大名の賄賂尊敬を受關東へ一味し上へも伺はず御母儀淀殿を八賢として東國へ下し參らせんと相計り屋敷迄も相定免たるは是下として上を計ふ其罪死刑に當るか然る上は市正を誅し關東と御手切を御企て有て然るべしとの事に常真は風々首を振否とよ其企て宜からず抑今の世に關東へ對し合戦せん事富士の山と云を載へ石を抱いて淵に臨むが如し其上市正は故太閤の取立の武士智有て且忠心篤き者

中にてひ一人關東へ下向遊される外有へからすと語りければ三女は驚き乍ら何となく宜
 に持成貴殿には未だ血色も宜らねば後々後より上り給ふへし我々は先へ参らんとて別れけ
 り大藏卿は正榮二位の局の兩人に向ひ申けるは駿府にて此事を傳へ聞と雖も争か下として
 斯る事を計らひゆさんと疑しく思しに今更思へば空言に非ず駿府に滞在在中も度々は前へ
 田種々の出物語も有しが彼三ヶ條の事は一度も仰なく推量するに市正關東一味して計ら
 ひし成へしと語り合翌朝飛脚を大阪へ出して市正が謀叛の由を注進す（或説に江州土山に
 て三女は追付市正は夫より京都に行女は又伏見より船にて大阪へ行と云り）九月廿二日に
 市正京都に到り板倉伊賀守と相談あればなり此日三女等は伏見に到り夜船にて大阪へ歸り
 秀頼公并淀殿へ目見致し市正事如何成譯か關東へ一味し本多佐渡守と縁者なる故彼一
 族は言も更なり諸大名に爲敬せられ種々の賄賂を仰問もなきに三ヶ條の儀を言上し既に
 母儀を質として關東へ下し参らせんとは屋敷の事遂もは前に於て相定められし由我々三人
 も久く駿州に逗留して折々大坂所のは前へ出たれと三ヶ條の儀夢にだも承まはらす是且元
 が心中より出し儘にて關東への爲にする所あり又市正は渡々は城へ招れ御大所は手自小袖
 を賜はり病中も度々使遣されは菓子も賜はるなど我々駿州にて悉く聞糺し候と申上り
 れば淀殿大に怒り罵罵給ひ我は故太閤の妾成とも正しく秀頼の母あり其上信長が爲には姪
 軍家御臺の姉妹たり然るを市正我を卑め上にも伺はずして執計ふ事且は秀頼を裏切り擲擲
 振舞と或は怒り又は歎きて仰せければ秀頼公も忿怒に堪はず争で我が母を關東へ下し恥を
 後世に遺せへき乃至母子城中にて死するに如しと宣ひければ大野修理亮渡邊内藏助等元來

なり今度駿府の儀も何様遠き慮ばかり有ての事成んぞ存せらる能々糺明もせられは女儀の
 言語を信せられ可憐忠臣を誅し給は後悔とも其益をかん殊も彼正榮は足下の母成は
 ふべきまわらざれ共都て女奸にして少の事も嫉み憐れ飾て天下の大事を引出す者成ば能
 尋られ然るべく存するなり若片言をのみ信せられ忠臣を傷は後の嘲りを如何せん願
 は七組の内然るべき人を御使として遣され仔細を逐一尋られ其返答次第により篤と御思慮
 有べしと申されければ三人は暇を告て歸り此趣を言上す秀頼公實も思ひ給ひ早速遠水
 甲斐守時之を使として市正が邸へ行淀殿を關東へ下し参らせんと駿府へ申たる意趣を尋ら
 る。市正申けるは今關東より仰出さるる三ヶ條の中一も御承引あくんば忽ち事の破れ
 と成ん其故は秀頼公の近衛并に家中の輩ら武器を懸へ掛引を習ふ事關東へ聞也は一ツ又近
 衛秀頼公諸浪人を集め大坂堺に充満して人民に黨を爲すは兵を集るの證據是二ツ又鐵の鎧
 に御諱の字を彫刻せし事天下人民の専ら言所是調伏に極れり此三ヶ條は御不審を蒙りて隙
 するに術なかりしを且元愚案短才を竭し漸々是を申開く其後本多正信天海上人來て淀殿下
 向の事を相談す是は御所の御心より出しも同様の事なり併大藏卿正榮等は聊かも其事は知
 るべからず故に市正が斯計らひたりと申上しと覺えたり又淀殿邸宅の事をすたるは我遠き
 慮ばかり有てなり其故は事發りし時當城は無双の要寄たれ共大名數家の加勢なくば一戰も
 も及ばず敗れん必せり然當時兩將軍家は民を撫し士を愛し賊徒を追伐し日本國中此君を欣
 慕諸侯は言も更なり賤き百姓迄も其德に懷き隨ふが故に諸國より駿武の兩國へ参勤する大
 名も數を知らず百姓は他國より此兩國の民たらんを願ひ居を移すも多く兩將軍の威ひ廣大

成は容易に今大坂に兵を集る共天下の諸侯一人も来る可らず尤も浪人神主山法師山賊強盜の輩は馳來らん成と彼等の力を藉て關東に敬せん事彼蟻螂が斧を以て陸軍に向ふが如し是等を思ひ急難を通れんが爲淀殿御下向の儀を諸品川邊に於て屋敷を所望せし譯之彼地は平井成す故に四五町も有地所を請取ば地形を爲と披露して日を経過ば必ず一年は経べし其後大坂より材木を廻すと又言又普請すと稱して年月を経ば三四年は費すべし其上普請出來す共淀殿病氣を號して又下向を延ん其中に諸國の大名等兩將軍を恨み奉つる様に謀計を設け諸侯を味方へ引入士卒を懐け郷民等を愛撫せば自然と味方へ志さしを通ずる者多からん加之大御所の齡既に七十有餘なれば幾年か存命有べき其中に他界わらば必らず天下は變有ん然ば時分を見合せ謀略は何程も有べし茲を思ふが故斯計らひしを却て御疑ひを蒙る事我忠節水の泡と成説人の爲に我志さしを君に述るを得ず諸事貴殿の計ひにて宜く言上せらるべしと事明白に述べしかば速水甲斐守之を聞忽ち疑ひ解て其理に伏し早々歸り御前より出市正か御所一々道理に適ひ天晴の忠臣なりと猶も委細に言上しければ秀頼公實もと宜ふ時傍らに扣へし修理亮内藏之助の兩人語を崩上を侮蔑にして我意を働か罪を蒙るに及んで已が誤りを謝せんが爲恰惻に任心に思ぬ忠言を吐は其罪經からずと云は織田常真申されけるは其人を惡むが故是を非として罪を定めなば後必ず秀頼公の御身の上より凶事出來ん縦ひ市正が忠節の心なくして此事を計ふ共理に當る處を是とし非なるを非とす平常の愛憎より理の至極するをも捨んは後世の誹謗も有ん詰問何れ共定め難しと憚る處を言葉に秀頼公も思ひ感これ又一座の面々は太野渡邊等の威勢に怖る、か御思案に及さるか何とも辭を出す者な

かりし所に木村長門守重成進み出只今速水か申旨に付愚案を運すに初め大藏卿正徳后二位の局等市正に先達て大坂へ歸り市正我意を働く由を聞先入主となり市正を憎むが故に彼が言處を疑ひて是を非と聞は日頃彼と不和たるに依てなり我聞忠臣は身の爲にせず君の爲にすと仰々今度駿州にて大御所三女に御對面の時聊かも御不快の御氣色なく本多に命じて天梅上人等必心得の様に三ヶ條の事を申聞たるを市正此儀言上せしかば悉皆く御意に適ひ恐篤の仰を蒙りし由三女は是を知らず怪み君も臣も且元を疑へり古へ漢の張良が謀略にて楚の臣范増を斥け楚國を奪ふ今市正は秀頼公の長臣智謀の棟梁たり故に本多等の智臣是を計り片桐を秀頼公の命に反かしめば城中の雜ら心々に成て自然滅亡せんと巧しなり凡徳を荷ひ恩を戴く者何ぞ不識の行ひを好ん況や片桐に於てをや能々御思慮有へしと憚る色なくかければ常具も感し秀頼公も木村が辭に隨ひ御返答有べしとの様子を見て大野渡邊の兩人其儘立て閑處に入密談しけるは今日の評定に常具長門守等か心底を案するに常具は往昔織田信雄と申せし時故大岡秀吉公と不和に成て合戦に及び廻文を以て諸侯を催促すと雖も秀吉公の猛威に恐れ織田家恩顧の輩らも信雄の催促に應せず悉々秀吉公に属しければ信雄逆も敵し難くや思ひけん徳川家へ加勢を乞けるに徳川公聞し召れ天聞の人秀吉に與して信長の舊恩を忘る、と道にあらす家康味方致さん成は必ず心を勞せらる、勿れと仰られしが下牧長久手の小戦も池田勝入等を討取秀吉公の大軍を追靡かし秀吉公和を乞給ふに及て國を別て信雄も授けらる斯れば信雄は大御所の恩澤を蒙る事山よりも高く海よりも深し關東の最負を爲は現然たり故に常具か申慮信じがたし木村重成は秀頼公の御乳母子たるに因て御

寵榮深ければ自然と其權威は恐れ利發の人と諸人彼も阿り賛れば恐にも是を眞實と心得繼
 かの文學を鼻と掛ての高慢而動すれば異國本朝の古語を引分別面するも今に初めすと雖も
 彼は原來憶病者なり其譯は先年御同朋の齋阿彌と口論し扇を以て面を擲る、時木村か言汝
 は法師成は相手と爲に足す我一命は君に奉つる成は一朝の怒りに其身を滅すは不忠なり是
 勇士の取さる所とて止ぬ其後俗室にて人々無禮を爲掛られし時も咎むる事もなく歸りた
 り然と人彼か臆病を却つて忠節成と言爲す今案するも市正を誅さは忽ち兵乱出来ん夫を恐
 しく思ふか故に例の臆病より彼穩便の沙汰を爲ならん逆臣を殺すは忠あり其上軍門に御天
 子の詔りを聞すと申傳へたり秀頼公も伺はす其片桐を城中は召寄薄田隼人正兼相石川伊豆
 守貞政等の力士一兩人に心を合せ誅すへしと相談決しければ秀頼公の御召と詔り明廿四日
 片桐出仕致すへし關東への御返答を予遣はさるへき由予送りたれば片桐は欺るへしとは毫
 知らず出仕の仕度を爲居たり然程に織田常真は秀頼公か母の外戚なれば石川伊豆守大橋兵
 左門方より封書を持參る常真披見ありて後火中へ投す同廿四日の未明に一書を家人雅樂助
 に持せ市正方へ遣さる折節市正は今出仕せんと立關迄出しか常真の狀を披見し内に入り頼
 て雅樂助を闇室に招き密談數刻にして後市正家來小島庄兵衛を舍弟主膳正の許し予遣す趣
 きは秀頼公の近臣等公儀を籍て私しの宿意を達せんか爲に種々の讒言を構へ市正罪なくし
 て今日既誅せらる、由或方より其告あり依て我疾と稱し引籠若討手來らは一矢射て尋常
 に切腹せん所存なりとの事主膳正驚きて急ぎ市正か屋敷へ赴けり市正は使を以て病氣に
 付辱城成難き趣き大野方へ申送りけるを聞大野渡邊は大いに望みを失ひ先日の密談陳願せ

しならんと思ふものから却つて常真并ひに石川等を疑ひ尙も密議に時刻を移す同日市正は
 使ひを京都板倉伊賀守方へ走今度關東の仰せを秀頼公へ申せし所議人數多有つて既に某し
 其か爲誅せらるべきに定まりぬ某し忠有るとい毫も不忠の舉動なき所頼りに殺害せんと
 す是君たるの道を失へり故に我屋敷に引籠居と雖も萬一討手向は、援兵を給へと申ける
 茲に又織田常真の舊臣津田與庵も板倉方へ來り同僚中入たれ之伊賀守驚いて船を大坂へ遣
 しければ常真は直其船に乗て京都へ來り急難を逃れんとて津田の宿所へ潜みけり猶又大
 坂城中何となく物騒敷市正の邸には舍弟主膳正貞隆子息出雲守孝利以下の一族郎黨我遅れ
 しと馳集り薙々と物具して弓矢鉄砲を取揃へ今や來ると門を固めて扣えたり城中にては驚
 き先使を片桐主膳正貞隆が方へ遣し申けるは主膳正は取分秀頼公の恩を蒙ると厚し往昔秀
 頼公痘瘡を病給ひし時危篤の慘容休成に及んで殉死せんとすたりし其忠節を感しられ常
 君の傍らに同俵して御恩を蒙り乍ら惡逆の兄に與し秀頼公に叛くは何事ぞ疾々返答致すへ
 しと言貞隆報して兄市正儀忠あれ其毫も不義なし然るを讒者の舌頭に掩はれ逆臣の汚名を
 蒙り未だ其實言をも糺さず遂に無實の罪を得んとそ弟の身として之を觀し忍びす故に兄弟
 死を俱にする所存なりと答へけるに因て城中は七組以下軍勢を集めたり茲に織田有樂が
 宅は市正か隣家成け城中の兵を此所へ操出し市正は密にや戦はん又は敵の來るを待んと上
 帯をも解す廿四日の晩景より翌廿五日の巳の刻頃迄白眼合てぞ居たりける茲に秀頼公の近
 臣今木源右衛門正祥と云者市正が邸内へ來り貴殿之大阪棟梁の臣成に何の仔細有て舊恩を
 哀思を忘れて叛き給ふやと申ければ市正是を聞秀頼公讒者の舌頭に感され罪なくして市正

自害に及ふと答ふるに今木再び言三軍の師も狐疑より破ると云ば今の時世深く人を疑ふ時は決断に惑ふ者なり某しは毛願異心なし隔心なく心底を明し給へ貴殿の仰により我又了簡ありと言ければ片桐莞爾と笑ひ能も問れし者かな只今も修理亮内藏助が人数を向なべ快よく一戦し討死を遂んと語るに今木點頭て我思ふに城中に梅門八ツあり其内二ツは有樂と七組が詰る所其餘は皆貴殿と御舎弟が預る所あれば夜中人数を率て密に城中に入本丸を固炎又西の丸は門番を追立城中を取締め大野兄弟を取て押へ大坂までには毫も逆心なきを關東へ陳謝し若夫にても承引なき時は此城は楯籠り一戦に勝敗を決し名を後世に顯さんこそ武士の本分とも云んとすければ片桐は問も敢て其謀計は某しが爲事に非ず假令悪心なればとて城中へ討入誅を加へなば是上を蔑し謀叛人の汚名を負ん某し全く秀頼公に叛くの心なしと説人今も寄來らば一矢射て腹切んと思ふのみと聞て今木重ねて秀頼公に別意無んばは質を出さるへさやと問は片桐其儀は勿論と計にて決心の体今木は其儘立歸り秀頼公の御前へ出て市正が心底を具に言上しければ秀頼公も心解て仰らる、に彼は故太閤の寵臣にて愚有て私しなし何を關東へ一味せんや然るに不慮の謬誤により討んとせしは我過失なり片桐異心なくば秀頼も亦何を償はらんと宣ひて自筆の帛書を下されければ速水甲斐守時之今木源右衛門正祥（或説に醫師玄珍甲斐守に添て行しとあり此玄珍後遺俗して深井源右衛門と云へり市正が宅へ持參し仰の旨趣を傳へければ且元感涙を流して悦喜たり兩人は歸て此由を言上す市正よりも使者を以て只今速水今木の兩人には請上しをば聞届け下さる、よ於ては織田有樂の屋敷へ籠置せ給ふは人数をば引拂下さらば私し方の人數をも退參さす

べしと申ければ城中評議の上人数を召歸さる是に依て人々安堵し大阪市中漸く鎮りぬ斯る所へ大野修理亮治長渡邊内藏助の二人は秀頼公と市正和睦ありと聞より秀頼公にも同は諸浪人を集め市正が家來の詰たる門人の等を追捕ひ遂に本丸に入兩人が手にて門々を固め率や市正を討んと議す一旦鎮りし城中の輩ら今にも戦ひの初る成んと上を下へと混雜す市正が郎等はを聞や否取物も取致す主人の宅へ來り此事を注進しければ追て一族の輩ら馳集り今や寄來らんと相待ける其時片桐下知して敵攻來る共此城に向て鉄砲を放す勿れ靜りて待請若崩へ乗る者有は付落し時分を考へ一度も二度も討て出死物狂に働くへし弓矢取身は名こそ惜けれと舎弟主膳正子息出雲守をも招き最期の酒盛して用心堅固に楯籠る抑々市正は秀吉公の臣にして賤ヶ嶽以來數度の合戦に武勇を顯し、大剛の者故寄手は其威勢を怖る、爲左右なくは寄來らす敵も味方も白眼合にて三日三夜を過しければ城中よりの人数は大勢なれと有名片桐故謀計に懸られかんと其を危ふみ怖れて攻さりけり

○片桐且元大坂立退の事并攝州茨木城に籠る事

格も片桐は速水の扱ひを聞て人々の安穩を謀り何ぞ乱を招んやとて送り來たる信濃守をも返しけり（或説に大坂を三里離れ松原と云所にて市正と修理亮と互の入質を取代たりと云り或は伊東丹後守堀田圖書助市正を送り大和川の境にて入質を取返しけるとあり或は七組の輩らは市正を送り御厨の邊にて互に入質を返すとも云り此説區々にして一定し難し）速水申けるは片桐當城に在ば亦もや人々種々の風説して騒動は所詮止へからず高野山に入て暫く罪なきを謝せらるへし伊東と堀田の兩人市正を送り進せん大野渡邊等を本城に居しめ



中島式部少輔氏種は櫻の門警固として青山民部少輔一重野々村伊豫守雅春具野豐後守頼包等は組中を引連て非常の準備を爲へければ心安く緩く退去し給へど語りけるに市正は莞爾と笑て然迄にも及ふまじ誰か片桐が行を道に遮る者あらんや假令有とも恐るゝに足す然と家中の妻子を引取事急に成難し一兩日も過て退去すへしと答ければ速水も實もと言て己が宿所へ歸りけるが大野渡邊使を以て速水方へ申に兎に角片桐が當所に在故に城内未だ靜穩をらす早く邸を出て高野山へ赴くへ言秀頼公仰ありと有は速水は是を片桐へ申通るに市正は大佛建立の算用政所の勘定等分明ならず然十月五日は前よりは出立爲る事能はしと返答し願て舍弟主膳正並に子息出雲守を招て我當地を引拂ふは來る五日と約せり思ふに大野等定て我兵を退討ん總て軍は不意に起るを以て利を得る事多し然は朝日と當地を獲し茨木へ立退へし假令敵我を追討とも俄然の事故散合定るへからず然は最も欺き易かるへし味方の兵は弓鐵砲を組合せ一手宛に備を立五組に引分て線引に致すへし併し此事を士卒に告る事勿れ萬般敵より忍を入んも料難ければ其期に及んで觸示さん三人は心支度して未だ口へ出さねば知る人更になかりけり十月朔日に成ば片桐市正子息出雲守並に舍弟主膳正以下三百餘人皆に甲冑を着着弓矢を持鐵砲に火繩を懸玉造口を打出て白晝に兵を率河内へ廻り船に乗て取飼の河を越茨木の城へ赴きしが途中松原と云所を過ける時主膳正市正にやけるは身關東に與せずんば剃髮染衣の身と成て高野山へ引籠り何方へも屬せずして忠心を顯し給へど再三諒しかば市正答て否とよ以前成ば此方が辭に従ふへきも今は大坂を退去され露の命を繋ぐ爲に出家沙門と成りしと城兵の笑はん事の口惜さよ然ば茨木へ入城し大野渡

邊寄來らば其時は尋常に討死せんと言て其後は何共言ざりしと去程に大坂には思ひ寄ざる事成ば登破片桐寄來ると人々騒立門々を差堅め馬物具と譯して弓取者は矢を忘れ前後も別す狼狽感ひて誰一人市正を遮り止んとする者なく阿容くとして退しめける(或説は七組市正を送り御厨の邊にて人質片桐出雲守と大野修理亮の子息信濃守織田有樂の子息津田主殿助と取替しと云り)

○真田幸村父子大坂入城の事 并 和歌山城下通行の事

然ば片桐石川等は大坂を立退ければ城中大いに騒動し或は馬に乗或は歩行にて奔走する事實戰場の形状故是を見て市中は云も更なり近在近郷に至る迄すは事の起りしと周章狼狽家財知具を此處彼處へ持運び泣子を逆に脊負廻行すと其混雜容易ならず前代未聞の事ども秀頼公間召大野修理亮に命して町々へ奉行役人を置て制すれ共實に大水の溢るが如き動搖なれば諸人を遮り止むべき櫛もなし秀頼公修理亮を召て宣ひけるは今度の騒亂關東へ聞えなば定て大軍を向られん速く城中へ兵糧を取入籠城の用意すべしと治長長まつて大坂堺及び尼ヶ崎の川口に着置たる買買の米船を悉く買入れれば四五日の間廿萬石餘の糧米を取入けり其後諸浪人を招寄せられて然るべき由評議有て同日諸國又廻狀を遣されたり先信州上田の城主真田安房守昌幸が次男左衛門佐幸村は去慶長五年庚子の秋己が居城に櫛籠り石田三成に與しけるが石田滅亡の後父子高野山に登り父昌幸は慶長十四年に病死し幸村は父が住し九土山に閑居し世に云具田紐を織出し細き煙りを立居たりし處へ明石掃部介來りし時大坂より事有時は秀頼公御味方として馳参るべき旨諒て誓約せし事なれば今度も掃部介彼の

閉居より迎へけり斯て真田幸村は大阪の使者明石掃部介全住を歸し我が心服の郎等主従を招きし我もくゞと集りければ幸村諸士に向ひ某し此度大阪秀頼公に頼まれ奉つれば格式を立て入城せばやと思へり汝如何と有ければ諸士何れも驚きて言を發する者あり處より息大助は父の前に出て是は父君の仰せなれども當國和歌山の城主淺野但馬豫て父上に心を付山本九兵衛なんど親ふ程の事あるに今度格式を立て大阪へ入城あらんとあらば和歌山より討て出喰止んと必定なり其時手勢少なければ戦ひ難儀なるべし是謀計なきに似たりと申にぞ幸村莞爾と笑ひ然思ふも道理なれども幸村上田を退城せしより此九戸山に住て數年張込し張拔筒は何の爲ぞや和歌山より討て出なば幸ひ和歌山を攻落して根城とあし夫より大阪に赴くへし然れ共彼に上田主水龜田大隅と云家老あれば追討は掛るとも討て出るとのるまじと云を聞て皆々安堵し夫より早く用意を整へける頃慶長十九年九月廿五日幸村は紺糸威の鎧に鹿の角の前立打たる甲を着し三尺八寸青江村正が打たる大太刀一尺三寸の差添何れも赤銅作あるを備采配を持馬は信濃鹿毛と云逸物に跨り二間一尺皆朱の鎗を取て徐々と乗出す續いて嫡男大助治幸卯の花威の鎧兜は脱て高紐に掛白綾の鉢巻をなし緋羅紗の陣羽織を着し鹿毛なる馬に跨り先に六文錢の旗金の唐入笠の馬騾を押立穴山小助淺香郷右衛門上田久左衛門近藤無手之助を先陣となし由利鎌之助三好清海入道爲三望月卯左衛門等は小荷駄組を守護し九土山村を出立して和歌山城下を指て行列す此由を近邊より津進しければ淺野但馬守大いに怒り諸士を真田は大坂へ入城すと見たり一人も残らず討取ると下知有を上田主水龜田大隅兩人諒めける様真田は古今稀有有る智將あれば並ぶの事にて討取

んと覺束なし然も僅の小勢にて城下を押通るは定て謀計を設け此城を攻て根城とせん爲ならん只城下を通し峠迄引退きし時分追討を懸給へ關東への申譯は是にて濟へし今城中より討て出なば却て敵の謀計に陥るへしと申ければ但馬守も無念ながら諒に從ひける真田は辰己の板橋を渡り和歌山の城下を通るに一貫目筒三貫目筒を兵士一人にして三四挺死荷ひ行ければ城中より見て張拔とは夢にも知らず皆々強力の勇士も有る哉と舌を震て居たりしけり斯て真田は松原に到る迄易々と城下を越過し新在家に到りけるが幸村此邊の百姓を集め紙幟を山々峯々立置圓を作れと下知し由利鎌之助元幸望月卯左衛門幸忠の兩人に命じ五百目一貫目の大筒十挺殘し置左右の林に埋伏させて真田は備を立て峠を指て打立けり驚破時分は好しと龜田大隅上主水森太夫黒川左京千餘人にて關東への申譯にと追討す既に鯛の瀬を渡り新在家に掛る處に山々峯々一同に圓を咄と作りける其聲數千とに聞えける故驚破真田が引返したりと聲き立て攻寄見れば只徒ら旗指物はかりなり龜田大隅大いに笑ひ幸村智ありと聞しが何故斯處なるぞ是等ハ赤子も知る偽りの計畧斯様の事と恐れ引取龜田に非ず猶真田を追討よと進む處に此方の林の中より一聲の鉄砲響を相圖に伴ひ張拔筒五挺轟と打出せば何かは以て堪るべき一貫目筒に打倒され黒川を始め四五人黒煙と成て倒たれば舌を震はし魂ひを冷し龜田大隅引退かんと爲處を猶も大筒五挺一度に打ければ又々五十餘人打倒され紀州勢は遠々に和歌山へぞ歸ける由利鎌之助望月卯左衛門勝圓を揚幸村に馳着行列を立岸和田に着にけり岸和田の城主は小笠原大和守時隆なり此城下をも押通らんと思ひ淺野六郎兵衛を使者として此度秀頼公の仰を請て真田左衛門佐幸村大阪

へ入城致しに候付御城下を通し給ふへし若御許なき時は一矢仕つらんと申遣しける小笠原
大和守之を聞て返答には御念の入たる使者あり神妙に城下を通り給はん事勝手次第たるべ
しと申ける故に候て易々と眞田は岸和田を越て堺より天王寺に着にけり大阪城内には明石
掃部介和久半左衛門三百餘人にて迎ひに出願て大手筋より入城するに秀頼公玄關迄出迎ひ
給ひて幸村を伴ひ千艘敷にて御蓋を下さり軍議評定にと及ひける

○大阪諸浪人を召抱ふ事并烏合の者評議の事

茲又長曾我部宮内少輔盛親も岡く石田又樹せしが軍破れし後本國を没収せられ京へ登り
相國寺の門前竹林の中に幽ある家を造り村の幼兒を集め手躰を教へ自ら幽夢と名乗居たり
し所一朝甲冑を着て出ければ近邊の者大に驚きしが今出川邊よて三百人と成伏見へ來し頃
之千騎にも餘る程の人數を連て大阪城へ入る毛利豊前守勝重は山内對馬守忠義も預けられ
土州に配流の身ありしが或夜妻に向ひ我は謀叛人石田が徒黨成は斯る目に逢も元來覺期の
事なれど罪なき其方や稚き者斯遠流の苦みに逢事の體懣さよ我思ふ仔細も有と短き言語
述難しと言は妻は聞て涙を流し凡妻たる者は夫を天とし何事も夫の心に順ふのみ何か苦ふ
侍るへき仔細を語らせ給へと言に豊前守大に對ひ然は語く聞せんと思へ膝を進ませて我
此處を逃出て直に大阪に登り秀頼公の爲に討死し名を青史に止んとは思へ共然すれ御身達
憂口に逢給はんと思へは心懸りなりと云を聞取す夫が武名を揚給はん其妻如何成思に逢
共更に歎くへきに非ず疾思立給へと勸れば毛利は彌々心を決し其夜船にて土州を遁出大阪
指て趣きけり茲又後藤又兵衛基次は素黒田の家來成しが主を恨むると有て本國を立退て返

に匿れ住しに黒田家より討手向ひ又兵衛が悍の通達れしを擲捕りたりとの風聞を秀頼公聞
て大に怒り給ひ大阪に住者は假令浪人よても此秀頼が民なり何ぞや黒田私しの意趣を以て
壇まゝに召捕は曲事ありと憤はり給ひしかば黒田も是を聞止を得ず一旦召捕し小兒は直に
後藤が方へ歸しければ又兵衛は是思ふ感は今度城中に馳付る其他明石掃部介全住仙石豊前
入道宗成御宿越前正倫元加賀大聖寺の城主たりし山口左馬助定弘細川與一郎興秋織田雲生
寺頼長京極丹後守同備前守石川玄蕃頃同肥後守石川帶刀北川次郎兵衛結城權之助伊木七郎
右衛門多田藤彌名島民部淺井周防守三浦飛騨守岡部大學稻木三右衛門南部久左衛門崎岡右
衛門新宮左馬助等思ひくゝに馳参る城中には烏合の諸浪人計りにては恃難し畢竟故大問思
願の諸大名を味方に引入すんば此も合戦叶ふべからずとて諸方へ密使を送り禮を厚くして
招がるゝと雖も應ずる者なければ先加賀へ使を遣せしも事成す依て今度は島津家久が方へ
も御書共々に正宗の小刀を添て遣されしも承引せず御返答申けるは庚子の乱も同姓兵庫頭
義弘儀秀頼公の御味方な参り命を蒙て戦ひしも軍敗れて後は代々の所領を没収せらるへ
きに格別の儀を以て其罪を宥られ義久家久も至る迄大隅薩摩を領し一家安穩も過すと一徳
川家の御厚恩ありと小刀をも返し参らせける其後は只毎日軍の評議にて其席へ新參の浪人
を數多召出され金米錢太刃杯を賜ひは懇志の仰あり是時木野主馬助治房座を進み出て申け
るは船場の町を警として要害を構へ東國勢と戦はん時便ならんと言青木民部少輔信重伊東
丹後守長實一同に申けるは老練の申傳ふるに密城に内の廣きは必ず持厭むと云り况や天下
の大敵を引蘭て戦ひ何時と言期も知ざるは兵糧費なれば聞人輩を引入んと然るへからず只

内を儉約にし合戦の儀然るへしと再三諫めたれど秀頼公聞入すして遂に船場へ碇を掛へ町
八百姓の中へ少々武士を雜てを籠置ける此時京都の守護たる板倉伊賀守勝重は家臣朝比奈
兵右衛門義次を謀者に入置しが初めは伊東丹後守長實が手に属して日々城中の景況を京都
へ津進す夏陣にも亦樋口淡路守雅兼が手に隨ひて委しく京都へ津進しけり

○中島一揆の事并 片桐の兵士等討死の事

茲に泉州堺の津には關東よりの代官柴山小兵衛止知を居置れけるに大阪より大軍押寄せ火
するなど沙汰しければ柴山は驚き人を茨木へ馳て近日大坂より大軍を差向られ堺の津へ放
火すべき由風聞あり某し小勢を以て彼大軍に敵し難し早々加勢を賜るべしとぞ告たるよ
り片桐は加勢を遣さんとして人数を催促す茲に片桐が家臣多羅尾半左衛門富田太郎助等は妻
子を堺の津に置ければ傍置に先立て彼所へ向ふべき由頼に望ければ彼等兩人を援兵として
遣しけるに大阪の通路は敵の爲に取切れければ兩人尼ヶ崎に廻り渡海の船を需むるに彼浦
は建部三十郎正勝守ると雖も小勢なり此建部は池田武藏守利隆が縁者たるに因り豫て關東
の命を受けて利隆が家臣池田越前南部越後等を尼ヶ崎の城に籠置て堅固しければ多羅尾富
田等建部に小船を借て打乗夜半に堺の津へ赴きけり然るに是より先に大坂より堺の津迄の
警固として赤座内膳直規極島玄蕃子重利父子を將として數百騎堺の津へ押寄せ彼地の商人今
非宗黨を捕へて大阪に送此宗黨は關東の最負を得たる者の山又代官柴山は是に驚き彼津
を出奔す片桐が家臣多羅尾富田等は是を知らずして代官所より到り門を叩けば内より誰ぞと
言て出けるに見馴る者甲冑を着て大勢居並ひ代官高木等は見えす早敵入替りしと驚き足

速に此所を立返にを敵は怪み捕んと追憶る故多羅尾は所詮逃れ難くや思ひけん今井宗黨が
家に走り入屋敷へ火を掛十月四日の曉天煙の中にて腹掻切て死てけり富田は此紛に何れへ
か逐電す片桐市正斯るへしとは毫知らず十月十日柳尾兵左衛門牧次右衛門を將として今村
三右衛門日比加左衛門十河久右衛門河崎五兵衛以上究竟の兵三十二騎鉄砲の者五十八騎兵
二百餘人先尼ヶ崎へ遣すに建部三十郎へ渡海の舟を借んと云を彼地の加勢池田利隆の家來
池田越前南部越後等評しけるは片桐は秀頼公股肱の臣として此頃迄大坂に在し故若表裏有
んも知れず是は船を借は後難免れ難からんとて門戸を閉て内へも入ねば茨木勢は力なく留
時長州村に徘徊す此間大阪の忍の者等修理亮に此趣きを告ければ此天の與へと悦ひて大
野が家臣米村六兵衛子息次大夫同市之丞を將として數百人神崎に赴く是より先野先村の内
宮多村の庄官三右衛門三ツ屋村五郎右衛門と云者ア由を聞て茨木勢を討止へきとを大野方
へ望ければ修理亮大に悦ひ米村以下軍兵に力を協すへしと命じける故に庄官等中島佃大
和田鹿島神崎の郷民共を催し木綿旗紙旗武庫山嵐を吹靡かせ其下に破具足を着し瘦たる馬
に繩手綱を掛て駑たる郷民鎧鎧を手に提げ茨木勢を目標て押寄せるよを椽尾兵左衛門牧
次右衛門等大に怒り農業を勤めとせし奴隷武士に對して何をか仕出すへき卒敵散して呉ん
すと馬の頭を雁行し聯ね喚き叫んで駆立ければ郷民等は勇氣も挫けて進み得る所に大
野が人数小驅吹田の方より二手に別れ押來り鎧先を揃て討て蒐りければ茨木勢少し猶豫を
見て最初追散されし郷民共雲の如く集り茨木勢を真中に取籠て討取んと争ひければ片桐が
入數二百餘人は命を度芥よりも輕んじ十字に破り巴の字に退廻し衝と駭抜て味を見万れば

僅に十人ばかりに討成れ猶戦はんと成けれ共郷民等は雲の如く群集り來ければ所詮此所
 しては防殿成難し幸ひ伊丹は要害の地なり彼所に於て戦へしと人数を懸め伊丹を指て赴く
 所に郷民等は鐵の如くに付來る又伊丹の郷民等も日頃片桐が下知を守るも大阪を恐れけ
 るにや門を閉て入されは片桐が人数は計方なく茨木を心ざし旗を廻す所へ大野が家臣米村
 六兵衛郷民等に下知し前途を塞きて攻立ければ數刻の合戦に倦疲たる茨木勢新手の爲に揉
 崩され四方八方へ散乱す郷民等は勝に乘し前を遮り後面を襲ふ殊に不知察内の茨木勢堀
 入沼に墜入て命を落す者も甚多なり此時片桐が家臣牧次右衛門父子柄尾兵左衛門今村三
 右衛門日比加左衛門十河久兵衛川崎五兵衛の七騎齋塚の邊に於て轡を引返し群りたる敵の
 真中に墜入千變万化の秘術を盡して戦へども大勢に敵し難く各々思ふ程戦ひ終に七騎の輩
 らは枕を刺て討死す都合武士の首三十餘を大坂へ獻じければ幸先立と悦びて
 米村以下の軍卒へ御褒美を賜り庄官二人其他武功ある郷民へ金銀を下されけり此日討出さ
 れし雜兵雜茨木へ歸りて云々の由を語りければ片桐是を聞て或は憤り或は討死の士卒を哀
 みたりしと

○大坂城中軍評定の事并 眞田後隊異見の事

既に中島の一揆等茨城勢と戦ひ勝利を得しかば大坂方の者其勝に乘東國勢何を恐るゝに足
 んやと腹を張力足を踏呼はり狂りて居たりける然程、秀頼公は彌々關東と手切に及ばざし
 かは新古の諸將を召集め軍の評定を聞るゝに大野治長一番に進み出て先年關ヶ原合戦の確
 大御所出馬進滞に及びければ諸將甚だ氣を屈せしと聞備々察するに大御所は臆病の大將な

れば大坂の騒亂を聞ば太々驚大して輕々數は兵を差向す定て世上の動靜を疑はんと慮るへ
 し其臆病神の覺ぬ先、茨木勢を攻落し其後安くし疾人数を京都へ差向洛中を放火し伊賀守
 を虜にして近國の小城を悉く攻落さは自から諸人秀頼公の幕下に属し徳川を倒さん事手
 の中に有と事も無けに申ければ眞田左衛門佐幸村原を據今修理亮の中さるゝ所を理有に似
 たれと餘り大略の策なり其故は大御所の生質耳臆病にして關ヶ原の役にも意りしより今
 度も亦進發延引有へさとの由是其一を知て其二を知らるゝなり是度の合戦關ヶ原より似
 らす抑々彼一亂は天下の武士東西に別れ且將軍供奉の諸士の中にも治部少輔に親き者過半
 相混して在が故暫く進發猶豫有し由某しの兄伊豆守信之が家臣父昌幸に語りぬ是に依て父
 昌幸は大御所の遠慮ばかりを感じたり何そを耳臆病と云んや夫右大將頼朝の御時より諸
 國の一揆騒動の節は輕く人数を發するを以て故實とす今兩將軍は能此理を察す況や慶長九
 年庚子の亂より以來天下の大小名悉く兩將軍に稱服し家風に靡く因て是度の事聞るなば
 輕く兵を發し急に取掛がんと謀らるゝし然を味方寛々として方一宇治勢多を越られなば夫
 が爲敵に氣を呑れ合戦最も難儀成へけれ之能々思慮有度と申にそ此兩將軍區々にして一決せ
 す時に後藤又兵衛基次席を進み希くは眞田と某しとに御人数三萬騎つゝ差向られ度然あら
 は宇治勢田へ對向て石の部宿より此方の在家橋等を殘らす燒拂ひ船を毀さ或は間者を敵陣
 へ遣し種々の雜説を言し先又は夜々敵陣を却かし心なく寐さしめずば極て短慮なる東國勢
 多分は退屈せん又木村が大野か兩人の内壺八は京都に向て板倉伊賀守に對陣して合戦を挑
 まば宇治勢甲の味方は後を懸念せず故に敵を防ぐゝ便利あらん又大和口の押は明石掃部

助長曾我部元親を遣さん其他七組の衆中へ百餘人御人數を差添られ茨木の城を押へ大野主馬毛利野前守兩人の中壹人へ七組の中を一兩人差添られ大津造の要害に據て砦を構へ味方の動靜を謀り弱き方を救はるへし然すれば東國勢勇み進む其長途を遙々來りし人馬勞れに臨みし而巴か殊に寒氣に向ひ働き自在ならず關東勢宇治勢田を渡り兼て日を過らば西國中國の衆ら同心して味方へ屬する者あらん又縱ひ宇治勢多を敵勢越るとも彼方討る者多かるべし最初より城に引籠り居らんは餘り甲斐なきかと言を聞大野修理亮再び進み出て宇治勢多に戦ひ勝べきの謂は何ぞやと詰るは與田答て凡兵の利は先んずる時之人を制すと云に非ずや抑々籠城は國を取合或は後詰の特ある時は利有今度の合戦は日本國中の兵を敵とし一合戦もせずして河容く籠城せば敵に氣を吞る成ずや誰人が味方へ屬して城兵を救はんや忽ち糶米盡て兵力衰へ或は降參し或は退思をし頓て落城疑ひなし宇治勢多も合戦し後藤の謀し如く關東勢大河を渡り兼て數日を過す程ならば近國は申も更なり中國西國へも使者を入て其動靜を探り故太閤御恩の輩ら功を得て誰は入坂に居せん又誰々は退思或は裏切せんと謀るなど風聞させなば人々心を變せんも計難し况や小勢を以て大敵を拒は大河を隔て合戦するに如き難所の味方壹人は常の二十人にも當るが故なり然に僅二里に足ざる城を命懸て楯籠らんに誰か味方に與せんや案するに長途を疲れたる東國勢寒氣に向ひ河を渡し中央に至る頃不意に攻掛り又三四町退きて堅く備へ所々へ伏勢を置職稍閑はならん頃俄然に敵の背後に襲ひ討ば後陣より騒ぎ立て敵軍途を失はんは必定なり其時正奇の兵を以て手詰に勝敗を決せん凡寒氣に向ひ水中へ入暫くして上る時は氣を發するが故暫時は手足

溫暖なるも三四町も歩行ば手足共に凍れ屈り弓矢を携帶劔戟を取能はず斯爲は戦ひ必ず利有ん其上若利なくは其時社籠城し何ヶ度も討て出又は夜討朝掛し敵を惱まさんと是武志の面目成へしと申ければ此論道理なりとて同意の輩も有ければ此日の討勝は孰れ共決せず各々退出したりけり

○大阪城兵持口を定める事并與田幸村砦を構ふる事

抑々大阪城は日本無双の要害にて西は海上漫々として波浪岸を漫し東は深地浩々として泥水人馬を絶北は大河を帯て曲濶盡の如し南一方は陸地なれ其石壁巍々として其壯觀威陽赫赫にも卓越天守は五歩に一樓十歩に一閣工を盡して雲に聳たり加之ならず外郭にも深く堀を構へ堀を結壘を高ふし堀を塗迫間繁く穿ちて鉄砲銅礮を仕掛又城の巽は當り玉造口を少し隔て小高き山あり此處四方堀を回し樓櫓を上與田左衛門佐幸村伊木七郎左衛門遠雄等は是を守るべきに決す次に坤の方には道頓堀の末磯多村へも池を堀廻し堀を塗格を建迫間旬に弓矢鉄砲を列べ船奉行樋口淡路守雅兼中村空右衛門一晟は四國の兵船を防ぐべしと下知す夫より北に伯樂淵と云あり此處は前に二筋の川流れ西は蘆島なり南北に堀有て最も要害の地なれば此處にも亦堀并に櫓を構へ軍兵を籠置て兵船を防ぐべし草の方福島の新家又は大野修理亮治長番船として大安宅を「船の名」置船奉行宮島備中守則數樋口丹後守兼典並又大野道軒が手の者數多取乘て船路の寄手を防んとす福島の砦又は幅五十間餘の堀を構へ井樓を上小倉作左衛門行春大野道軒兩人楯籠るへきに決す且に當て京橋北片桐町の末の堀を境川迄中堀を構へ見張の兵を置て鳴野今福の敵を防ぐべしと計り持口人數等の事委

細に記録して城兵に授く

○大坂城中不和の事并七組の願忠諫の事

然程に關東の先陣既に京伏見に着し山野村里に充滿して水の下芽の蔭迄も陣所成すと言事
おく聊か錐を立る地もなし大坂城中に此事風聞しければ諸大將等打寄て軍評定有べしとて
大野修理亮治長渡邊内藤助糺木村長門守重成大野主馬助治房以下會合して七組の番頭を集
ひて雖も或は病氣と稱し或は組中に口説有と云て登人も來らず然るに大坂殿中より度々の
使なれば七組の番頭速水時之青木一重眞野頼包伊東長實堀田勝嘉中島氏種野々村雅春等同
九日は會合し各々申けるは是度秀頼公籠城の準備有と雖も我々七人何とて城中へ加らんや
片桐市正は故太閤の御時小身の者成しが數度の合戦も身を惜まず軍功を顯し賤が縁の合
戦にも七本鎧の登人なり故に太閤も彼が忠節を感じ給ひ高祿を與へ利さへ秀頼公の老臣と
以忠有て私なきは諸人皆知る所なり然るに罪なくして御勘氣を變る斯れば我々が如き今御
恩遇の淺からざるも後日一旦の事より排斥らるゝ事有んと思へは末の頼み有へからず昨日
の忠も讒者あらば今日は不忠と成ん事鏡に掛て見るが如し主君は秀頼公にあらすして只修
理亮内藤助が爲す使役せらるれば取も直さず兩人が主人の如し折れば何として奸者の令に
隨はんやとて殿中へ到らず故に城中不和にして人心一致せず依て今度は秀頼公御聲應と稱
し七組の番頭を召に依て七名の者出仕しければ種々響應の末秀頼公御出座有て軍の手配を
委細に仰聞られければ其時速水申けるは今度の御企て我々へ御沙汰もなく御決斷相成しは
是非なき仕合共一体市正關東の命を受けて謀育せしに是度其理に服し給ひしも御側に仕ふ

る若年輩は好機竹として君に有まじき企てを勧め奉つりし君御若年に在せば彼等が諛言
に惑され給ひしは痛敷御事成臣等が願にはおはれ市正を御宥免有て彼が申旨に任せられ時
節を窺ひ機を思召立給ふも遅きにあらす今儘の小勢を以て日本國中の勢を引取御合戦あら
ん事石を抱て深淵に臨むに同國一又諸の浪人馳來らば其勢十萬にも及んか然と眞實騎伏の
兵はあらす當時諸代恩顧の輩らすら忠義を知君の急を臨みて命を捨る者少し況てや慈に耽
り利に走り理非曲直をも辨せず隙を窺め隙を臨む輩ら何と危きを見て命を落さんや東國の
大軍は數年の恩を思ひ名を惜み義を重んじ命を輕んずる志ざし金鉄の如き義士と企鏝の爲
に加搃する島合の集り勢二十人を以て關東の登人に對するも秋の木の葉の嵐に逢が如し何
として勝とを得んや又故太閤殿下の舊恩を思ふ而て心を一にして戦はゞ牛角の勝負成へ
さなれ共大徳不義の族相難らん又東國方より金銀位を以て是等の者を誘はゞ忽ち又關
東方又徳はん或は火を城中へ放し又は城を郭中に引入なとせば結句却て徳と成ん事必定な
り恐れ乍ら能く御思召有べきか但七人の輩ら命を惜まず義を見てせざるは勇なきと言
ふ人の言なるを勇士たる者何ぞ守らざらん唯君の爲言からざる御事を歎き奉つる而已誠
むへきを御して諫ざるは是れたる道有ねけ我々が愚意聊か殘し奉つらす七人が存する所同様
ありと憚りなく過しかば秀頼公問給ひ暫くありて予が不道今更悔るも益なし併し而々同意
ならを無理に籠城致させ討死させんも不道故只今殿を遣す早々城中を連れ出命を全ふすべ
しと宣ふ時青木民部派を流し御掟の下より申けるは七人の輩ら再三謝り奉つる事全く命を
惜むに非ず只君の御爲を思ひ奉つるが故なり今亦速水が申上るも愚臣等が忠言御耳に逆ひ

却て御殿を給はり狭間潜りの數に入汚名を後世に残さん事口惜かるべし殿中は恐れあり宿所に歸りて切腹し命を惜まざる心底を死後に顯さんと言席を立て退かんとするを六人の面々押留め一朝の怒りに其身を忘る、は義士の取ざる所あり同じ命を捨てんと成ば敵寄來る時目覚しき討死して忠を泉下に報せんと申ければ秀頼公御威斜あらす涉盃を賜はり酒宴數刻に盡ひて各々退出す是て依て愈々籠城と評議一決し諸浪人をば頻りに招き集らる

○大御所駿府御出馬の事件 秀頼公矢野和泉守を召出さる、事

京都の守護板倉伊賀守が差立の飛脚其後追々來て大坂籠城の形狀を注進す 誌に云すや嫩葉よして刈されは斧を用ふる憂ありと宜なる哉時慶長十九年甲寅十月十一日大御所駿府を御出馬あり御留守居は水戸鶴千代君(後中納言頼房卿)を留守らしめらるる同月三日尾張宰相義直卿二ツ引兩の幕白旗五本頼宣卿へ中黒の幔幕并に白旗五本金の御幣の御馬驗を遣され俱に中陣に從ひ給ふ又駿河中將殿(後大納言頼宣卿)も供奉し給ひ大御所其日は平常御守の御裝束にては駕籠に召れ前後に列なる扈從の面々は却て思ひくの伊達裝束綺羅星の如く善を盡し美を盡す其結構言ん方なし御道すがら御鷹野遊さるべしとて持船通り御發駕未の下刻田中に着御供奉の輩らへは本街道參るへしとの仰に依り順序を守りて馳上る備置十二日は遠州掛川へ着御然るに先頃使として大坂并片桐方へ遣したる大野壹岐守治氏歸り來つて申けるは某し大坂城へ入んと仕つり候へ共固く守りて門内へ入と叶はず依て力なく柴木へ赴き仰を遂一市正に申聞直立歸り候由を言上しければ又本多美濃忠政は勢州勢を率る桑名を立て伏見へ到る同十三日大御所和泉若御此所より一日返留成瀬豐後守

正氏將軍家の其使として江戸より此所へ來るも何か密々の儀あれば他に知る者なし同く十四日は遠州濱松へ若御此所へ峰須賀河波守家政入道遊庵下向して目見を成たり諸大坂城内に於ては漸參古參の別なく秀頼公へ御目見あり此時中村一學一忠が家臣に矢野和泉正倫と云者申けるは主人一學死去の時嗣子なければ其家斷絶するに妾腹に男子有しを其節仔細有て子なき旨上聞に達するに依て今の如し右男子を以て家再興の儀度々關東へ數願せしも追々遅延に及び今又何の御沙汰もなきにより今度の御合戦御利運に於ては彼男子へ中村が遺跡を賜ふらば永く忠勤を勵むへしと言上しければ秀頼公聞召其は仔細あらざる旨仰られ夫より新參の士五十騎を和泉に預けらる

○大野治長渡邊糺と口論の事

今度大御所既駿府の出馬の由大坂城中にて専ら風聞しければ城中烏合の者共初の偽勢は何處へやら彌々合戦と云時は如何せんと驚き騒ぎ顔色之土の如く安き心なかりけり同く十四日の晩景に秀頼公諸大將を御前へ召れ軍議評定有て各々持口の事杯僉議せられしが持口は善悪ありとて終に閑取と決し奉行大野渡邊兩人座の中央に伺候す此時修理亮申けるは黒川口之平野口に同じ是亦大手要害の地あれば治長承まはりて固むへしと言上しければ氣色を變て渡邊威猛高に成是の治長甚だ恣ま、の中分傍輩の吾々を輕蔑にするは奇怪なり治長と吾ど何か優劣有んや黒川口は我固めに誰か異論の有べきと既に兩人爭論に及び渡邊刀を取て立上れば座中の面々押隔て仲へ入り此所は君の御前なり兩人共に無禮至極凡忠臣は君の爲にして身の爲にせずと云ば私しの怨み其身を棄るは君子の爲ざる所と双方を宥め

四十二

ければ修理亮は莞爾と打笑ひ遊山怒に堪すして我を討んとするも我は手出せず大事の前の
 小事必ず怒り給ふへからずと言ければ皆々修理亮が申分其理あり若此時刃傷に及ひ何れか
 一人討れもせば城中の輩ら誰を力と合戦すべきと申ければ渡ば邊も理に伏し先は双方静りけ
 り儲前而の出丸は真田左衛門佐幸村備籠るの所幸村人数は本國へ申遣し當地にて抱入され
 は甚だ無人の旨申上ければ然らば後藤又兵衛基次明石掃部助全住を差加へらるべき由評定あり
 り依て真田は此事を山川帶刀堅信に相談しけるは我無人を以て出丸を固先んと覺束なし是
 に依て明石か後藤兩人の内を加へらるべき旨仰なれ共彼等は小人として人の善を嫉み人の
 惡を喜ぶばかりか我意我儘にして却て合戦の邪魔成べし如何すべきと言は帶刀の同列北川
 次郎兵衛宣勝進み出れば彼所は真田丸と號けて普請ある所なれば餘人の是を守るは其益な
 きに似たり縱令小勢にても貴殿彼所を衛り敵寄來らば一戰に討死し美名は後世に殘さんこ
 そ本意ならんと申ければ真田は點頭其意に隨ひ我一手にて固むべき由御請す因て黃曉衆
 の中伊木七郎左衛門遠雄を加へらる其外真田に屬する輩ら伊丹周防守正俊平井七郎兵衛保
 剛山川帶刀堅信北川次郎兵衛宣勝諸國の集まり勢五千人并に信州より馳來る真田が手勢百
 五十人都合辰巳の出丸を圍むべきと決定れり同く十五日大御所三州吉田へ泊りなり此時
 片桐が使として家臣小島庄兵衛來り此度主人片桐大坂を立退し次第具に言上す大御所宣
 けるは秀頼愚として老臣の諫を用ひず利さへ片桐を死に至らしめんとせしに不思議に虎
 を選れ其後小島一揆の折も郎黨共忠戦する條神妙なり吾自身馳向つて謀叛の仔細を糾問は
 んとす片桐も亦出向て大阪の案内仕つるべしとて上意にて小島へ絞付の御小袖を賜はる庄

兵衛が子孫に傳へて今に家寶とする由十六日岡崎へ着御一日は逗留する十七日大御所尾州
 名古屋より御着翌十八日大雨故に一日御逗留義直御種々侍賢應為給ふ此所迄は道すがら御應
 侍わり供奉の輩らは駿府御出馬の節より一道の次第を追て馳向ふ駿河中將頼宣卿も行列を
 馳へ扈從し給ふ名古屋にて御應を駿府に返し給ふ十九日大坂所岐阜へ止宿廿日拍原御止
 宿一日本多美濃守忠政軍勢と引卒し牧方に陣す松平下總守忠明は勢州龜山にあり大坂所の
 仰に因て去十同日濃州勢を驅催し翌日龜山を立て美濃國加納に到り父與平美作守信昌と談
 話す同く廿日江州彦根より若此所へ將軍家の使として石川又四郎渡邊半四郎兩人江戸よ
 り参着本多正純も就て上聞を達せんと請しかば正純御口上は直に言上し返事も承まは
 るべしと御前へ出兩使参着候山中上ければ大坂所の仰に彼等は使をも天晴仕つる様も成長
 けるにやとて直に御前召出さるれば兩使御口上を申上るは當月廿日迄に關東奥州の御處置
 相濟より廿三日御出馬有べし然らば大坂の合戦御取掛の儀暫く御延し下さるべしと申けれ
 ば大御所の仰せらる、は城兵打出せんば將軍の上洛を待ん若敵討て出ば合戦を遂ん然其將
 軍急ぎ給ふまゝと御答ありて兩使を關東へ返さる同く廿一日水原へ御泊翌廿二日大津十四日
 にて御豐食夫より二條の城へ着御都鄙遠近の老若男女老若に充満し并し奉つる慶長五年の秋
 關ヶ原の合戦以後又數千戈を忘れたる、偶々此度の變亂珍しさに此度の軍勢馬物具太刀刀
 などの光り輝く形狀勇々敷見馴にてぞ有ける日本六十四州の人々を集たり共斯る大軍は有
 べく其覺すと見る人初て驚きけり愈々廿三日將軍家御出馬と極りければ伊達陸奥守政宗上
 杉中納言景勝等を先鋒として上洛ありける

○松平左衛門督中島を乗取事

然程に中國の軍勢を牽て去る六日の早天に來上せし松平左衛門督忠繼は先神崎川を渡さん
 迎戸川肥後守正利花房志摩督政成同助兵衛職之等を大阪より守番船へ置此川を渡らせ忠繼
 暨人我人數に指揮して大阪勢を追拂はんと思ひける此時忠繼の舍弟松平武藏守利隆も俱に
 出陣し在けるが兄忠繼神崎川を越と聞く然ば我も中島の瀬を越んと先斥候を出して敵の形
 狀を窺はしめし後利隆中島へ到りしに此時大阪の七組の面々并に織田有樂入道等この中島
 の近邊を巡見し居たりしが今武藏守の人數中島の瀬を渡さんとするを見て驚き騒ぎ人數を
 河邊へ備へて待懸たり此方は利隆忽ち河を渡し勝負を決せんと人數を進ける所此時城和泉
 守永盛は御使番兼監察として此所に居たりしかば利隆に向ひて申様今敵は大軍の上大阪に
 接近し是主戦なり味方は微勢にて殊に大河を渡す是客戦なり主客の得失ある上に兵に多少
 の差あり輕忽しく川を越られず暫時敵の動靜を窺はる可と利隆聞て兄忠繼我より先に神崎
 川を渡りしのみか敵を追拂ひたり我期て有可と更に思ひ止る氣色なく強て川を渡さん兵を
 進むるを永盛重ねて申けるは這は武州殿には物に狂れしか只今申せしは勿体なくも將軍家
 の使節たる吾申所にて取も直さず君の仰なりと辭を盡して止めければ利隆止を得ずして漸
 く思ひ留りければ敵は利隆が川を越ざるを見て兵を率て大坂へ歸りける今日幕方忠繼は兵
 を進めて中島の下の瀬を渡るに此所は水深ければとて舟筏を用ふ此時戸川花房も續て渡る
 を敵は期と見るより渡さじと遮り戦ひしも終ふ時はすして敗北す此所にて敵の退るを退て
 數十人を討取り武藏守利隆此事を聞兄は二度迄の働さめり我劣りし事の残念さよと臍を

嚙も詮をし此時石川主殿頭忠繼は山陰山陽の人數を以て神崎川を渡り中島に到る武藏守
 利隆有馬玄蕃頭豊氏の兩人は天滿へ向ふに城兵少く攻口廣ければ頼て天滿を燒て此所へ陣
 ず松平左衛門督使者を大御所の御陣中へ奉つりて神崎中島の兩所を乗取敵少々討取りと
 注進す大御所御威斜ならず夫々拜領物杯有て使者は歸りける尾張宰相義直卿は十二日に伏
 見を立て木津に陣す此日大坂には軍評定ありけるが其時新參の者共江戸將軍天王寺へ御着
 陣御備定らざるを以前に此方より逆寄して一戦仕つる可と申ければ大野修理亮は聞も敢す
 干騎二千騎の追合ならは左様の事にて利を得べきが今や天下の人數を引請ての合戦も初
 度の軍若利を失はば二度の合戦難儀なる可れば只堅固の城廓へ櫓籠り敵を以て討取んこ
 を上策おれ凡々所の壹人は二十人にも對そと古人も言すや逆寄の儀思ひも寄すと言放てば
 七組の面々も其意も同じける新參の頭たる具田左衛門佐幸村長曾我部宮内少輔盛親大井豊
 守守仙石豊前守秀範後藤又兵衛基次明石掃部介全住等詞を揃へて凡合戦に敵の不意を討て
 利を得し事古今其例少からず小勢を以て大軍に向ふ尋常の合戦して利を得ん事有可らず
 と再三申けれども終に其甲斐なく籠城する事に一決したりける

○具田隠岐守具田左衛門佐方へ使する事

同く十七日大御所は法隆寺より住吉へ移り給へば將軍家も同く平岡を發し平野へ着せ給
 ふ大御所は卯の上刻法隆寺を發し給ひしが供奉の面々は鎧は着せど冑をば着ざりけり此時
 金地院并に林直春與庵等武具を付て御前へ伺候しければ大御所御覽有て我幕下にも三人の
 法師武者あり迎笑せ給ふ申の下刻漸く住吉へ着此日薄暮より大雨頻に降ければ供の者

は皆幕を垂て居たりける此時若城中の兵等心を一にして討出ば此處にて關東の勢數人討
 る可に其儀一向なきは大坂方の運の盡とや申へけん眞田幸村は此等の事に付て度々策謀を
 奉つれど種々故障を言者の有て行はれざるこそ是非もなき酉の刻將軍家住吉へ成せられ大
 御所に御對面あり此時尾張宰相殿駿河中將殿も傍一座にても明十八日の陣の位置杯種々
 相談ありしと暫くして大坂所には眞田隱岐守信尹を召て宣ひけるは其方が甥幸村秀頼と
 合体の心を離へし味方に属せんと成ば信濃國にて一萬石を與ふべきが如何やと仰らる此
 隱岐守信尹は安房守昌幸が弟にて左衛門佐幸村には正しき叔父をれば此は有難き御談に候
 どゆ使を承まはり直に幸村が方へ趣き對面の後上意の趣きを委細に述べれば其時左衛門佐
 幸村は上意の趣言身に餘り有難き仕合に存ずれと某子は去慶長五年關ヶ原の合戦に御敵對
 ずしゆへば身の置處なく涙々して一旦高野へ閉籠り惜からぬ露の命を漸々繋ぎ愛年月を消
 光し内此度秀頼公は深く頼まれ領地逆は賜らねども多人數を預りて大將の號を許さる、上は
 知行よりも尙有難し然ば是迄の約を變じては味方へ參らん事思も寄すと言放されて詮方な
 く隱岐守は洩々として其儘住吉へ立歸り幸村が申せし通を委細言上なしければ大坂所は然も
 社と點頭給ひ然ば再度汝幸村方へ行て言んには信濃一國を與ふ可と申へしと宣ひければ信
 尹は又々幸村が方へ趣き上意の趣意を述べれば左衛門佐答へけるは身不肖の某へ信州一國
 を賜らんとは生涯の面目此上なく上意も申へしと成ども一旦秀頼公に頼まれし某子今更
 縁又愛て是迄の約を變すべきや只一途に討死と覚悟すれども萬一此合戦は和睦と成ば國を賜
 はるに及びず貴殿の祿の中より偏の扶持を下さらば身命を惜ますは奉公致すべし目今の處

にては縱令日本半國を賜はれば逆御味方せん事思ひも濟す以後之貴殿は對面も詮なければ
 御出御無用なりと言捨て其備席を退きければ信尹も詮方なく又此旨趣を歸りて言上をしけ
 れは大御所にも幸村が志さしを深く感せられ止を得す思ひ止まり給ひけり

○磯多ヶ崎の砦を棄取事

初同月十九日兩御所住吉に於て軍議あり先城中の要害の概略を尋ね給ふ東は玉造口連大
 和國より流出たる大河にて高さ二丈も有んと思ふ程に石壁を疊み西は傳法と號して西國よ
 り船入の川なるが夫を堀續けて數千艘の船を繋ぐ處には人家を并べ南は堀深して岸高く
 北は湖水有て淀川の流れ懸り渡り渦巻たり水底には杭逆茂木を引流し背面には高く堀を
 掘へ橋を列べ五重の天守の空に聳へ其内に甲冑を着たる究竟の兵十五六萬人矢東を取て
 待掛たりと申上げ 此日蜂須賀阿波守至鎮は攝州小妻に在陣しけるが木津表の場所見分と
 して家老稻田修理亮中村近川筋へは森甚五兵衛を船にて遣し夫より直に勝山へ參上し兩
 御所へ御目見なし彼地の形狀を具言上し又磯多ヶ崎を攻見度旨申上ければ兩御所は夫れ
 然る可と松平宮内少輔忠雄淺野但馬守長長等と謀合せ一戦す可と命出されしにより阿波守
 は御前を退けるが重ねて本多佐渡守正信を以て仰出されけるは磯多村は昔より八馬の進
 退自由ならざる場所なれば忠雄長長とも相談し過失なき様致すべしとなり依て至鎮は陣所
 へ歸り未明「十一月十九日」は手勢を引率し萬字の紋付たる旗眞先に押立四半の上に鳥毛付
 たる馬表を朝風に翻へし番船を目懸て急に攻立ける此所は明石丹後守全延が固死にて白赤
 段々の旗に赤暖簾の馬表を押立士卒を勵まし戦ひしが遂に計す引退く至鎮が臣稻田修理亮

中村右近山田織部樋口内藏助船手又は森甚五兵衛同く甚太夫の兩人僅の手勢にて乗込たりしが程なく同所を乗取たり頼て此由本多正純より申上ければ直上使として横田甚五郎兵衛田隠岐守渡邊治右衛門本多藤四郎來りて御感の趣旨申渡され鎮定の上は早々兵を引揚へしと度々仰りしかは中村右近より人数を添て参らしめ殘らず此處を引揚たり

○野田福島合戦の事

關東の船奉行向井將監は去十六日傳法に着岸し九鬼長門守盛隆千賀與八郎小濱民部少輔翌十七日此處に來ければ十八日は四人の勢を合勦家村の敵と合戦して利を得しかは野田福島新家の三ヶ所に陣を取り夜合戦に及みしか此處は大野修理亮治長が指揮にて大安宅船に大船數十艘を泛べて種々船幕船印を立嚴重に守らせけるか其夜明方九鬼長門守が家來の者裸躰にて脇差を口に啣へ泳で修理亮が用意したる大安宅へ飛掛れば殘る船手の面々は驚破先を越されたりと大又怒り軍艦の狭間より鉄砲を打懸武者走より鎗長刀を以て突懸く漸く敵船に接近たれば最早太刀打も自由なりとて敵の船の指を目標逆櫓を以て押廻し武者走の戸を三方より押開き船撞を以て敵の船を引寄せもくんと乗移り開を哨と揚ければ此は思ひ寄ぬととて周章狼狽防戦の手術も打忘れ只呆れて大刀打する者も無所を味方は得たりと突捲り斬立しかは敵は過半討死しければ水へ飛入て遁る、者も多かりしと茲に又向井將監は續て來る郎黨はなく唯一人番船に乗移り九鬼が家來を己か船の左に置て船飾の旗を取て敵の船へ投入くして居しが九鬼長門守一番乗と名乗を問より將監の殘念に思ひつ、一番乗は忠勝あり誰か是非を言者あるへき九鬼は此所へ來らぬと何ぞ一番乗と申すべきと聲を出

して唱へける其時九鬼が家來笑て曰く船軍の法を知らざるにわらず然も關東の船奉行なり今敵の船に乗取鬪を揚る九鬼が人数の外に有可らず殊に皆旌旗を敵の船に建し事歴然他人の知る所なり御身一人來て敵の船に乗給ふは是一身の功にして匹夫の働きなり九鬼は船手の大將なれば斯る業はなさるるなり敵を討に士卒に指揮するは大府の常なり然も御身一人敵船に乗て利を得んや我人数が敵船へ乗移るを窺ひて御身一身の功にせんとは是驍尾に付蠅虎の威を藉る狐に齊しと大に嘲諷しければ向井將監は怒に提兼刀を抜て既に珍事に及んとしければ九鬼が人数は一所に集り監將の中に取圍み討て版んと縛さける斯と見るより小濱千賀の兩人は中へ入て双方を論し提兼案には九鬼殿は番船取を乗取んと言自身來られしに非ず將監殿は自ら番船へ乗移り一戦す其功等提の相違なり然ば向井殿が乗移りし番船は同人へ渡すが當然成んと採ひければ長門守是を聞て是非は論するに足ず番船は一艘なり二艘なり各々御指揮に隨ひ渡す可と言ければ爰に於て和談になりける廿二日は松平武藏守淺野但馬守が勢福島の近所新家村を破る黄昏に武藏守方より囚人二人を送る是は武藏守城中へ心を通し若忠戦せば大國三ヶ國を宛行ふ可との旨を書し秀頼公が書状を持参しける者成由此日午の刻大御所茶臼山へ成せられて御陣屋繩張等を仰付られて直に還御なり廿五日大御所諸大名に命じて鳥羽の堤を築き中津川より天濤川へ水溢る様に仕つる可旨仰出さる廿五日向井九鬼千賀小濱の四人芦島へ移る

○政宗秀頼公の使者和久半左衛門を捕ふる事

是より先豊臣秀頼公は伊達政宗を味方にせんものと和久半左衛門を使者として奥州へ遣せ

しに半左衛門道を急ぎて漸く野州小山宿へ来りし時伊達政宗が仙臺より出陣して此小山に
着陣しけるに出會ければ此度某子秀頼公の命を請與州へ赴くなるが此所にて圖らず出會し
は仕合とて命せられし口上を委細に述べれば政宗命に従はざれば和久は餘方なく凄々とし
て歸りけるを政宗は人をして追掛しめ途中にて同人を縛へ是を引連て去廿三日御本陣へ
しければ其後同人を政宗へ預け給ふ廿四日開宮櫓左衛門長崎より歸りけるが是は高山南坊
始右近内藤飛騨守其他那蘇宗門徒黨の輩らを船に乗て南嶺へ流せしを言上の爲なり廿五日
大御所池田越前守を召て今度尼崎の仕様油断なき旨神妙に思召の由御威に預る廿六日大御
所には赤茶臼山へ成せられければ諸大名御譜代の面々參上して御目見あり還御は御馬上な
るが是は將軍家より進せられし黒粕毛の御馬にて此馬大坂城の方へ向て嘶さければ珍しき
事なりとの上意に藤堂和泉守這は御吉兆なりと言上す因て大御所には御機嫌よく召給ひ予
年若き時は馬上に鷹を合せ又之押もせし事毎度なりしが今は馬ばかりも不自由なりと御
意わりければ藤堂和泉守は中々御壯年に變らせられぬ御強盛なりと申上たりけり

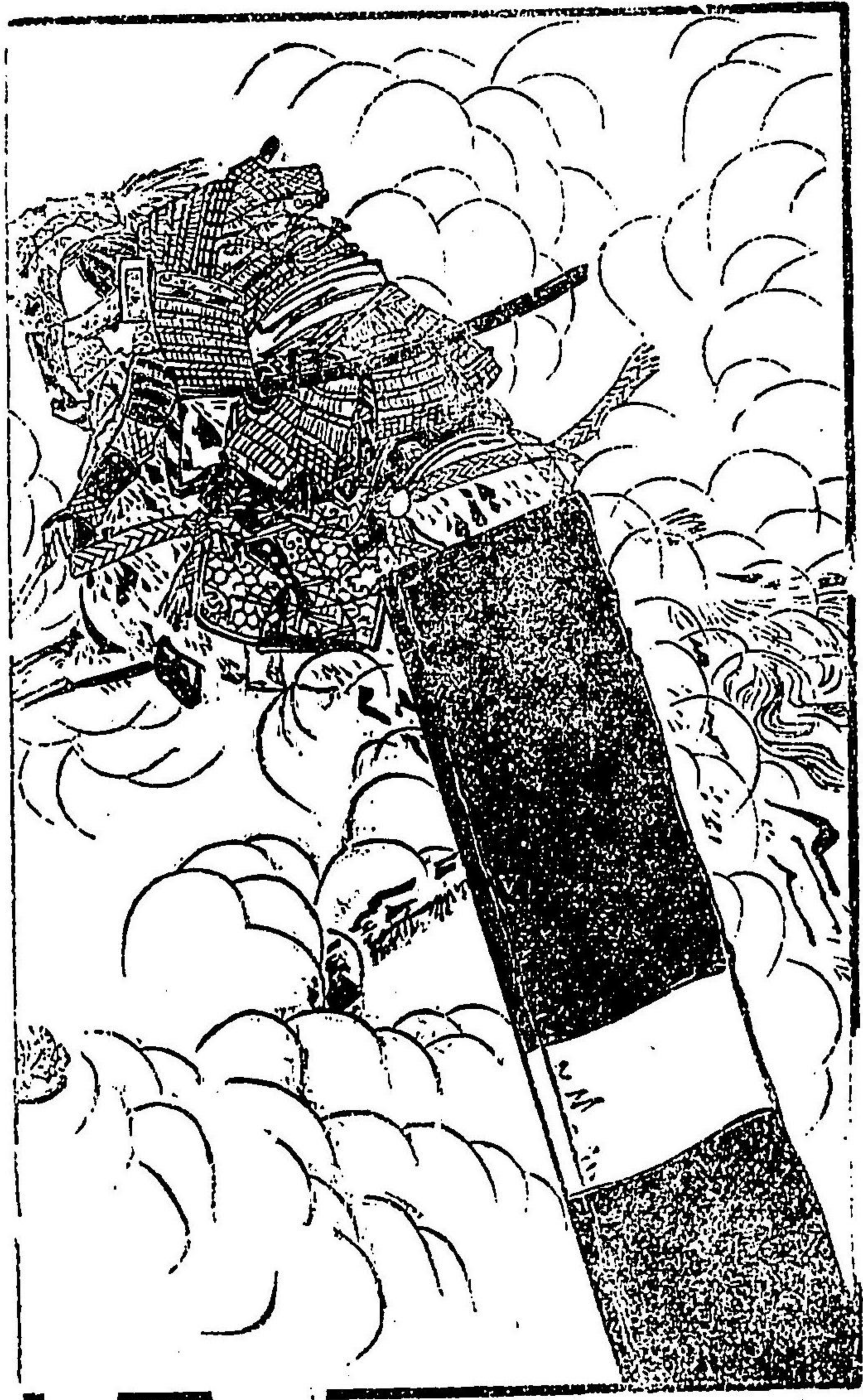
○今福合戦の事

然程に霜月廿六日城北今福野に合戦あり大和川の北を今福堤と云南を鳴野堤と云蒲生村
に近ければ世俗蒲生堤とも云り城方より指圖として堤筋を堀切を三重に構へ兩所に大野
修理亮治長が番兵を置大野は井上五郎右衛門頼次是を固む扱上杉中納言景勝は廿四日當
へ着しければ佐久間河内守小栗又一を以て鳴野に出陣す可と仰遣され安藤次右衛門伊藤右
馬亮屋代越中守を以て佐竹義宣の勢は今福口へ出陣す可と仰せ遣さる茲に上杉家の家老古

江山城守は遠路を参り候事成ば人馬共暫く休足の上に仕つり度と言に其時河内守又一の兩
人は山城守は異な事を言るゝものかなと言ひければ山城守承はり御尤の御辞なり然ば明朝
出陣す可とて中納言景勝に申鳴野に陣して翌朝未明に押奇柵を破攻懸る又佐竹右京大夫義
宣は今福に向ふ此所は大野修理亮等が番手持の場所にて廿三日の夜は矢野和泉正倫が當番
にて飯田右馬亮始め牛瀧の八人組等にて燒殘の小屋を恃とし牛瀧の文珠院粉川の福常坊瀬
田孫市等下知して終夜炬を焚て普請を急がせ漸く明方に落成に及ひしが未だ堀切の板橋を
も拂はざるに早上杉勢は合戦を始めしと見え鐵砲の音鳴野の方に聞えければ佐竹義宣は大
に急迫上杉が陣所へ見廻りに行し安藤伊藤屋代三人の方へ梅津半右衛門を使として申させ
けるに當手は各々方の指揮を待所に上杉勢早合戦を始んとする形状なり當手へも敵押寄ば
一戰致し度候と三人は聞て開は勿論なりと返答しければ義宣は大に悦び濫江内膳を大將と
し早速人數を押出す梅津半右衛門も續て一番に馬を馳鎗を合せて忽地に敵を討取たり茲に
矢野和泉守が手の者十人程假橋を渡りしが内五人之矢場に討死し殘る五人の内湯川庄兵衛
丸屋左太夫佐々八右衛門の三人は手負殘る二人は柵の内へ引取ける和泉が相備飯田左馬亮
家貞同く朝負父子は和泉俱々粉骨を盡して防戦しけれ共敵の勢の余りに多ければ士卒共に
氣を屈し忽地備前口迄追返さる是を見て和泉守は大に怒りいでて天晴の働さして討死
せんと物具脱捨徒兵四五人を率し鎗にて拍子を打乍ら勝誇たる佐竹勢の群る中へ突蒐る佐
竹勢も是が爲に辟易して二町許も追崩されしが佐竹が家士及川南右衛門が放し鐵砲の爲に
矢野和泉守首筋を打抜れ撞と倒るゝ所を佐竹勢折重なりて首を取る此時徒兵大谷式部も討

死しけり斯て鴨野へ巡見として行たる安藤次右衛門伊藤右馬亮屋代越中守も立歸り先鋒に加はりて奮戦す又佐竹勢の中黒澤甚兵衛小川刑部左衛門江尻軍兵衛等は思ひく高名す大坂方相備飯田兵左馬亮其子鞆負踏止つて討死しければ殘兵は皆散りに遁失けり又佐竹勢の中に伊達三河石塚大膳戸村十太夫小野間大和の面々と漸次に備を進めし中に大膳は敵の柵の際に陣を取城兵矢野飯田が輩ら討死しければ銳氣益々挫け其上宵より鐵砲の連發に身体疲勞今敵寄來る共挫々敷合戦す可もあらず然とて此儘に加勢の無時は備前島は忽ち取れん又京都筋は木村重成が手にて彼人在陣して有は背後を取切れば是由々敷一大事なりと城中へ度々申送たり依て修理亮が手廻の中に黄母衣組と号する本郷左近將監山口左馬助家弘岡村宅之助定胤其外七組の面々等發向す此時木村長門守重成は今切を固め居けるが斯と聞より彼所を打捨二騎断に馳付て我先手川崎和泉守勝岩上村金右衛門盛泰山口知徳院等に鉄砲五十挺を持せ馳向はせ急に敵を追立ける佐竹が兵此勢ひに少く瘞み川口の柵を捨て引退く然ば川崎上村智徳院等は二三の柵を奪ひ使を木村方へ遣し町口の柵無事に取返しければ尙加勢の人数を遣されたと申送る依て大井何右衛門高松内匠に鉄砲を持せて遣はし又重成が人数も追々に集りける佐竹勢の初柵を捨て引入れれば大井何右衛門は勝に乗て城戸を開き進み出鉄砲を放出せば佐竹勢は柵際より七八間先の堤の曲角迄引取たり然ば敵も味方も柵二重を抱へ七八間を隔て朝より晝迄鐵砲迫合なりしに此時木村重成并に堀田關根も馳付たり此日後藤又兵衛基次は秀頼公へ御目見せんと出仕しけるに秀頼公には宵より砲聲頻に京橋口に聞ひければ其景况御覽有べしとて又兵衛其他を御俱にて菱櫓へ登り御

寛有長門守が陣との間近接ければ如何も木村勇あるも小勢まで之勝負の程心元かし木村と討する直も馳向ひて長門よ力を戮す可との仰も後藤之畏まり城中より急ぎ馳付て木村と對面し貴殿の人数刻の合戦も疲勞も有可れば新子の某子入替て戦ふ可と秀頼公の仰せありと言ば木村重成之聞も敢ず假令君の命なり共是迄も取詰たる合戦も他人と入替らば陣中騒立備も崩れ味方の負とあるべけれを暫く時を待玉へ機を量り變り應じ事を爲と君子の行ふ所時分を考へ鎗を入て合戦を始めらるべし貴殿之老剛我之若年あり斯る時節も生れしこそ幸ひ入替らんと之何事ぞと辯舌流す述ければ後藤基次も此理も服し長門守が後陣も備と立て横箭を射んと其準備を成たりける此時後藤が手の置らすける之堤の曲りへ敵來り柵際より發砲するも中らざれば川船を取寄鐵の楯を築き弓鐵砲の手術を勘深田の中へ横合より放向とて各々川船も飛乗佐竹が陣を目掛て横合より放入ければ何かは以て堪るべき佐竹勢物崩れと成りける此時木村が家臣柳名右衛門と云者水船を堤の北へ投入是も乗つて又も鐵砲と横合より打込ければ佐竹が人数は爲も打破られ四度路も成りて敗走す大將木村長門守重成此時廿三歳敵の動靜を窺がひ鎗を取て自身先も進めば是も續いて即黨松浦彌右衛門佐竹が家臣淺部清兵衛の二人先登して敵の首數多討取たり木村と中白の旗を眞先も押立銀の瓢箪の赤も白熊付たる馬標を立て具茲も突て蒐る亦佐竹方之地黄色も丸の内も扇を記たる旗數十流河風も吹靡せ金の三本扇の馬標と押立双方圍の聲を揚けるも百千の雷一度も落天地も動き坤軸も碎るかと思ふばかりあり是を見て後藤又兵衛基次と惣白の旗も大半月の馬標を眞先も建木村も繼て突て蒐るも佐竹が勢も一手に成陽も開て陰も取



罷んとしければ木村が兵は是とみて陰に閉て中を割れしとす是を彼黄石公が虎を縛するの
 手子房が兎を取捕の術互ひよ手練の道なれば兩陣入乱れ破れず圍れず命限りと戦ひたり木
 村が陣より之高松内匠若松市郎兵衛日下次郎右衛門小川勘右衛門長屋平太夫大井何右衛門
 瀧和彌八郎井上與右衛門俊新太郎青木民部少輔が組より田邊與右衛門川田六左衛門等の面
 々何れも鎧の穂先を揃て佐竹の勢を突て廻り長屋平太夫佐藤八左衛門の面々皆適れは働
 きけり此長屋之由緒有は迎木村と同様は白母衣懸て働きたり又蒲生の村際にて鎧を合せし
 波多野兵庫助青木四郎右衛門幸三郎等なり佐竹勢と戦ひ疲れ三の柵を退いて奥の柵際
 まで防ぎ戦ふ木村之勢ひも乘て柵中へ駆入ければ木村が郎等皆と見て大將を討せしと身命
 を惜まず喚き叫んで突て入長屋平禮之敵數多討取三の柵まで奮戦し知徳院井上等之奥の柵よ
 て合戦す平塚大井も奮戦せしが大井之惜い或砲丸の爲に斃れたり松浦彌右衛門之許多の首
 を提て城内へ歸り記帳を請ければ秀頼公右筆は此旨を命せらる因て白井甚右衛門之筆を執
 しが未だ記さぬを松浦と怒て疾記してと言と白井尙記さず斯る所は淺部清兵衛また首を提
 て來り先刻に首を得たりしが歩行立おれば後れたりと言其時白井之松浦は向ひ凡一番首と
 必ず後より口論ある者故二と見ざれば一を記すと能はず是執筆の故實にて急よ一二と決し難
 しとて首二ツを記して二人が名と記しけり茲は又後藤基次が手勢之柵中へ懸らんとすれど
 此所之木村が人数支隔てたれぬ堤の南柵の端より乘越て南原と巡り奥の柵と破り此所にて
 鎧を合を其輩らよと赤堀五郎兵衛山中藤太夫三浦彦三郎山脇三郎右衛門田中彌左衛門堀太
 郎兵衛等あり仙石甚四郎之太刀打して勇と勵み塙金左衛門三浦將監柏原覺左衛門山中猪兵

衛等も柵の外にて鎧を合せしが惜べし赤堀山中堀仙石田中等は此處にて討死したりけり佐
 竹勢は是に聊か氣を得て大將澁江内膳は鳥毛の幟を掛て力を盡して戦ひしが忽ち砲丸に中
 りて馬より眞倒れに落る所を後藤が人数の内より寺本八右衛門飛で出押へて首を揺落す横
 井右近は此所にて討死したりしが難破六太夫湯淺三郎兵衛之拔群の高名をしたりけり佐竹
 勢の中梅津半右衛門戸村十太夫戸塚九郎兵衛秋田兵庫信太内藏助等は朝より晝の合戦に粉
 骨碎身し首十五を得たりしが是に限らず敵味方共入乱れ組て首を取あり又取るもあり
 何も隙あり共見ぬさりけり三本扇と中白の旗とて入替り立替り東西に靡き南北に翻へり此
 合戦何時果へも見えざる所に佐竹方の小野崎源右衛門等數十人踏止りて討死す大將右京
 太夫義宣は今福村の前に旗本五六十人を真火に備へて自ら長刀を振て近寄敵を追拂ひく
 堀を越て備を立たりしが其時川向に柳原遠江守康勝が先手の雜兵三百許も陣しければ康勝
 度々使を馳て下知なき内に辻瀧に蒐る可らずと制しければ味方の敗軍を徒ら見物して居
 たりしが今佐竹勢難義と見えければ堪兼てや三百人許の中より一番に川井三彌鳴野川へ
 飛入しが腰に付たる吐俵よ水入て浮つ沈つなしけを二番に入たる貴志角之助斯と見るよ
 り鎧の石突取延て三彌が味方へ卷付たるを一突突て向ふの岸に突付て共に川岸へ上りける是
 を見し渡邊八郎五郎清水久三郎白井吉太夫同十左衛門日根野左衛門佐野五左衛門半田外記
 村上久兵衛等以下二十三人我劣らじと川水へ飛入岸へ上りて横合より掛りたり其時佐竹之
 上杉の鳴野の陣へ使を立てて當手數刻の戦ひ疲れたれば御加勢下されたしと申遣しければ上
 杉方より杉原常陸介七百餘の兵を繰出し杉原川を越て木村後藤が勢の横合より鉄砲を兩隊

の如く懸ける木村後藤堀田等の勢は是が爲に崩れ立此時又兵衛基次は左の腕へ玉一ツ中りしかへ紙にて其血を拭ふを木村は是を見て疵は如何と言ければ又兵衛は呵々々笑ひ秀頼公の御遊未だ盡ざるなり我疵は淺しと言長門守重ねて今日の戦ひは是迄なり懸るも引も時節なりと兵を纏め城を指て引取ける味方も今朝よりの戦ひに疲れしかば追蹙る氣勢もなく別れして陣を取扱右京大夫義宣より使者をして平野の御陣へ遣討取し首を獻じければ其使者を御前へ召て時服を賜ひ又佐久間河内守小栗又一は今福合戦の場所より立歸り合戦の次第を言上しければ兩所御感斜ならず軍功の擧らに御感狀を賜りける

一御感狀并青江御腰物戸塚十太夫一御感狀并信國御腰物 海津半右衛門一御感狀黒澤甚兵衛 一御感狀 戸塚九郎一御感狀 信田内藏助 以上五人也

斯て柳原康勝が先手の大將伊東忠兵衛我手の慄悍の壯者が軍令を破り佐竹の陣へ赴きし事を康勝は告ければ康勝大に怒りて軍令を背き先登したる二十餘人の者其一切腹申附ん夫法は重く人は輕し罪せずんば有可らずと終罪科定まりける所に佐竹義宣使を康勝方に遣して今日今福の合戦味方難儀の折御加劍に依て由を早速に追拂ひ祝賀は存する由申來りければ依て康勝も怒を止せ被赦罪の者其の罪を宥しけり

○鳴野合戦の事

然程は鳴野堤の城兵は渡邊内藏助糾并に大野修理亮が島兵山市左兵衛井上五郎右衛門を隊將として騎馬三十騎歩卒五十八騎を率て柵外へ出張し其外竹田兵庫が子息、助小早川左兵衛谷村百々助以下屯して手際く鉄砲を放しめたり廿六日東雲漸々明渡る頃安藤次右衛門正

次屋代越中守秀正父子伊東右馬亮政世等は鳴野口を巡見せんとて來り見れば大坂方京橋の向ふ青屋口より一町許り先迄柵を結廻たり安藤右次衛門正次此形勢を見て衆に先立て透間もあらせす遣ける家人酒井左市郎續て走り來るを見て政井上五郎右衛門が手の足輕鉄砲を放して柵の内へ引取は安藤は續て押付柵際より鎗を合す所に黒具足を着たる大將かど見ゆる武者一人來りしが大音一敵口只二人なるを押取籠で討や者共と下知して踏留るを左市郎能敵をさんなれと柵越に突蹙る是を見て敵四人鎗を柵へ突掛しが次右衛門は是を事とせす急に柵を破るを見て敵三人は引退き内一人は鎗鎗を突懸運兼る所を伊東右馬亮政世が家人安田長右衛門驅來り其鎗鎗を奪取たり左市郎に突伏られたる武者高聲に此鎗くど味方を呼懸ければ年齢十七八の若武者來り左市郎が鎗を一太刀に切折て引退く然る所に屋代越中守秀正が家人東三右衛門は左市郎か突伏たる敵の首を取んものと走り寄けるに彼敵は伏られ乍ら三右衛門が高股を拂ひ落せば越中守の悴甚三郎忠正が家臣齋藤左内膳寄て透間も無斬て蒐るを斯と見るより甚三郎忠正十八歳の壯者驅寄て彼が首を討取たり是首は敵將井上五郎衛門ありと斯て左市郎は柵二ツを破り次右衛門も敵一人を討取て尙も遁さしと捲り立終に敵を城内へ追入たり此へ駆付し中丸左衛門西川傳右衛門島本八右衛門等は次右衛門が捨置たる玉薬を持て陣所へ歸る此迫合に屋代越中守が家臣石川右近助は首一ツを得市川半右衛門も首を一ツ討取しが東三右衛門は討死なし林半左衛門東横左衛門大柴覺之助の三人は負傷にて左市郎も鎗創三ヶ所蒙りぬ次右衛門は尙も進んで敵を柵中へ追入しが敵は只今此所へ押出れば早々引取我陣を固む可とて其場を退きたり丹羽五郎左衛門長

重む人数を進め蘆原に埋伏せし兵を追跡ふ此時上杉勢は安田上總介隅田大炊助長尾權四郎
 岩井備中守等を手先として柵門へ押寄ける城方には渡邊内藏助山左兵衛小早川左兵衛
 村椿之助竹田兵庫同く大助谷村百々助の面々此所を破られしと鉄砲を烈しく放て防戦しけ
 れば上杉方には北條清右衛門上泉主水大股八右衛門同く彦次郎等眞先懸て討死す多田豊後
 へ適れ成働きをなし隅田大炊助は烈しく下知を傳へて諸軍を進め難なく柵二重を打破れば
 渡邊内藏助山左兵衛を始め大坂勢は忍ちに追立られ大和川を越て西の方角樂屋敷を過て
 京橋迄入たり又直江山城守は上杉勢を下知し大和川を限りに追捨よして備を固む此時上
 杉景勝直江を召て備は指揮したるやと問ば然候安田を第一隅田を第二に中付候と答れば景
 勝散々に氣色を損し老練の者を先手とするは今朝の事より以後は隅田を第一安田を第二に
 縁替へし又西堤を急に堀切て鉄砲五百挺を添て堀切の場へ備へさす可と申渡
 しければ諸卒は是を聞景勝卿は未だ六十歳も成問敷に敵の虎口を遙に距てし無用の地を
 固しむるは不審なりと嘆きしか後の合戦に此手配にて大勝利を得れば景勝卿が軍慮の
 凡ならざるを人々後に感し合りとて切大坂城中は鳴野口渡邊内藏之助等が手の者上杉勢
 に追崩されしと聞七組の番頭青本民部少輔一正伊東丹後守長實速水甲斐守時之中島式部少
 輔氏種野々村伊豫守雅春具野豐後守頼包は天満の作事場より如勢に向ふ其他大野修理亮治
 長木村主計順宗明武田永翁齋も此を救はんぞ城中より駆出る大野は地白の旗より馬表青木
 馬表中島は白旗一本竹刀の馬表速水は段々の旗輪貫の馬表伊藤は黒地の旗鳥毛の馬表青木
 は金の小田笠も同く暖簾の付たる馬表を押立て雲霞の如く簇りたる上杉が陣へ徐に馬を歩

せ砂煙を立て馳來り関を哄と作て東西南北に突て入四方八方を切て廻る上杉勢隅田大炊助
 以一時計り戦ひしが城兵は大軍なれば隅田が備竟に追崩され上杉方石坂新左衛門を始め廿
 餘人此所にて討死しければ島津玄蕃は敵大勢と渡り合て適れ高名をなしてけり上杉方第三
 の備杉原常陸介は大將の御下知なりと高聲よ呼はり隅田が備と景勝の人数の崩れ懸るを左
 右へ叩き分追來る敵は鎧砲を打懸たり第四備の安田上總介は四百餘人程の人数を率て三町
 程片脇に和ぬしか此時哨と喊て乱足に成て追蒐る大坂勢の横より無二無三に突て蒐れば
 大坂勢大軍なりと雖も争で堪るへき散々に討なされ森市郎兵衛湯河治兵衛米村如賀右衛門
 等引返して戦へど城方惣崩れ成て竹田兵庫其子太助小早川左兵衛岡村椿之助等數百人踏
 止つて此所に討死す茲に又城方に穴澤主殿助成秀と云長刀の達人あり秀頼公が師範の人な
 るが此時長刃にて景勝が陣中へ乱れ入忽ち敵七八人を薙倒す斯と見て直江山城守が從卒
 折下外記鎗を取て穴澤と切結ひしか穴澤は秘術を盡し前に現れ後又隠れ飛鳥の如く働きて
 寄て折下を薙倒さんとするを外記は得たりと引放し鎗を捨て無手と組是を見て景勝が手の
 者大勢懸て終に穴澤を討取たり一説に飯田安女と有此時大坂城の櫓より大砲數十挺放立
 しかば其音山谷に鳴響き平野の御本陣へも聞えければ佐久間河内守久世三四郎御使として
 左様に寛緩戦ひ候ては味方の討死負傷多かるへし依て景勝元の陣所へ引取て堀尾山城守
 に引渡す可と仰せられ其後も五字指物の御使番に頻に來り早々堀尾に渡し引取候へと言け
 れは景勝奮然として床凡に掛り弓矢の道は一寸増と云事あり今朝より粉骨碎身して取敷た
 る地を他人に渡すと云理あらんや如何上意成逆左様には相成まじ此趣急ぎ歸り言上せら

れよと返答せし儘床机を離れす城に向つて青竹を杖にし馬廻り三百餘日丸の旗毘文の旗淺
 寅の扇馬表押立床机の四方には三百の兵各々鎗を押し立てて扣たり此時丹羽五郎左衛門も上杉
 景勝に相談の事有て参向せしが景勝見向もせされは詮方なく丹羽は先手へ廻りける又堀尾
 山城守へも上杉と疾交代る可と命せられしかは堀尾は今朝今福にて佐竹に加勢しけるが今
 上杉と交代んと鳴野へ押出たれと景勝虎口を渡さぬは詮方なく上杉勢の南へ押出し伊賀維
 賀の者八十人三間許も進み鐵砲を打懸ける此時直江山城守は時分と好と下知を傳ければ今
 朝景勝が指揮せし大和川堤蘆原の柵際に備置し鉄砲左衛門は種ヶ島八十挺を敵の横合より
 玉込速く放懸たれば敵は何ぞ堪ふべき大和川の外堤迄崩れ立て手負死人の數を知らず其時
 漸く破れたる柵を振直して具野野後守を一人殘し其餘は皆城中へ逃歸れり然ば上杉方は一
 旦先手の隅田が備取走せしも命令嚴にして鐵が堀切より横合に鐵砲を放懸たるに城兵は驚
 いて鳴野今福の番小屋はいふ迄もなく備前島片原山まで焼て引取ければ上杉勢は直又大和
 川の邊迄押寄たり亦佐竹の勢も備前島迄取詰たり兩御所にも此事を聞召し御威斜ならず上
 杉勢の中隔田大炊助杉原常陸介島津玄蕃鐵孫左衛門等の面々へ御威狀を賜りたり斯て其夜
 本多出雲守忠朝は佐竹義宣に代て今福へ向ひ淺野菜女正長重松平出雲守勝隆真田河内守信
 吉が合弟内記信政仙石兵部大輔好俊秋田城之介季實新庄駿河守直勝等同じ彼陣へ向ふたり
 御々今福鳴野の合戦に敵味方の手負死人幾千萬の數を知らず然ば合戦の後迄も大和川の流は
 血に染て紅の如く時を知らぬ紅葉の色を行水の深さに止めたり渡邊内藏助は器量世に勝れ
 刃人に卓越たれば今日の合戦にも惣大將を命せられ鳴野表へ馳向ふ此人は兵法の達人にて

或時人と争論の末終に腕力と成し時比類なき働きをあらしたりしが後は人を人共思はず凡此
 渡邊と知て太刃を合す可輩らは今此日本國中に有とは覺すと常に廣言を吐し位の人物成ば
 今日日の合戦も真先に進みしが如何したりけん日頃の廣言も似もやらず立足もなく追立ら
 れ一番に城中へ逃入ける

○伯樂淵の砦を搦事

然程十一月廿七日石川主殿頼忠總は霞島の敵と追拂ひ葎を刈取せ其夜は彼島に陣を取抑
 り此主殿頭は大久保忠隣が次男にして加賀守忠常が爲には弟にて右京亮教隆主膳正幸信等
 には兄なり忠隣改易の刻子息等も同じ御勘氣を蒙ると雖も此忠總は石川日向守家成が養子
 となり他家を繼げれば御赦免を蒙り此度供奉の人数に加はり先鋒に列をければ自ら思ふ
 機時の面目世の間一命を捨て忠戦し養父の恩を報じ且養父隣忠が眉目を起さんと郎黨を
 集め件の趣きを語りけるに皆々鎧の袖を濡し命は義の爲に輕と申せば日頃の恩を報じ申
 さん斯る時に臨て命を惜むば人と云可らす今度の爲に輕と申せば日頃の恩を報じ申
 れば然ば夜明なば伯樂淵の砦を乗取可と評議一決して明るを遅しと待居たる然るに去頃織
 多が崎の砦を蜂一賀阿波守乗りける時永井右近太夫直勝水野日向守勝成の兩人は伯樂が淵
 に居て直勝は砦の形状を見勝成は彼砦を一攻して見よとの仰せあれども勝成は船なくして
 彼所は攻難を言上し尙彼地に行向ひて砦を巡見す抑々此伯樂が淵といふは船場の西に
 當りて要害無双の地西國表の一虎口成ければ城中も此所は容易ならざる場所なり器量あ
 る輩らに守を仰付らるへしと皆々齊く申けると雖もと言んより薄田隼人正兼相に仰付べし

とて終に世に決したり此薄田兼相と云は故大閤秀吉公の小性より今斯迄に出頭し身丈高く心剛にして力量人に勝れ常に好で相撲をどるに如何なる剛の者と雖も薄田が上に立者なく或は毎度喧嘩を仕出し時に因ば胴切或は袈裟切などにし又手鞠の如く雲井迄に投付られ腰骨を折る、葦らも有ければ人呼で鬼薄田と云合り類は友を招の習ひにて是に従ふ葦らも力量人に勝れたる面々のみにて薄田常に人に言に何時までも秀頼公の御身の上に一大事出来ば其時こそは我働きに勝る者は恐くは有可らずと廣言しける程の不敵者成ば扱こそ此度の櫻に當り伯樂が淵の大將として人数を率て發向し井樓を組揚大中白に耳付たる旗空天よ驪へし勇氣激くとして備籠る水野日向守此景状を見て今夜仕寄を付て此所に在可と云けるを永井右近太夫は先住吉へ参り此趣きを言上す可と申ければ然ば逆葦島の道を造て石川主殿頃に相渡し兩人は住吉へこそ歸りけり扱主殿頃は其身小島に陣取士卒は水中に身を浸し鉄砲を放けるに折柄大雨頻々降れば火繩も消るばかりあり此時若の井樓堀の狭間より鉄砲を連發しければ主殿頭主従心は矢猛に思へども船無れば渡る事を得ず如何はせんと猶豫ける蜂須賀阿波守が家老中村右近は先手居乍ら御旗本の人より伯樂が淵を乗取れては先日の磯多崎の軍功も水の炮とからむ率や此方より伯樂が淵の措を乗取可と夜中に仕寄を付番廿九日の曉天きに船手は森甚五兵衛同く甚太夫陸地へ中村右近自ら先手となり惣軍水陸より伯樂が淵へ押寄て烈く攻立ける其時石川主殿頃は葦島に陣取船無れば渡るを得ず押出し兼たる其所に蜂須賀勢早鐵砲迫合を始たりとて彌々心を苦しめける斯る所へ燒殘りたる小船一艘流れ來れば是幸ひと喜びて阪階與五郎衛門神田九兵衛中黒彌右衛門大河内空右

衛門淺井次右衛門古川孫市伊井七郎兵衛の八人と飄然と飛乗押出さんとする所を松井覺太夫と云者古川孫市が鎧の袖を扣え如何なれば其破れたる船に大勢乗渡らるや若渡り得る其後に續く味方無て何ぞ合戦利ある可んや惣勢一度は馬袋を以て渡すべしと制しければ其顔して扣へたる袂を振放し鎧の柄を取延て舟楫とし獅子島迄渡り着て我先にと馳登る其時蜂須賀勢の内森長左衛門廣田加右衛門其他討死高名とくあり森甚太夫森藤兵衛鎧下にて高名し敵を四方に追散し物措を棄破る森甚五兵衛が船手の下知比類なし油入々稱賞したりけり阿波守至鎮は終に阿波屋迄押入古屋敷に陣を取扱石川勢の乗付し者の中に中黒彌右衛門進み出立懸り候はんやと言は森甚五兵衛は水深ければ下立ん事然る可らず船を才覺せらる可連石川が陣所へ船を寄させければ石川方には中黒彌部大川田村坂部次郎兵衛小泉新兵衛大久保八郎五郎并に高岡吉田森坂倉都築等を先手とし手にく鎧を楫とし土佐座の措へ乗込岸へ上ると其處面も振す突て境るに此所を守りし城兵ども暫く防戦せしかども遂に堪へず敗走す薄田隼人正兼相は其夜之町家へ出て遊女を招き數刻の酒宴又沈醉し前後も知らず打臥たり大將斯の如く成は士卒の面々も大體は田屋へ出て酒宴をなし城内に残る輩らとても習國々よりの集り勢にて此頃燭水練せし者共なれば一支も支べき弓を射し甲を脱て我後れと落行けり薄田も口惜く思ひ人敵を率て馳來りしも敵ははや城中へ入替り大勢なりと見へければ力なく大坂城へ引取けり又去甲平野口を燒拂ふ可由秀頼公の下知に依て薄田隼人正兼所へ馳向ひける東國勢又追立られ勝負もせずして逃歸り寄手に利をば得させけり彼と言是と云形と言語と行跡と雲泥萬里の相違とて皆爪弾きして笑ひける

○福島を乗取る事

抑々福島の新家と云は天満より西に當りて此所は大野修理亮治長が番船を備へ置福島には小倉左衛門行春といふ新參の士へ大野が手勢を添え又船奉行宮手備中守が手の者船を揃へて保る川口を支たり然るに廿九日の夜は雨頻り降出しければ石川主殿頭忠總九鬼長門守守隆向井將監忠勝堤の蔭より忍び寄頭を闕と作り押懸ける程に敵は周章狼狽行所を追詰て生捕三人首七級船も二三艘乗取ける生捕の者に夫々持口を尋ねるに此所は大野道犬が持口と申ける其後成瀬隼人正安帶刀兩人を御使として野田福島伯樂ヶ淵の間まで然る可所を見立淺野但馬守が陣所に渡す可旨仰遣はされける兩人は立歸て彼所は阿波守主殿頭と相對して陣取候と繪圖を添て言上す因て淺野但馬守は兵船廿餘艘を以て海上に備ふ初松平宮内少輔忠雄か家人横川次太夫は御感狀を賜り其他軍功の輩らへ時服黄金等多く賜ひたり

○船場を乗取る事

大坂城中には伯樂が淵阿波座土佐座迄も漸次に寄手を取しかれければ此上は惣拵を持堪へん事適ふ可らず依て物勢を上町へ引上樓の岸を限りに抱へ込可逆此旨を諸口の大將へ觸知せしかは何れも畏まり候と返答しけるに道頓堀を固めし大野主馬一人承知せず我等を細拾殺に成下さる可と言て退かされば其組の塙園右衛門も此所は捨所には有間敷と堅く言放らし所城中に評議の事あり迎廿九日夜に入主馬を城中へ呼入其跡へ脇道より使を出しはや北方天満より火を放ちて焼立ければ主馬が組も他の組も一同に旗指大砲太刀鎗杯皆棄て我後と逃込中塙園右衛門の組計は武器一ツも残さず取纏て城中へ引取たるが他の組の者

は棄たる旗指物を多く寄手の者に拾はれし程なれば世の物笑とありける大野主馬は後日に斯と聞て憤はりしが其甲斐なし借城兵が火を放て引取を見て松平武藏守同左衛門督中川内膳正松平周防守有馬玄蕃頭岡部内膳正加藤式部少輔等は直進としけるを御目付城和泉守押止めける諸士も此和泉守の甲州以來戰場巧者の老武者にて此所へ付置れし程の者成ば然ば如何して可らんと言けるに然はなり今進んは利無して損多し迎堅く制し止ければ詮方なく諸軍差扣に居るに其夜天満の船場を焼立て城兵は皆引取ければ爰に至て諸士大に後悔しけると翌晦日の朝迄も此火鎮らされど此を事どもせず黒煙の中を押分蜂須賀阿波守松平宮内少輔松平士佐守淺野但馬守石川主殿頭九鬼長門守等競ひ進で天満の船場に入て焼跡に陣を取たりける

○玉造口合戦の事

然程に井伊掃部頭直孝藤堂和泉守高虎越前少將忠直朝臣の攻口も皆壘を堀山に築き鎗砲を打掛日夜合戦を成たりしが先頃佐渡石見但馬伊豆甲斐の五ヶ國より金抗夫を呼寄せ天王寺口三ヶ所より堀始先城内へ堀入んとすれども士質悪くして成就し難く殊に城中よりも大小砲を間なく打掛ければ寄手の負傷死人數知らず又去頃より來る四日は兩將軍家茶臼山岡山へ御陣替有へしとの事にて尾張宰相義直卿駿河中將頼宣卿も夫々攻口を取固め働らかすして守る可と觸られければ各々其旨を承知しけり十二月四日寅の下刻城方石川伯耆守敷正(初光與七郎後安藝守)次男石川肥後守康勝(或は敷矩とも云)が持口の櫓より出火しけるが是は足輕の兵誤りて硝箱の箱を火の邊に置しより焼出し陣屋へも其火移り怪我人も多く櫓

造も屍失しけるなり此肥後守は大御所の御勅氣を蒙り浪入して居たりしを秀頼公も頼まれ斯箇城しけると聞えし然るに齊手には城中の火を見て驚破内々城中の南條中務少輔藤堂高虎も通し時を計りて塙柱を切提灯を振出し玉も入さる鉄砲を放つと覺えたり夫を証據に攻入べしと談合しける由其沙汰聞えければ是の必定相圖の火の手にそ有らん人に先んせらる、なと一同に鏗々と物具して思ひく、の旗馬表を押立たり越前少將忠直朝臣の先鋒本多伊豆守富正同丹下成重以下真先も進ひ旗奉行藤本九左衛門白吹貫中黒の(但横)金けし粟藏の出し黄の襖籠の中たる大馬表大竹階角取紙の付たる小馬表を押立堀近くへ進み寄所々の柵を取破て仕寄し付んと勵みけり斯と見て越前が先鋒吉田修理亮(元は關白秀次か家人なり)高屋越後守山河談岐守多賀左近藤田主馬助并武者奉行梶原美濃守太田安房守菅沼久彌朝比奈無道黒母衣の使番原平左衛門石川佐左衛門藤田大學大井田晴物長田四郎兵衛長柄奉行真瀬理左衛門同く角藏等我後れしと城際へ進みたり此時井伊掃部頭直孝が勢も金にて八幡大菩薩と書たる赤地の旗を押立金の蠅取の馬表を馬の傍らより引付同く堀へ飛入水も浸りしま、壘に登る前田筑後守利常の先陣本多阿波守横山々城守は梅鉢の付たる鎧金の鬘籠の馬表を前に押是も同じく堀際に至る頃は十二月四日(或は十二月三日共云り)卯の上刻朝霧深くして咫尺を辨せず城中よりは是を知らず露晴て見れば加賀越前井伊の人数甘きに蟻の集が如くなれば真田幸村伊木涼雄少も騒かす静り返りて居たりしか早や加賀の軍勢は一勢く、に押寄山河も崩る、計りの鯨波聲を揚て攻掛井伊越前の人數短兵急進で攻破らんと成ければ槽高くして一片の白雲縷を埋め堀深ふして萬里の如く石壁は巍々として水藍の

如くなれば心ならずも猶豫したりけるに真田は豫て用意やしたりけん堀表に付たる一門四方の出堀に矢挾間を二ツ三ツ斬たるを突出て横矢に射させ放せければ堀に取附たる輩ら一人も残らず打落し其死骸は堀を埋て恰も平地に異ならず然と東國勢の習ひ親は討る、め手は救はに死骸を橋とし堀を渡り主討る、も即黨は意とせず其鎧を取て跳越攻寄る、城兵も今は玉藥を繼に眼なく矢束を解し透の無れば只呆たる計よて殆々防ぎ兼ねたる所に真田伊木馳廻り前後左右下知を傳稻麻竹葦の如く取圍んたる其中へ指詰引箭散々矢を射込面も振す割て入當を幸ひ難倒せば越前の先手本多伊豆守同く丹下白旗を取て人數を引揚んとしけれと鐵砲に打煉縮られ進退途を失ひ背背を偃て立居たり然と少將忠直朝臣の舍弟松平出羽守直政の時僅に十四歳なるが先手と同く進み寄堀底へ下らんとせしに天方山城守と云者前へ立塞り凡そ大將たる者は士卒と共に動かぬ者よて候暫く此所よて下知し給へと抱掛ければ然ば我は此處に居る其馬表は堀際へ押出さす可と下知し給へば家人旗馬表を持下り堀に次り旗馬表を押立たり此直政は故中納言秀康卿の三男にて大御所の正しく御孫君なり實にや梅植は二葉より香しと諺なる哉直政幼なりと雖も大將の器量ありと諸人稱賛せざるは無し然ば明年の五月七日の合戦にも出羽守十五歳にして越前の先手に進み自身敵と太刀打して首を得給ひたり扱今日の合戦卯の刻より午の刻に至るも虎口を引取らす越前少將直政朝臣前田筑前守利常井伊掃部頭直孝三家の軍勢を善道へ導き思な續せず攻よとて攻鼓を鳴し曳々聲を出し攻破らんと競ひ境れば城兵も愛を假られては何の面目有て再度人よ面を向可や死して屍を曝す共武名を穢じものメ爰を先途と防ぎければ何時果へくも見えざりけ

り御目付衆は乗廻り引揚可と下知を傳ふれども互に死を輕んじ命限りと戰ひける故是等の事耳入ねば御目付より合戦の次第を御旗本へ告る事櫛の齒を引か如し兩御所御氣色悪く何れの攻口より法を背きたるや直次馳向て速かに人數を引揚可と仰せられれば安藤帶刀畏まつて朽葉色の丹衣を懸鹿毛の駒を揚彈丸の飛來る事雨霞の如きを事どもせず戰場を乗廻りして上意を傳へければ漸く未の刻に及て越前の物頭岡部淡路加賀の物頭大河原助左衛門以下の數万人悉く引取けり大略此日寄手の負傷死人筆記するに違わらず其後本多伊豆守同く丹下の兩人を召て法に背き合戦を始し仔細を尋ね給ふに兩人謹しんで年若の者ともが公敵に合戦を仕つりし事畢竟兩人が過失なりと申上けるが又掃部頭臣木俣右京拔郎して疵を蒙りし事法を背きたる罪重ければ罪科に行はる可やと將軍家より伺はれしかば大御所召て斯の如き折又法を破る者は稀あり只穩便にして置せ給ふ可と仰られけり誠に將に將たる御大量なりと人々評したりとなん備藤堂高虎は諸陣俄然に城へ取懸るを見ければ南條中務が相圖の桃灯無りければ敢て兵を動さず只鉄砲ばかり厳しく放ち備を固くして抑たり彼の南條が叛逆顯して城中にて殺されし事城外には知れざりし故高虎も相圖を遣しと待詫けるなり兩御所には御機嫌悪く御陣替延引したりとて將軍家并に尾張宰相義宣卿駿河中將頼宣卿と共に御陣替を遊さる諸今日の合戦に加州の戰場を見て參る可しと御使番渡邊半次郎(後圖書と号す)を遣はされしかば則ち竹東一本を援六尺五寸に斬て堀際迄間を打て委細に言上す此時城中より鉄砲を烈しく打けれ共運よく渡邊に當らず歸陣後與力五十騎同心百人を預けられけり

○河田八助勇力の事

然程今福口の寄手も次第くは仕寄を付竹東を立鉄砲を打合けるが爰松平左衛門督忠繼の軍勢も今橋口は押寄鐵の楯三枚足輕六人押立其蔭より大小砲を放し暫くして兵を引んとする所大野治房が手の者銅連火砲を打懸ける程に三枚の鉄楯忽ち打倒れければ六人の足輕は楯を捨て出出す斯て城中の武者一人楯の上に登て高聲を呼はる様只今鐵の楯を捨て逃入たる御勢の紋を見るに正しく池田氏と見たは御目付の楯を取返し給はすは末代迄の家取瑾たる可と遠慮して一度に咄と笑ひける松平忠繼は年若の大將成ば憤りに堪はず誰か那楯取り來れと言も果さるに黒糸威の鎧の毛の足輕を緒首に着なし上より下迄真黒の出立にて牛も驚く斗の大男仁王の出來損ひの如き者徐々と歩み出城近く成大眼を赫と見開き鬼鬚を左右へ無作ら一府聲を張揚て只今の楯を取返さん爲罷出たるは物の數には候はねと左衛門督が鄭重にて河田八助と申者も候幼年より山川の漁狩を業とし黄石公が兵衛韓信張良が謀略は赤た夢も知らぬと時に臨で謀り義に依て死するは勇士の恒珍らしからず況や楯を取歸るに何の難き事か有んと鉄の楯三枚を重ねて輕々と小脇を搦込城中を原目と睨で引たるは八か鬼かと果る、ばかり敵も味方も暫くは是を見詰て憫然たり斯る所に大野主馬が郎黨小畑源右衛門元來砲術の上手成けるが衆に向て申けるは假令焚槍の再來にもせよ我筒先は廻ん若打倒さすと云事無と三十目の鐵砲を以て打懸たる其勢も百に落るかど怪まる、間に此玉八助が押付に當れと八助是を事どもせず後三枚の楯を提て本陣として歸りしが元來大力の者なる故試しの具足を着たる故か僅の淺疵を負しのみなり

○天滿船場寄手へ御下知の事并蛙合戦の事

同五日大御所には九鬼長門守守隆を召て今度番船を乗取敷座の働らき神妙なり以後愈々忠勤を勵むべし城内の者夜々に忍び出る事有ぬへし汝兵船を以て川口を堅く守るべしと仰せ含られ又横田甚右衛門宮權左衛門を召て天滿船場の寄手には堤を前に當て鉄砲を打しめよ負傷死人一人も無様に仕つるべし縦合城を攻落すとも味方に負傷死人多ければ勝たりとも負となるへし是良將の好さる所なり此城を諸將に相繼へしと仰付られければ兩人は直に馳進つて御意の趣きを申觸けるに有難き上意とて上下擧て感し奉つりぬ又午の下刻白銀千枚を住吉の社に獻じ給ひ其後小堀江守政一別所孫次郎友治等を召て諸軍勢住吉の社内に於て狼藉無様相守る可旨仰付らる申の刻兜山の庄官等住吉の御本陣へ來りて昨日兜山の邊に蛙共幾千とも無相集りて南北に別れ合戦する事半時許終に北の方の蛙戦ひ負て或は死し或は負傷て何方へか行しと申上ける大御所聞召て蛙合戦は古來より度々例あり我等幼少の時三州岡崎にても見し事あり併し蛙は三冬より土中に蟄し仲春の末に至りて漸く出る者なり然るに今は冬の終り假令不慮は土中より掘出さるゝとも手足屈で動く事自由成ざる者あるに其蛙夏の如く手足蓬者にして合戦する事實は奇異の事ありと仰らる蛙合戦は人の評て時節と方角は依て考ふれば南の蛙は必ず負べき筈なり其故は北は水より南は火最水寛みなり水は火より勝ものにて北は利あり今や時節冬から蛙は水に就て自由成るなり時節方角共に北に利あり然に何故に南の蛙戦ひ勝たりや不審ありと言合り此時陰陽博士鶴川時信と云者人に語りけるは世人の評する所理有り雖も正理に非ず夫蛙と夏出て冬は土中に入り

○藤堂高虎豊志谷口攻とる事

なり然るに十二月の蛙合戦は是大變なり時冬成る南の蛙に勝は是亦變なり案するに是下越上の理にて是か下上に蛙と名の變あり我思ふに關東は下なり大坂は上なり終に必ず關東御勝利ある可前表ならんと言しか果して其言葉の如く成けるこそ不思議なれ

是より先去る四日の夜藤堂か手の戦ひを云るは城方織田左衛門長入道雲生寺が豊志谷口の持口を固免ける三上外記徳原八藏が下八等喧嘩を仕出し双方陣屋を並べ居ける故兩傍共其追取刀にて此場へ斬付互ひに聲を揚て斬合ける故陣中以外の騒動す然は雲生寺は自ら出て是を制しける内其主外記八藏も此所へ來り共制しければ是にて漸く静りしが負傷死人五六人もあり藤堂の先手藤堂仁右衛門同く新七郎同く勘解由以下此騒動を知て俄に押寄城を攻る事急成ければ大將雲生寺馬上にて百廿騎早川九郎右衛門木下左京長曾部宮内少輔赤座三右衛門三上外記徳原八藏其他寄合衆浪人大勢にて防ぎ戦ひ互に鞠る間の聲矢叫ひの音は天に響し地を動す此口の喧嘩に動揺しける故にや城中何となく騒立ける高虎が兵は勝に乗て攻破らんとしけるを見て雲生寺下知して烈く鉄砲を打しむれば高虎が家來渡邊勘兵衛は紐の勢并に手の若黨を誘引眞先に進み堀際迄押寄し所城中より放つ鉄砲の爲に勘兵衛は馬より打落されければ薄傷なれば死せざりけり此口の合戦危き由使番の者馳歸て秀頼公に申上ければ直に鉄砲頭山川帶刃堅信北川次郎兵衛宣勝等に足輕共を引連加勢に參る可と仰付られ其他羽柴河内守秀則井上小左衛門時利一宮助左衛門廣政以下最寄持口の輩ら雲生寺を撥ふへさ旨仰渡されける高虎此時御本陣に在けるが斯と聞て歸來り此体を見て自ら揚貝

を吹流かに引取せたり實に進退駈引の下知に随ふ事手足の如く見る人老練を感じり備六口は大御所住吉より茶臼山へ御陣替わり同く九日山城宮内少輔瀧川豐後守大御所の御前に参りて先日伊奈筑後守に仰付られし長良川堤漸く今日築立たる所河水悉皆く尼が崎へ流れ城中へ逆は少しも通らず故に天満の川淺く成ぬ今の如くんは天満川の水は近日涸へきかど申上げる其後御使番を召て今夜より夜中二三度関の聲を揚或は鐵砲を放しむ城兵を切かし敵の心を易からしりさる様よすへしと仰渡されければ依て毎夜三度宛関の聲を揚鐵砲を放し唯今攻入可体に見せければ城兵驚き騒ぎ終夜寐る事能はざれば士卒等大に因却を極めける

○有樂修理が使茶臼山へ参る事

同く十日織田有樂齋大野修理亮等が使者村田吉藏米村權右衛門の兩人本多上野介正純が陣へ來る後藤庄三郎同道なり依て上野介は庄三郎と二人の使者を召連て御前に出秀頼公が心底を言上に及ぶ是と豫て和睦の事を仰遣はさるゝに依てなり此時大御所仰られけるは今度諸浪人を招き集め籠城あるは謂れなり事なり然と浪人の命は助くべし秀頼は大坂を立退て大和へ國替致さるゝか然なくば大坂の惣堀を埋めらるゝか此二ツの内を以て和睦し天下の民の安穩なる様其宜敷に因て決せらる可と宜ひければ兩人は畏まつて其儘退出す其後御使番は寄手の詰陣に廻り万一城中の者降参するに於ては免す可と矢文を書て城中へ射込へしと仰付らる此日京都より鉛千斤獻したり斯て村田米村は城中へ歸りければ織田有樂齋修理亮は兩人を謀所より招き兩御所御和睦の事如何仰せられしやと尋ねれば兩人は大御所の

仰の通を逐一に述べるば有樂が家人村田吉藏は其儘計り難しと申す大野修理亮が家人米村權右衛門は愚慮の見る所は眞實かとす因て有樂修理亮其故を問ふ米村答て御使として兩人本多が陣に行し所則ち御座近く召れ直々承まはりし御口上の旨趣眞實で無ば何として我々如き小卒へ大切なる御返答仰らるゝ等は無れば某しは眞實かと存するとすければ兩人も尤もと言たりける備城中にては一度御和睦の沙汰有しかば城兵は氣緩みけるにや今夜密手関の聲を兩度ほど揚げるも城中には少しも騒す兩度とも関波を合せ松明を投出鐵砲を放出す初の関の聲は西の中刻後の聲は亥の刻あり翌十一日大御所は間宮新左門寺田半兵衛島田清左衛門を召て金堀の上手に相談し攻口石垣の有所を見て堀しむ可と仰附らる然るに藤堂井伊前田三人の攻口に堀入可有は地の底に堀入鐵砲の藥を積差火を附は石垣忽ち崩る可とす附ける然ばとて掃部頭らの攻口より堀せけるも城中も是を知て同く穴を堀其中にて戦ふ可と用意しけるが井伊が攻口は土質脆悪しく遂に成就せざりけり翌十二日は兩御所天満より備前島邊を御巡見あり又將軍家には有馬玄蕃が陣所の井樓に登せ給ひしを速も見て城中より銅連火砲中筒を放懸る依て御近習の面々勿体なしと申しければ開入給はず因て水野日向守参りて斥候は一口見切巡見は惣体を大略に見積り一所に久敷に留らぬ古法に候鳴野の方へも御覽有可と申ければ因て鳴野へ成せらるゝ時に上杉が陣の前を通らせ給へは直江山城守下知して直々城中へ鐵砲を打懸けるに城方先を越れ御通行の間は鐵砲を放たざりしと然ば上杉の軍法は格別ありと御供の面々感心す兩御所は御道筋を替て今福の方を廻らせ給ふに本多佐渡守参り若殿も廻らせ給ふやと申上けるに大御所には我幼少より干戈の

斯く人成しかば城中に居眠りして居難し鬼も角も大將の心次第なりと仰られければ佐渡守は大に恐怖し急使を馳せて母儀を將軍家へ申上る是時將軍家は早岡山へ赴かせ給ひしかども斯く申召又急立歸らせ給ひ今福筋を御巡見なし給ふ其後寄手は堀際へ近寄て柵結廻し非極を拵へ砲術熟練の者を撰み城中を見下に眠下し大砲を本丸へ打入させければ城中の困難限りなかりしとて

○城中和降評議の事

斯く十五日兩御所には後藤藤三郎を召て城中の事を尋ね給へば庄三郎答らく先日仰遣はされたる上意の趣きにては秀頼公の御口振も早和の候なら母儀未だ御承引は無れその質として關東へ下り給ふ事は洵々御覺悟も有様に候秀頼公には召抱られし浪人輩今更追拂はんも不便と思ひ玉ふへし然迎彼等を扶持するに傾地おければ御加増を遣せられれば必ず御和睡あるへし先日御聞に達せし時浪人共何の忠有て知行を賜ふ可由仰遣はされし後は未だ兎角の返答おしと申上ける茲に本多上野介正純が陣へ京極丹後守高知同く若狭守忠高等會合せしか母儀の御心未だ解さる故仰に依て阿茶局を此處へ招き又城中より二位の局をも召出し思召の旨を傳へ母儀御承引にて愈々御和睦に於ては誓紙を遊され遣さる可との事なり上使を未だ秀頼公へ遣さるる城中より使者二人上野介が陣に來り申けるは母儀人質の儀は仰に隨ひ給ふ可なれば兩御所よりも秀頼に御誠意有可らず浪人に扶持せん事叶ひ難ければ御加増有たしと述べければ大御所大に御氣色懣く浪人に述行を與ふ可謂れなし斯の如き自儘の儀再度申來らば使者の首を刎べさそと使者を其儘追返し給ひ重ねて大御所は牧野清兵衛

衛府宮内大工中井大和等を召て砲術熟練の者を數十人撰み敵の柵を放破せよと仰附らる依て三人は相談の上備前島片桐主膳正が仕寄塔は城へ近ければ彼所より討すへし殊々片桐は案内を能知たれば兎に角彼所こそ然る可迎備前島に至り片桐に對面して城内の方角を委細圖定め眼て母儀の御座所を目的として大砲數百發を放けるに忽ち矢倉一ツを打崩し其母儀の侍女七八人を放殺しければ殘る女房達周章狼狽歎き悲ひ聲は呼喚地獄も是は過しと思はれたり斯て二位の局阿茶の局と同道して城中に來り和睦の儀を申けるに母儀は先刻の鉄炮にて侍女を打殺しけるを見給ひて心も弱りしにや一時も早く和睦仕給へと秀頼公へ再三申勸られければ承引玉はねば誠田有樂齋大野修理亮并七組の番頭的面々も種々も諫ければ秀頼公開給ひて今度一戦を企つる事全く我運を開くべき爲まわらす亡父の遺命に任せ此城を墳墓と定る所あり然るに面々は何の故を以て然様に和睦を勸るやと言れば皆々柏れて言葉も無りけり有樂修理密に相談しけるは斯てこそ所詮事盡ふまじ新參の者が諫言し來つらば却て事行はる可かと此事を眞田長曾我部後藤明石以下に相談しけるに兎も角秀頼公の御爲とあらば細分諫言申可とて眞田左衛門佐幸村長曾我部宮内少輔盛親後藤又兵衛尉基次明石掃部助全仕以下の浪人頭秀頼公の御前へ出時又修理亮衆に向ひ今度關東より和睦の扱ひあり御承引有て然る可や否各々の心底を憚りなく申上べしと言ければ後藤基次は進み出今度御籠城に因て故秀吉公恩顧の諸大名へ力を協せ籠城す可旨仰遣はさる、其儀なく恩を忘れ義を捨或は使者を誅戮し或は擒にし終に返翰をも參せず今彈藥兵糧は城中は餘り有と此は限ある物なれば必ず盡る期有へし是を城中へ入んとせば敵兵數十万通路を



遊りて妨くへし又後討の兵来て敵を追拂ふ可方便もなく何の頼處か有て和睦御承引なき人々不審に存るなりと申上ければ眞田幸村は續て今後藤が言所道理なり夫籠城は士卒心を一にして防ぎ戦ふ共後詰の勢なき時は落城候間なり今南北持口の休を見るに敵兵急に攻來らば城兵色を變して邊巡し其上目に立所の白き吹貫を見て織田雲生寺等は三ヶ度迄色を替たるは謀略有ての事にも候とんが案するに敵に見知られ後難を恐るに因ならん又去五日藤堂高虎が豐志谷口を攻柵を破り門扉等取付たる時城中の兒童小女に至る迄石を運び薬と繼ぎに危く見えたれば諸人片唾を飲で扣たり然るに彼手の惣大将織田雲生寺は昨夜より風邪と稱して所入て直宿衣を着て遊女を集め頭を打せ臥たる由借に聞り大將斯の如くんば士卒何そ勇を勵まんや然ば遂に藤堂に攻破られぬ可見るければ近傍の持口の輩ら彼所を援ひしなり故に漸く持堪へたり斯様の者をこそ敵と言か味方と言か彼是を思ふに疑ひ更の時さるなり此雲生寺は織田有樂が子息にて秀頼公が御家門南表に大将たり此人そら斯の如し况や端武者の輩らは勿論何たり共頼み難し然ば今の体にては所詮永き籠城は叶ひ難し敵より和睦を取結ばる、こそ幸ひなれ速く御許容有かしと申上ければ秀頼公は何とも宜はさるに座中の而々口同音に眞田か申所道理なりと申けり有樂と修理は元來抜かひを好みければ急ぎ起て淀殿の御前より出而申す所を淀殿と北の方へ申上此上は御親子御自害ましくて士卒の命を助け給ふか然すは抜を開召し御和睦有て時節を待せ給ふか此二ツの内極め給ふより外なし此旨秀頼公へ申上られ然へしと申上ければ淀殿は涙を浮められ城中の軍勢は幾許も有に弱りぬるこそ御情けれ傳聞頼朝之朽木の洞に隠れて命を助り終に天下の主

と成りと然は秀頼公は流石秀吉公の御子成ば命を全ふし給ひて時の至るを待せ給はばあぢ積善の餘慶無らんや此事承知あく身をも家をも亡し母にも愛目を見せ給はんは返くも悲しけれ此趣きを秀頼公へ申上可と泣々仰られければ有樂修理は能事出来れり互に悦ひ直に秀頼公の御前に出て淀殿の御心底細々と申述て後有樂申けるは我聞越王幻踐は敵に囚れしも終に會稽に恥を雪さしと況や今度之而御所和睦の儀再三仰遣はされ其上永く御如才有まじとの神文を進せらる可との事之日本國中の軍勢雲霞の如く馳集りて日夜戦ふと雖も未だ柵の一重も破り得ず實に今度の合戦は君の御威光を輝かすの時なり是御運を開せ給ふの時節到來せしなり斯れば自然味方属せんと希ふ者も多かるへし其上大御所ははひ七十七有餘おれば御餘命も久しかるまじ苦難去に於ては必ず變亂起りて天下の士二ツに別れん其時にこそ合戦は自在成へけれと言葉巧言成は秀頼公聞給ひ面々の才所一々其理あり此儀は最前も片桐市正手を諒しあり然るに各々は當時片桐を妬みしも今の難儀を見るよ友で漸く彼が諒を善と言ふ事は皆秀頼不運の致す處よて今秀頼運を天に任せて討死せんと思へば古參新參の別なく皆命を惜みて悉皆く和睦を好む噫人心の定め難きと子の免れさる處なり今よ於ては是迄の功に何も遺す物とては無れば切て士卒の命を全ふさせんこそ恩賞の登つなれ恥を捨て早々和睦取結ふへし嗚呼片桐が忠言漸く今日に顯れたり未代迄の言れ種なれども他に術なしと御眼に涙を浮ばれば有樂と修理は笑を含み退出す心の程こそ恐ろしけれ

蓋聞明者は無形に見智者は未萌に慮る況や其照哲なる者を手扱も十二月十五日小栗又一忠
 破山本新五左衛門等陣所を見廻り歸來て大御所の前に出船場持口の城兵等石川主殿頭忠
 總が攻口の橋を燒落さんとするに石川は鉄炮を打立候より未だ燒申さず幸ひに蜂須賀阿
 波守は大身に近所に備へたれば陣替仰付られ彼橋を守らせ然るへしと申上り候と兎角の
 仰も無りければ永井右近太夫直勝進み出速く阿波守を仰付られて然るへし若橋を燒落され
 なば城を攻るに通路も容易かるべからずと申上れば大は所是に湯氣色を損し傍に立置れ
 たるゆ長刀を取れ永井を追寃給ふ直勝驚き逃走るを松平右衛門太夫伊長刀に取付漸く止參
 らせしかば大御所仰に主殿頭は年若ければ是非を知らず大久保權右衛門は老剛の兵にて是
 程の事に迷ひぬるこそ不覺なれば彼所の橋は敵方より燒まほしく思へども橋を燒は最早惣攻
 は爲さると敵も思へは其儘差置所あり此より橋を燒落さは是幸ひと云へし日本國中の兵を
 以て此城を攻落さんに橋一ツを懸へさや橋を燒すんは彼所の兵心易く寝る事すへからず一
 兩日の中に城中より夜討を掛へしと有しか果して翌日城兵夜討に出けるこそ不思議なれ抑
 々夜討の次第尋ねるに城中本町橋筋は大野主馬助治房を惣大將として其手の小頭には堀
 國右衛門直元米田監物貞安（或は長岡監物とも云）石川外記顯一新宮左馬助行明布施彌七郎
 友峯岡部大學則綱等なり然るに前月廿九日主馬を城中へ呼入其後城中より人を出し天満邊
 へ火を放し時主馬が人数大に狼狽打物兵器を取散し上町へ逃入しかは其跡へ蜂須賀淺野が
 軍勢入り代り主馬が人数の捨行たる旗馬標を拾ひ取蜂須賀の陣頭に立置て度々嘲罵仕ければ
 主馬を始め國右衛門等も大に怒り是非蜂須賀の陣へ一夜討して此怨を報せんと謀りける其

後城内に軍議して川筋の橋々を燒せし時も主馬國右衛門相談し本町橋を燒前今夜一夜討と
 定ける所へ向組石川外記岡部大學來り一手に成て討て出へしと謀し合せ夫々用意しければ
 何となく騒動す國右衛門是を見て斯の如く大勢にて騒動せば夜討の手術叶ひ難し凡夜討の
 法は瓦に面を見知り合物馴たる輩ら小勢を以て号令を定め夜討に入ては敵に紛れ引退さて
 は敵に紛れさる様に人数を立台言葉を極め進退金鼓に従ひ我手足の如くせざる時は却て敵
 に利を得らるへし依て主馬助と兩人にて打出ん各々は持口も違たれば無用なりと言けるに
 石川岡部の兩人大に怒り御邊の勢のみ敵の面を見知り物馴れ我々が人数は盲目同様と思へ
 るや吳子孫子が秘書も近世は普く流布し嬰兒も是を誦せば農工商の別なく今や早苗植る女
 子も唄へば大工も懸壁に是を誦し況や兵法を業とし一身を立んとする武士誰か兵術を知ら
 ざらんや汝等か身分として人を蔑如にするの條奇怪なりと双方惡口未だ破事こそ起らん
 と爲けるを御宿越前守中に入斯様の砌味方に口論を爲出て忍傷及ん事不覺の第一なりと
 制しければ瓦の争論は止てけり兎角の永詮議の内に夜も既に明ぬれば遂に夜討も止たり然
 どて此傳に討せさらんも又口惜けれと今夜は是非に夜討すべしと十二月十六日の夜大野
 主馬助が組塙國右衛門同組米田監物等を大將として其他武士百廿餘人各々討て出る中にも
 上條又八田積市郎兵衛の二人は自分の心懸にて丁かど問は半と答へよ敵近つかば淺野但馬
 守長晟袈切すと聲々に名乗べしと號令して合言葉を定め置たれ共其場に臨み淺野が裏切と
 言人は一人もなかりしとぞ扱丑の刻に至り門の外橋の向詰に鉄砲白挺を並べ置味方引揚る
 節若敵兵追討せば討取んとの計略なり依て足輕頭三宅久太夫橋本平左衛門安井庄右衛門收

野牛男太等相携へたり先登番に門を出るは國右衛門が組二番は主馬助か手廻り三番は監騎が組と定め門を開かず潜より一二人宛出て月影の有所にて待合すべしと約束しける所に然はなくて二宮與三左衛門一番は潜を出橋の北の方へ立後陣を待す進しが其次に山川三郎右衛門橋の中央に出る頃後陣も引續き二宮山川先陣に進み蜂須賀が陣へ押寄國の聲を揚るに諸軍は察耳に是を聞驚破敵の夜討成が馬よ物具よと周章狼先騒立しが蜂須賀の人数は静りて國の聲をも合せす備を堅固て待ける所へ城兵は突入れれば蜂須賀が勢相翼に開き前後より取圍んで討んとするに折衝月間ふして敵味方も別兼ければ又魚鱗も備て中を破らんとすれ共敵は小勢にて味方と混し彼我の分ちも付難ければ左右に負傷死人數多かりける斯る合戦なれば首を取らば暇なく城兵には松井次郎右衛門拓植十太夫上條又八等高名成たり石村六太夫は蜂須賀が兵と引續き二三度轉けたるが石村終に組伏られ味方は居らぬか扱けよと呼はるゝ梶原太郎兵衛は日頃石村とは知己なれば其聲を聞馳來り見るに天曇りて月も無ければ物具の籠も定かに見えす梶原是を懸石村は上か下かと問は石村下こそ六太夫なれと言に梶原衝と寄て上に成たる敵を刺殺し六太夫は首を取せけり此梶原太郎兵衛は今夜高名を爲ざりしか此所にて朋友を扱けしを功として引揚たり二宮作右衛門加田理右衛門車加兵衛大桑九左衛門田積市郎兵衛津田半三郎梶原兵部成田彌太夫松田理兵衛荒川源吾池田右近右衛門森島佐左衛門都築茂左衛門鈴木半衛門并ひは搦國右衛門が若黨岡本長左衛門等高名す又平田治部右衛門も高名し首を取若黨も持せ城中へ遣し我身は踏止りて戦ひしが終に討死せしこそ勇々しけれ扱翌十七日秀頼公千疊敷の大廣間に出給ひ高名の者廿三人へ夫々褒美を

賜はりし中に平田は討死したれば三歳の男子へ家督をはされし上褒美も同く賜りけり此他の城兵坂本宮内二宮與三左衛門島川宇太夫粉骨を盡して相戦ふ然共蜂須賀勢は大軍なれば八方より揉立し程に脇坂又右衛門竹村新之丞井喜右衛門以下十四人は枕を並て討死す蜂須賀が家臣中井右近勝重は敵討入しと聞より長刀小脇に挿込で飛で出當る幸ひ難立けるか其身金銀にねば數十ヶ所の重宝を負乍ら木村喜衛門と渡合鎗を捨て右近に突掛し所へ蜂須賀方にて稻田修理走り寄て木村を突伏る其時城兵牧野牛男太畑角太夫田屋右馬介修理を討止んと駆付けば修理は鎧を投突にして引退く又蜂須賀の郎等岩田七左衛門長谷川小右衛門横井十部兵衛馳寄て鎧を合せ四宮與兵衛鶴飼七郎左衛門等敵多く討取高名す城兵には米田監物伊達空彦太夫等奮戦す塙が組の生駒又右衛門は中村右近を突伏て其首を取んするを修理が一子稻田九部兵衛當年十五歳の初陣成しが斯と見るより馳寄て生駒と火花を散して戦ひしが終に生駒を討て其首を取中村が首も取戻し俄と共と郎等へ引渡せし其舉動は敵も味方も感せぬ者をかかりける其間に蜂須賀勢追々に馳集りければ老練の國右衛門故輕く諸兵を引揚しが漂て用意を爲たりけん夜討の大將搦國右衛門と記したる木札を此處彼所へ散布し置たり此夜蜂須賀が勢も二十騎餘り討死し敵の首廿八級討取たり城兵も又五十餘騎討死し首廿三級を得て引取けり時に大野主馬助治房彦宿越前守正倫は橋上のに人数を立て引取勢を迎たり搦國右衛門は堀の際迄引來り暫く茲に支え米田監物始め城中へ入せたり其時城兵岩田七左衛門之猩々緋の羽織を着し士卒は後れて引けるを好敵と思ひけん蜂須賀が兵追來りて鎧を付ければ是は岩田七左衛門成ぞ過らすなと言ければ扱は味方よて有けるよ

とて鎧を引此は蜂須賀が郎黨も岩田七左衛門と云者あり敵味方同名にて彼も狸々緋の羽織を着しける故味方と心得て鎧を引けるに岩田は徐々と城中へ入ければ敵と知て臍を嚙けんとなり以和陸御登儀有けるに七左衛門は殿ありしかば阿波守が方より譽て遣しけるとかり翌十七日の朝團右衛門が士卒の内高名せし輩らは歸せしめ其他の人々は己が陣所へ呼入昨夜の働きを夫々書認場所は繪圖に爲置ければ御和陸段右の繪圖を以敵味方の剛臆を吟味し塌が組五十騎の内よて廿八撰み出明年の合戦又は指物を替黒きしないに姓名を記して指せたり又鈴木半右衛門と云者首一ツ持来りもぎつきの由申ければ團右衛門兜を取て見るよ太刀疵なし是疑ひなき入子首なりと見れば彼首を取廻し誠に珍しきもぎつきなりと申ければ傍らの人々目引袖引襷さ合たり團右衛門と夜討の論をしける石川外記は御和陸後原田次郎兵衛を檢使として大廣間にて切腹したり

○秀頼公并淀殿城中寄手兩陣御覽の事并秀頼公諸將士を勵さる、事

大坂城内にては具田左衛門佐後藤又兵衛等の面々評議の上大野治長迄申上けるは寄手兩御所共自ら陣中を巡見有様に見受たり夫故よや寄手の諸陣營共勵みて油斷なく隊伍を整列り秀頼公にも過日來陣營御巡覽の御沙汰は有なから未一度も御巡覽なく夫に隨ひ諸兵士等漸次に勇氣撓みて見乏關東の勢威とは雲泥の相違に覺候何卒諸軍を勵して勇氣を増度爲時々御巡覽有まはしく貴殿の御執成よて然るべく秀頼公へ言上あれと有しよぞ修理も此議に同意して直に御前に出具田後藤兩人の申せし趣きを具に申上しかば秀頼公も夫は道理の次第なりとて其夜は將士兵卒迄美酒佳肴を賜りて日來の勞を慰め給へと諸軍は大に勇立厚さ

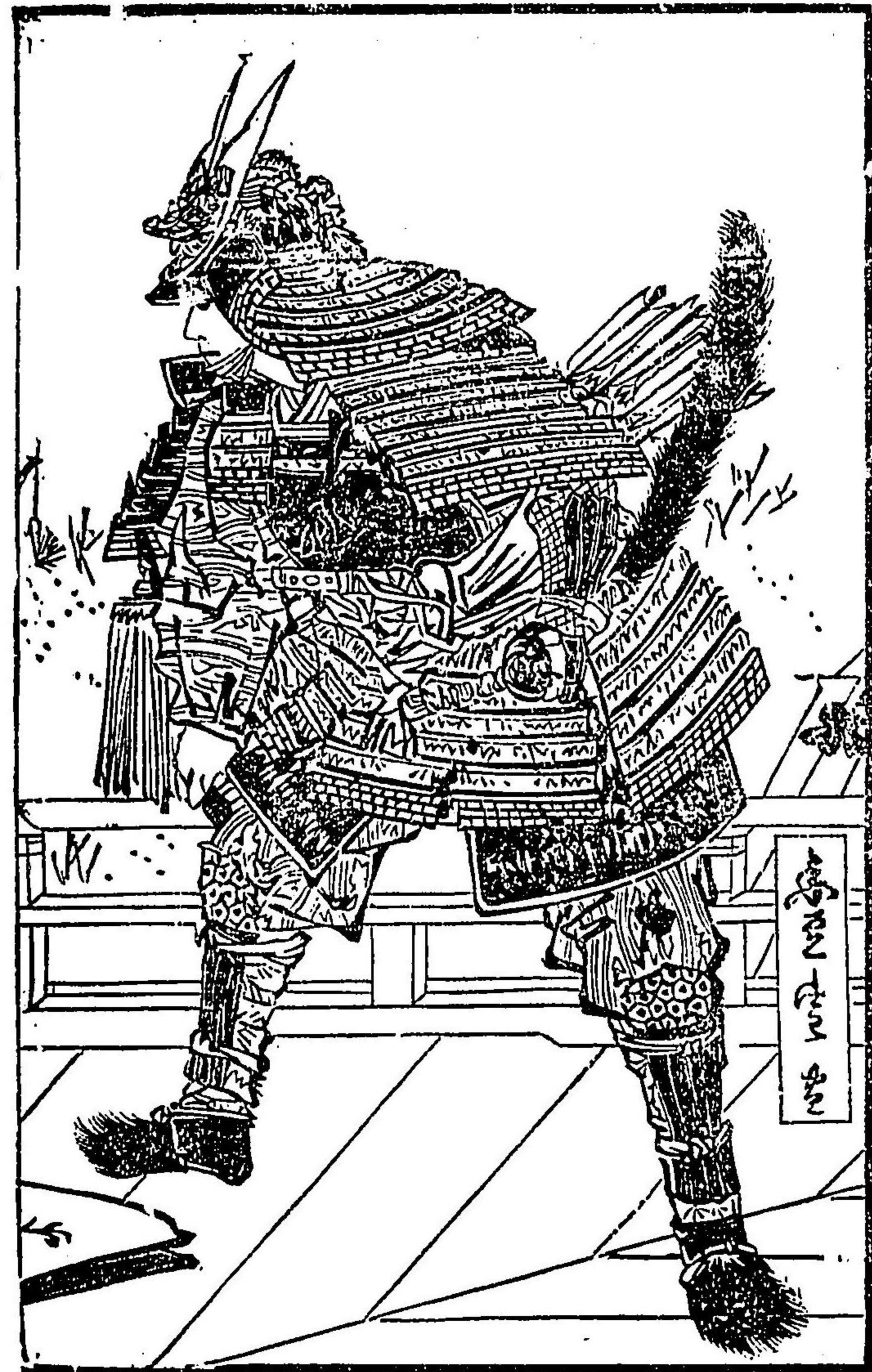
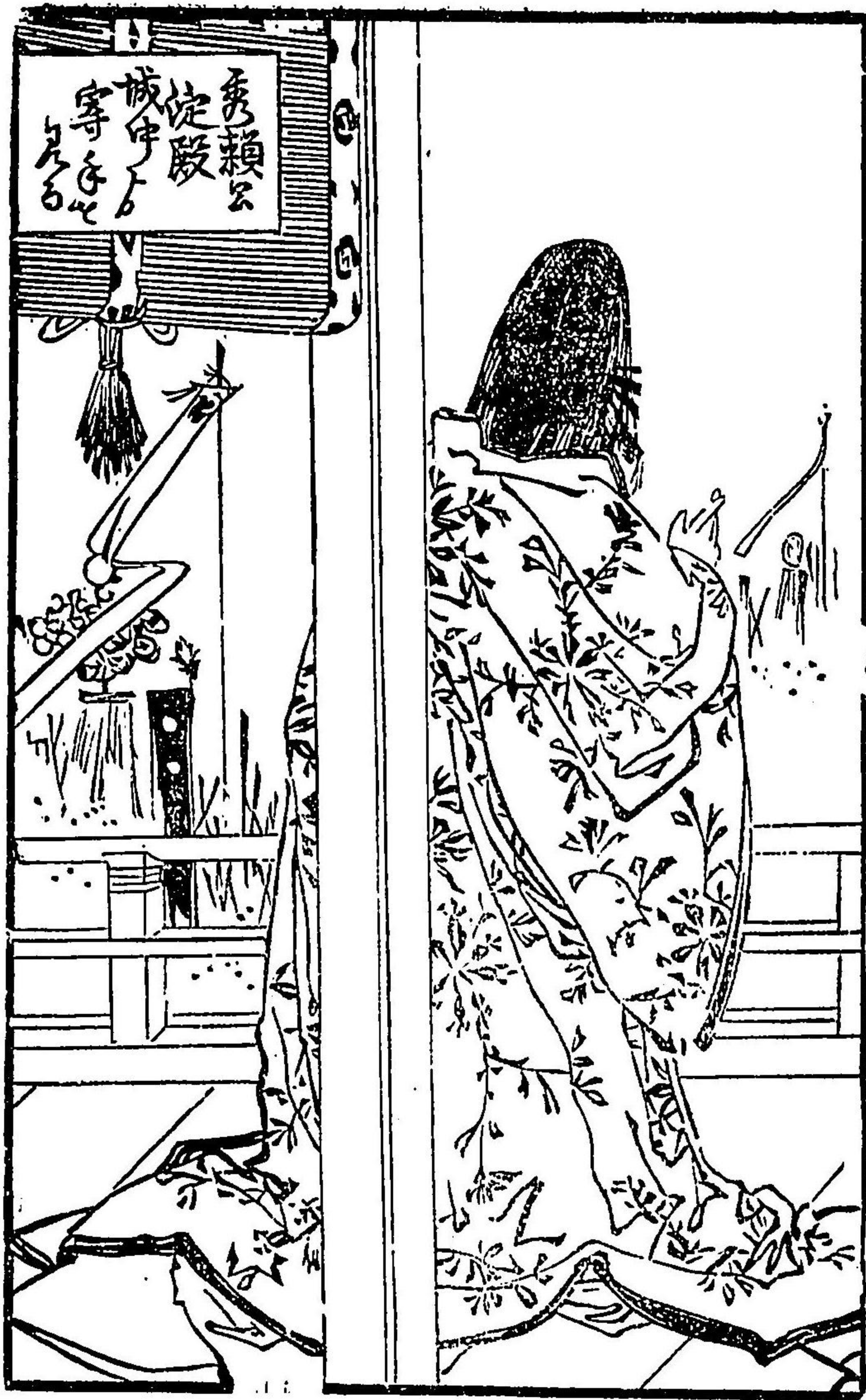
蕙を感じけり其翌日には秀頼公自身巡覽あるへしとて近侍外様の人々秀頼公を圍繞て陣所を巡覽せられ後に續て淀殿も女房數多召具し給ひて二の丸三の丸よりして本丸指て出立る此時秀頼公の小馬鞍金の切裂十二本郡主馬助良列の預り成ば是を陣列に押立たり津川左近親行は茜の吹貫五十本金の千生瓢箪の大馬鞍何れも旭日に輝きて光を添る其蔭よ透間有せず鎧たる武士一概六七万人兜の星を輝かし甲の袖を連つ、雲霞の如くに並居たり其外櫓の上下及び通間の蔭には射手と違く二段に成て弓弦を引縮く矢束を解て押寛け敵接近を待も有ば鐵砲に玉藥を籠火繩を挾たる其陣列の暴水漲り來つて平地忽ち江河と成大山崩れて滄海を埋るも敢て動くべき共見を最嚴重なる景況を備々御覽有て最頼母敷と御喜悅の色こそ見えよけれ倦又敵の軍兵をも見給ふべしとの仰せよて天守に登り四方の寄手を巡らる、に平地といふも更なり山々峯々錐を立るの餘地もなく又川々海上は數千の軍船を漕運ね水陸皆家々の紋付たる旗馬鞍數万流を風の儘々翻へし靡き重なる景色は秋の野面に咲競ふ尾花の末より尙繁く鎗薙刀の日に映し見々と輝き渡る景状は霜夜の星の水面を照すよりも凄しく其勢幾百万と云致を知らず山岳も是か爲に震動し物軍の関の聲には坤軸も須臾に擺んとす淀君は斯の如き敵の大軍掘際迄接近しを見給ひて俄然に驚かれ織田有樂大野修理亮等と呼ばれ見られよ城外四方八方四五里の間は敵の陣營雲霧を凝ひ數百萬騎の軍兵共遠き山々迄も充滿して錐だに立へさ餘地も無れば終よは城を攻破られん事必定成へし軍勢皆々討れば誰か秀頼を守護すへさとて頻に落涙有けるが聽て天守を下られて暫しものをも得云さりしは哀ども又笑止なり抑々此淀君は淺井備前守長政の女よて心も剛よして

常葉家臣云る、に我は婦女の身成其心と男に劣るまし自然君に事有時は甲冑を着て劔を執天晴一方の大將と仰かれんこそ願しけれ各自も固分忠節を心懸名譽を後世に後されよと以て氣に云れけるが夫に引變一度關東の大軍を見られしより忽ち心弱り泣き悲されしかば大野治長是を諫めて言ける様業より日本全國を敵に受たる事成は寄手の大軍は覺悟の上なり今更何ぞ驚くへき然其味方も屈竟の精兵六七万騎も有ぬへし其上兵糧矢玉等も又些少にあらざれば斯る名城の落ん事容易ならし自然二三年もは籠城に及びなば餘所成ぬ御中故終には御和睦も候へし必ず心強く思されよと辭を盡して睡ければ寢殿は落る涙を押拭ひ其は然る事成へけれ共如何にもして秀頼公の御身の上さへ慈なく渡らせ給ふ成ば妾は人住の野原へなり共行て住居んと泣叫はる、を治長は慰め兼て秀頼公の御前に出云々なりと淀君の悲歎の体を申上しかば秀頼公聞給ひ婦女は敢果あき者成ば然も思すは道理なり政尚一ににて押言なば我も廓外に打出花鹿に戦争して名を後代に殘すへし大概合戦は強ち兵の多寡にも因へからず唯士卒の心を一まするとせざる有而已此道理を味方の士卒に能々申聞へしと宣ひければ治長は則ち諸將士等を集て右の理を詳らかに語れば將士等何も感涙し隨つ、君々たれば臣々たり誰か露命を惜んや適れ敵惣攻に境れかし恥知箭をは一筋射て神速に討死せんと士卒俱々勇けり

○兩軍御和睦の事并青山石見守城中へ内通露顯の事

さて説常高院は城中に於ては和睦の事種々に勸しか共將等將士等各自異見を述諍論區々にして未だ御同意の御返言も無りけるに將軍家は茶臼山へ成せられ大御所には對面有て秀

頼公の返答遲延せしを憤怒給ひ近日諸軍勢を催促して惣攻を仰付られれば大坂城を攻落さ九事掌中に有ぬへしと仰上られければ共大御所には否々此城を攻ん爲に諸軍を催促して惣攻を致なば味方も多く討るへし其故如何にと云に昔時一向宗本願寺の住僧顯如上人此城に備籠しを織田信長數萬騎の軍勢にて三ヶ年餘も攻られければ共終に城を落す能はず其後太閤殿下多年心勞して築かれたる名城成は力攻になすは容易かるを謀計を以て城を陥んと其長將と云べけれ暫く此老父を委任らるへしと仰有て本多左渡守信を召秀頼は未若年なり淀も婦の事故長く細城なさんは定て退屈に思へし家臣士卒と雖も或は小身又は新參の者共成は今は心區々に成て死を善道にする者は指を折て算る程ならん然れば和睦を執成常高院の歸り來るを待受なば又如何様も方便有へしと宣ひけるに將軍家も佐渡守も上意御道理ありと御受有て秀忠公は岡山へ還御有せらる又其後美濃守忠政を召て仰られけるに我今茶臼山に陣すれ共忠政は木津口へ陣を移して本陣を嚴く守護せしとの命令に因忠政直に陣を轉じたりしが又將軍家の仰に因て天滿邊に赴き仕寄柵等を用意し且接戦の備を爲たりけり城中に之淀殿悲歎の折柄成ば和睦の執成を好機に思して大いに歡ばる、により秀頼公にも力あけに和睦の事を諸將も相談有ければ皆一同に口を揃へは和睦引引は於ては諸浪人の分は必ずしも悉皆く首を刎らるべし然れ共最初より命は君に奉つりたれば如何様どもは心に任せらるべしと申ければ秀頼公は道理に思付ければ共又淀殿の悲歎大方成されば是非なく和睦の事を承引有て常高院は二位の局、寶地の局を伴ひ京極、狹守忠高の陣に歸り來りしかば本多上野介正純も參會す然に秀頼公の返事には當城惣廓を取毀ち裸城



と成へき事は仰に臨ひすべけれど淀殿及び北の方を人質として東國へ下向の儀は何分仰に
 隨ひ難く有樂及修理亮等の子息は人質に出すへければ兩人共は助命有たく且秀頼公には
 疎意有問敷との由誓詞を賜るへしとの欲望により上野介より具に言上せしかば兩所は即
 ちの許容有けるよ付常高院二位局發場の局三女又將軍のほ前へ出被物三領純子三十四秀頼
 公より進せらるゝ趣さす上又同時に織田有樂の嫡子武藏守大野修理亮の嫡子信濃守彌十郎
 等人質として參向せしかば即ち本多上野介に預らるゝ物廓取毀らの事は秀頼公の人数にて仰
 付らるべき旨を三女中上げれば然らば立合として京極若狹守を遣さるべき由を仰渡さる三
 女即ち城に歸りて其旨趣を申上げるに翌廿一日は安藤帶刀成瀬隼人正永右近大夫等の諸軍
 勢仕寄を悉く本陣迄引揚べしと命せられ又城中へは堀を埋へき奉行として松平下總守忠
 明本多美濃守忠政本多豊後守康重豊後守(廣高の子息なり)等を遣されける續て澁川豊後守
 秋益佐久間河内守政盛山内宮内少輔秀宗山本新五左衛門義一等は城中四方の門々を警固し
 諸人の乱入を制すへき旨申付られたり然處へ播磨室州兵庫等に薩摩の軍船七百餘艘豊前
 の軍船四百餘艘肥後其外九州の兵船都合二千餘艘着岸の由を上野介披露せしに早速の發航
 を御喜悅有しが既にナニと斯和陸及びひし上は其餘なく歸國致すへき旨を上野介より申渡
 ければ兩國勢は遙々の風波を渡き來りて一戦をたに成す空く歸る事の口惜さよと云合り儲
 廿二日に口念々御和睦と決定しに因昨廿一日よりは敵味方共に弓箭鉄砲を止め早今日は楯
 竹築旗馬馳等進も取片付けるにそ餘り利速成御和睦にて敵も味方も唯々夢に夢見し心地し
 て酔るが如くありしとぞ左右する内城内は未開かされ其内外の士卒等皆堀際のみ垣に臨

みて親子兄弟山嶽の輩相互に手を舉つて子を開て招合生會再てを歡喜けるは王質が山より歸
 て七世の孫子に逢し如く歡喜面顔に表れて勇立こそ道理なれ

○青山石見守城中へ内通露見の事

既に御和睦調ひしにより惣堀を埋め石垣を壊しに下奉行として御使番山田十太夫渡邊半四
 郎青山石見守等を遣さる然るに此青山石見守は去慶長五年庚子九月濃州關ヶ原の役には祖
 父汗法齋とて福島左衛門大夫正則が手に属して武功を顯し其他數度の戦争に高名を得しか
 ば福島正則是を執成しに因て將軍家へ召出され最初は青山常陸介忠成の手に属して還俗な
 し主人常陸介より姓名を與しにより祖父江を改め青山石見と稱けるが舊福島の家臣の頃よ
 り大御所には御心安く思召され平常御寝所迄へも召寄られし者成しと或時山田十太夫渡邊
 半四郎等と俱に同席して有し處に奥女中一人不斗立出て御使番の青山石見殿や在すかと尋
 ければ如何成故にや石見は赤面して迷ひの体に見えけるが然とて今更詮術無ければ石見は
 此處に誰在候と返答しよ彼奥女中高聲よ御城内上々様を始皆々様にも御意なく在せらるれ
 ば貴殿にも御心安かるべし且其御許にも御無異の御事重疊幾度と述終りて直に奥へ入れ
 ば石見守と山田十太夫渡邊半四郎等兩人を對み只今奥女中の口上は貴殿等御兩氏の思はく
 近頃面目なき次第某しの御親類共先頃より籠城せしを彼女中其事柄聞能知て斯様に告し成
 ん此事將軍家の御聞は達しおは定て御糺明有成んど頻に先否を悔ける故兩人聞て言ける様
 從合機密を洩せしとて斯御和睦有し上は其配慮に及まじと口には云と心中には這は捨置難さ
 一大事なりと兩人密に謀合せ斯と言上せしかば兩御 ともに御怒せ給ひて彼が叛逆露顯る

。上は餘人の見儻成敗なさんと取敢ず青山常陸介へ御預仰付られけり

○御和陸に仍て雙方御誓詞の事

既に慶長十九年も僅に残る年の尾に關東大坂の合戦何時果へし其見えざりし所双方御和陸の講調ひければ矢叫ひの聲も鎮靜世は春近き長閑さ上貴賤老若推靡祝さぬ者そなかりける期十二月廿二日雙方和陸の御誓詞取交せ有べしとて城内よりは御判見届の使者木村長門守重成今年廿一歳色白く眉秀天時の勇士にして白小袖の上に黒小袖麻上下を着し黒毛の馬に打乗誓詞の入へし文箱を渡黄の服紗に包し儘携へ郎等七人打従へ其跡より郡主馬助長列は小具足を着し二百餘騎まで長門守に添ひ天王寺口より茶臼山の下京極若狭守の陣所まで到り同人の案内にて御本營の前より兩人下馬して内に入れば本多上野介出迎て案内す大御所の御前には松平右衛門太輔秋元但馬守成瀬隼人正安藤澤刀等伺候しけるに木村長門守は大書院の中央に召出さる大御所には御綿子の上茶色縮緬の御小袖同色の御胴服純子の御袴茶縮緬の御頭巾を召れる上野介は前に向ひ長門守と披露す親て長門守は前に進み少も慥したる色景なく今度不慮の弓箭に及びし處は仁徳を以て和陸に相成天下の大慶是に過す候恐ながら御判拜見の爲某しを參らせられ候と云終て平伏す大御所問召て和陸の上は夫も及ふまじしけれと天下の人安心の爲成ば難く併老年に及びて指血如何も不足なりと暫時躊躇給ひし時御進出の人定て長門守は其儀に及ぶまじと云成んと思居たるに長門守は何ともせず御手元をのみ見詰居たりしに大御所は聊か血を注せ給ひしが長門守謹慎で是を拜見し秀頼公は於ては別段存寄も之有間敷候へ北淀殿には婦女の事故兎角

疑念も之有候へば血判今少し鮮明に成下されたとや上げれば大御所は老年に及び指の血至て懸と仰られ乍ら御後に着座せし女中の方へ御手を山させ給ひければ針にて御指を刺穿らせしが今度鮮明に御血判有しに上野介は受て長門守へ渡ければ臺と俱に押認し篤と拜見して巻納を文箱へ入し所へ左京亮尉斗を持出来る伊奈筑後守御守代として其闘斗を長門守に授けり其時大御所には長門守に向せられ其方は常陸の子かど御尋問有ければ然候と返答奉つりし大御所に備と御手を拍給ひて實に容貌の能似たる者と汝の父常陸は白秀次殿に仕官て最も忠義の者なりしが石田三成の讒言又因て冤罪に其身を亡ひぬ實に弓箭取身辱哀成者はなし併其方の父に仇敵三成は予が討て取せし疎くな思ひそと宣ひければ長門守は大御所の御定如何も御懇懇成を心中に感し御誓詞を押戴き文箱に納め頭には掛徐々退出せり其最初長門守は玄關より上りし時は大小名の群集の中を一禮もせず御通しが蹄途よと人々の前に跪づ先刻は秀頼公の口上を言上せざる前故各位方へ一禮にも及ばざりし段御許容下さるべくと町摩に挨拶せし群集の人々其儀々しきと感じ敢て詞を發さざりしが末座より伊奈筑後守進出は念の候事なり早々御退出有べしと返答せしに長門守も一禮述て徐々御門外へ出にける後にて大御所御傍の者へ仰せよ長門守と櫻に梅の香を添柳の枝と咲せたる如き能若者なりと御賞美有しとぞ其後秀頼公判元の檢使を本多上野介へ仰付られしに城中よりは若年の長門守を以て使者とせらるゝに此方より若年の秀頼公へ某し老臣の身として御使者と參らば城方の思く如何有ん願くば若年の御小姓の中にて御人撰有て然るべしとや上しかばそは道理の次第なりとて板倉内膳正此時十八歳にて正

使を命せられ阿部備中守を副使に立られける兩人共陣羽織を着して郎等五十餘人を隨從て木村の跡にて續て玉造口より引んとする時織田有樂大野修理亮等豫て案内を出し直今日日は愛度御使者成ばと大手を開門せしに門々磐固の諸士等何も烏帽子素袍にて威儀を正して並居たり扱大慶間に秀頼公立烏帽子にて直垂を着し給ひ御着座有ければ大野修理亮披露して板倉内膳正阿部備中守等兩人御前へ出秀頼公には何共宜はす只大野修理に向給ひて御宛名は如何と仰られしに大野は正使板倉内膳正に向ひ御宛名は如何致へくやと問し時内膳正は少も躊躇す大御所へと返答ければ秀頼公は其辭の如く御宛名を記して指血を注ぎ直に奥へ入給ふに大野修理亮是を取次て板倉内膳正又渡し御使ゆ苦勞と挨拶しければ板倉阿部の兩人も和陸の段恐悦と返答て退出し以前の道より茶白山のほ本營へ立歸御前へ出けるよ大御所は大だ待察にて取敢ず宜ひけるは秀頼が誓詞の宛名は何と記させたるぞ我此事を其方へ中舎んと思居ながら不圖失念し後にて心付最氣遣しく思居れりと有し内膳正承まはり其事に候某しも宛名の事を伺ひ發し秀頼公の修尋問の際差當り當感仕つり候ひしが案し之御前の御使者に參し事故御宛名は大御所にて然るへしと心得斯の如く又計ひは誓詞前取罷歸りゆと申上ければ大御所大に氣色麗しく其方を使とせずば此一大事を過つべしに扱もく能計ひたりと大方成す御利美有れける實は内膳正と云長門守と云天晴俊々敷若滑にて末御殿ハ々よと感せぬ者こそなかりけれ

○大阪城掘堀石垣取崩しの事

大阪城掘堀石垣取崩方奉行松平下總守本多美濃守本多豊後守瀧川豊前守佐久間河内守山

内宮内少輔山本五郎左衛門等磐固して堀石垣取崩しに掛りし時大野修理亮治長は急遽しく來り奉行に對面して中けるは最初の御契約は惣堀とこそ定られしが是は西南外廓の事成又二の九三の丸迄破却し給ふ事其理なしと申しければ奉行等答へけるは阿部所にも惣堀を破却すへしと申られ候尤も某し等も惣堀と云は堀の有所は残す破却する事と心得候總堀と堀とは承まはらすとて數萬人の工夫を以て取崩方を急ぎければ修理亮も是を制するに力なく然は大御所へ言上すへしとて一先此處を退きたり是より先大御所よりは堀埋立出來次第注進すへしと屢々御使有けれ共未出來せざる趣きを言上せしに御機嫌大に悪りしかば秋元但馬守馳行て下知を傳へ輻二回餘堀の真中堀を築き馬の足の立様になし道路一筋を付させて即ち御本陣へ馳歸り既に堀の埋立出來せし旨趣言上に及しかば御機嫌殊に悪しく其後御上浴の時御乘輿にて彼道より堀の内を京橋へと通細有ける誠に秋元の才智衆も秀し之園人伺も感じけり扱廿三日には堀も大抵埋終りて名高き大阪城も唯裸城と成にける此夜日野唯心宗傳長老を御前より召れて今度諸記録等を調査られ公家古禮儀式の法漸々相違の事を其以前より追記れし所今に其慣習を改めず其改如何にそやと仰有しが是は五山の僧も衆も諸宗の記録を撰寫しめ給ひし故也とかや翌廿四日の夜如何成過失にや茶白山の御陣營中小性衆の小宗より出火して陣屋五六箇所類焼及ひしも松平右衛門大夫板倉内膳正加賀爪甚十郎堅固門々を守護して諸人の出入を改め諸陣隊伍を整列して守衛しければ程なく鎮火したりしとそ爰に織田有樂大野修理亮等兩御所へ謁見を乞小袖三領死を獻上せり時に本多佐渡守藤堂和泉守等御傍邊に在て是に應答せり然に城の堀石垣取崩し方は隨分念入に付

へしとの御意有しかば有樂修理亮の兩人仰せ畏まり奉つり候と御請を申上ける時大御所は本多上野介を召れ修理 儀是迄は幼稚の如くと思ひ居たれど今度は城兵一方の大將と成て秀頼へ忠節を竭し弓箭の道も疎からぬ人物と成しは大に感ずる所なり其方も以後修理亮に類似と御意有て修理亮の肩綱を御申請有て手自上野介も着せ給へば修理亮は大に面目を施し感涙を咽て御禮を申上退出せり有樂は湯次に下りて斯太平に至愛度御代と成ぬれば我等などは是を樂に存するなりと茶を立る眞似をして退出す次に淀殿よりも大角與左衛門を召使者に立られ夜具の蒲團を敷しられける廿五日に至り愈々明日は大所御歸洛有へしと仰出されければ伊達政家藤堂高虎以下の諸將士等軍議をなし終に本多上野介を以て竊に言上しけるは此秀頼公と御和睦の事頗る其意を得ず畢竟後々の禍災と成ん事必定成ば今度總堀を埋城と成しこと幸ひ是を破らん事容易かるへし是天の賜物なり直に本丸を打潰して大事を成就し給ふへしと辭を盡て言上せしに大御所は一向御採擷なく其儀甚だ宜からず凡不義を行ふ者ハ必定天の寶を受る事古今其例し尠からず近きは去る慶長五年に石田三成は西國五畿内の諸大名を煽動て再叛を企て剩さへ秀頼淀殿等を勸めて罪なき我一門を討亡さんと計ひけれ共天道正直を鑑み給ふか故に石田以下の逆徒等一戰の中に滅亡しぬ其際秀頼も生害させて然べしと諸將再三予に異見有しか共猶故太閤秀吉公の好誼を思て死を宥置しし慈悲心却て敵と成再度再叛を企て萬民之苦めしは是不義の最も太だしき者なれば今是を討は容易かるべけれ共人の惡は却て善を以て執んと思ふか故に和睦せり此後とて又秀頼恩を忘失て不義の所業有は穴て天を蒙るべし是自樂自得の道理なり予案する

に織田信長は時の將軍足利義昭公も忠節を盡すと雖も我成權有に任せ後終に義昭公を配流せり此不義有故に信長は又其臣明智光秀に弑せられて終に子孫も衰へたり又秀吉公は君の明智光秀を討亡し其身信長の後を受けて官録共に身に餘りしも信長の子孫を弑せられしは是天道に背けり此故に秀頼も又人望を得る事能す武田信玄は古今の名將と世に仰れしも其父信虎を欺き謀て甲州を誘出し終に浪々の身と成たる不孝の罪逆難く故に其身一生の間に近國さへも順へる事能す三州野田合戦の時流矢に中て疵を蒙り其疵不癒して終に死せり又幾程もあく其家滅亡するとは天道を背が故に神罰を蒙る所あり我等は信長と盟約以來屢々力を戮られし故に秀吉公と織田信雄と合戦の時日本國中の諸將皆秀吉公に屬しければ共予一人信雄の交誼を忘す長久手に於て秀吉公と戦ひしに味方大に勝利を得たり其後秀吉公より和睦を乞れ大政所と妹を人質として送しが故に和睦を調へし以來力を合せて坂東坂西の強敵を討亡し大功を擧し事故擧げ違有す予は素來秀吉公の家臣に非ず然れ共一旦は和順の舊好も愛て秀頼數度の不義を宥免し死罪を宥めり然るに又其恩を忘れ重て謀叛を企つる共誰か彼の凶惡に與方せんや予は斯の如く正直を主として天道を背かざる事を願ふなりと直成道を説諭し給ひければ一座の人々皆其寛仁大度に在ましけるを感伏せざるは無りしとぞ

○禁裏より七簡條を仰出さる、事并奥田幸村原貞胤の事
 同月廿九日廣橋大納言殿西三條大納言殿は目錄の七ヶ條を持參有しが正月の節會白馬騾殿のと産后親王位階のと以下と古今の異同律令式を編纂有て駿河より奏聞有べしと 勅定

有し旨を宣ひける爰に納屋宗薫堺より來り陸奥守政宗對面有て迭の挨拶終りて後境表の景況等を物語程なく退出せり同日富田信濃守信高沒收の地豫州宇和島十萬石を政宗の長男伊達遠江守秀宗へ賜ひける抑々慶長五年庚子九月澠州關が原一戰の後は雨十塊を動さず風枝を鳴らす四民の籠烟自然賑はひけるに關らざりし此一亂の發りてより京大坂境邊迄俄に資財雜具等を山林へ持運ひ農工商等の魂魄さへ懼しけるに幾程もなく斯靜謐に及ければ庶民何も千萬歳を唱其年も早暮て世之花鳥の春に移れば大御所には正月三日關東へ下向有へき旨定められければ其將軍家又は猶大坂に御在陣在て仍越年在せられ物麻取崩しの上等を御指揮有其成功を急速せられ或之非常をも察しえらるへしと聞えしかば諸大名を始として其他商民に至迄末代太平を祝し奉つりて各自集會茶の湯酒宴に頃日の辛苦をそ忘ける爰に越前少將忠直朝臣の家臣に原隼人正貞胤と云者有て武田信玄の家臣なりしが勝頼滅亡の後浪々の身と成て彷徨居たりしを少將忠直朝臣其勇猛成を聞給ひて召抱られ黒母衣の一人に加へられたり然も城方の眞田左衛門佐幸村とは竹馬の友成しかば和睦の後よと迭に辛苦を謂慰さむへければ閑暇を得て私宅へ來臨有べしと眞田より頻に招かれしかば素より對面し度け思へ其後の嫌疑も如何有んと忠直卿へ窺ひしよ和睦の上は苦からずと免れしに依大に欣喜眞田の陣營へ赴きければ幸村も又神選に其來臨を勞ひて饗應に善美を盡し往事を語り出し互ひに袖を濡しけり既に酒宴半に至て眞田潜然として原に向ひ某し身不肖成と雖も一方の大將と成ぬるを今生の面目死出の思出なるにより今回の戰爭こそ豫てより討死と覚悟せしに圖さるる御和睦と成て惜からぬ生命を今日迄も存命再度見參成つると如何にも願く

思ふなり然れど此回の御和睦も一旦のとよて後には必ず戦ひに成ぬべしと推察致せば又一兩年の間には討死成んとぞ思定めて居り最期の戦ひは那處成床の間に鋸置たる鹿の角を打たる角は某しの祖先より重代の家寶にして父安房守より我等に傳たれば是を若して討死成ん處存あり其際萬一や其胃を一覽有は幸村の首なりと思給ひて一廻の回向に預り度と申ければ隼人正は打點頭其忠節を感歎せしが時暫有て應答けるは凡武士たる者は一度戰場に赴けば誰か生命を保存べし唯後れつ先つとの差別は有ど是とて何れ其途に再會すべしと答けり其時白河原毛の馬は白鞍置て牽出させ自身乘て隼人正に見せけるに隼人と云名馬と云其迅速と八駿の天馬共云べく夫より地道を乘ながら萬一此後合戦有時は城廓大いに破却せられたれば平場の合戦成に因平野近傍に出陣して天下の軍勢に馳向ひ此馬の息の續ん程は戦ひて後討死と悟到せば一層此馬は秘藏ありと云つ、馬より下暫時有て又酒宴を開き酒酣成り及びて其日の黃昏頃暇を告て歸りしとぞ其翌年五月の戰爭に眞田幸村は彼馬を著し件の馬に打來て戦死せしこと惘然なり口さがなきは京童の慣習とて此度の御和睦は京極忠高の母儀の仲裁成ければ

茶臼山引分に成仲裁は京極の、ふくろやと聞く

○大御所東國御下向の事并秀頼公の使者岡崎へ來る事

慶長五年秋九月十五日澠洲關に原に於て宇喜多石田等の遊徒一時に誅滅せられければ四海一同は徳川家の武徳に感し草木も動ぬ御代と成梓弓八鳥の外も波た、す萬民枕を高くして睡眠とを得弓箭も楯に減りければ今年不慮に大坂の一亂起りて旂旗東西に靡き甲冑旭に輝

四方の山峯迄數百萬の軍勢充滿して錐をたに立べき餘地もなく鉄砲箭叫の響は天地を轟かし光陰重し合戦も既に御和睦とありしかば貝鉦太鼓も納りて難波の波も穩かに咲や此花色も香も今を春べと成にしを他地も霽さけるとなん去程に大御所は京都二條の城に歸御在ましければ元日より三日の間は在洛の諸大名諸士も何も甲冑を脱烏帽子直垂にて威儀室々と参列し日出度春を祝し春つり秀頼公よりも伊東丹後守を使者より立られ年始の御祝儀を申上られ大御所よりも石川主殿頭を以て年始の御答禮あり同く三日は大所二條の御城を御首途有て其夜は膳所も御輿を止られたり水野監物忠元は只見送として尾州名古屋迄隨從す四日には伊乘船有て矢走を渡らせられ夫より上陸有て江州水口城に渡り有ける五日には水口を伊發途有て申刻に勢州龜山へは着は六日は織田より伊乘馬にて御鷹狩を催され夫より名古屋に入城在せられ八日には岡崎城へ入らせられ此所に數日滞在有て日々最寄に鷹狩を催されける斯の如くにして御道中驛々に永らく御滞在有けるは大坂の動靜を問ひるべき爲なりとぞ、衆人私語けるとなん又大坂の惣堀埋立の儀に付ては傳臘大御所の御發遣以前に本多上野介を召れて惣堀は云迄もなく其他二三の丸迄も寄手の人数を以て破却し堀は三歳の童子と雖も上り下り隨意に成程に埋立べしと仰付られければ上野介は命を奉じて嚴重に指揮を傳へ城の惣堀を埋立し二三の丸は豫て城内より指揮有て破却すべき約定なりしも數日其沙汰無く殊に遠方より出張成たる寄手成ば永らく此處に滞在せんは最も難儀のとなりとて寄手よりも數千人助力有て破却せんと願出ければ這は道理の次第なりと有て即ち御堀入も成ければ惣人数は二三の丸の櫓高塀等を破却し續て城内の堀を悉皆く埋立

ければ城内にては是を見て這は先般の契約と大に齟齬りとて織田有樂大野修理亮等より上野介へ種々違約の難々を責めれば上野介は折節風邪にて引籠り居しにより其邊のとは悉皆く奉行等へ委任置たると成ば快氣次第早速に此方より返答申へしとて使者を其儘追込しけるを愈々急々大勢を手分なして破却しけるより織田大野等は大に憤怒城堀取毀の奉行等へ左右違約の難を責問ければ其奉行の面々驚きたる景氣もなく豫て仰付られしは惣堀埋立と有し故に残らず堀を埋めて候其方然迄に二三の丸の堀を大事に思ふ成ば定て再度秀頼公籠城有て謀叛を企て給ふと成ん其儀成ば只今より早々此方も城攻の用意を爲一特攻に本丸迄も打潰さんと懸する色なく返答しければ織田大野等は憤怒と雖も詮方更に有さりければ寢殿より於玉の扇を授として上野介方へ遣され惣堀埋方のと奉行等の心得違にははんが豫ての御契約と大に齟齬り此儀如何にと責問る、にこそ上野介其返答は少もせず於玉の扇を種々に馳進し酒と佳肴、餅と菓子よと善美を盡して饗應し醉に乘して上野介はお玉の扇を種々ける顔儀も、音聲には御容貌の艶か成と傳聞小野小町や伊勢女御どもあどか及び甲斐し殊に起居舉動等御發明に渡らせられ紫式部清少納言の再来にてやいはん勿々以て上野介如き田舎侍ひの同席するさへ身之餘り眼も魂魄も恍惚して身の毛も竊立てはなり哀れ此世の思出に御蓋蓋を賜れかしと取も足ぬ戲事のみ口に任せて云散し軒端の萩か玉簪の露の觸らは忽地に溢れ掛らん風情なり御玉の扇は案に相違し餘の事も腹立しく其儘此處を立出て有しと共少も包す寢殿へ上しは寢殿も果れ果何の答も無かりけり夫より暫く程過て彼茶臼山御成跡に在陣したる成瀬隼人正安藤帶刀兩人の許へ野大修理より使者を立取毀ちの

儀をア入しに夫は我々の任せられたる所にあらす我々の預るとは此地警衛の爲御跡に残し
 耳堀埋立のと成は本多父子へ御談し有か當然成んと言放ちて少も取合氣色無ければ是又詮
 方無き儘に左渡守方へ送ければ某しとは近日公用殊の外忙がしく何れ是より御返答すへ
 しと挨拶せし儘返言無ければ彼是時日を経る中に堀槽共大方破却し堀も千貫稻よりして有
 築修理亮等の邸迄も追々破却成たる故其材木を投入て過半埋たてたる處へ佐渡守は巡覽有
 て然も驚愕たる風情にて某しとは御川多にて此儀を憐れ委任置しに若輩者として何の思慮な
 く斯る粗忽千萬成事以の外にて併し今日改めて是を奮に復さんには又日數をも費して復
 費用も思からずとは云者の斯の如く双方愛度御和を睦御取結有し上は再度弓箭も世に出
 ずし重疊愛度吉端成ん各自心勞し玉ふなど然も悦喜しけに大に笑ひて徐々此處を立歸りし
 を城中にては將士を始倍々憤怒を有し堀成上は是非に及ばず空く時日を経んよりも秀頼公
 より使者を立られ直に大御所へ違約の難を御尋問有は是に増たる術は有まじ此儀如何にと
 發言有しよ一同是に同意して直標伊東丹後守青木民部少輔の兩人を岡崎表へ使者として遣
 はされたり斯て兩人岡崎へ到着し早々登城をしければ即ち大御所の御前より召出されしに兩
 人は謹んで平伏なし去年進せらるゝ所の御懸紙には絶廓の堀のみ破却有べしとの事なりし
 も二三の丸の堀石垣迄破却し給ふは如何御儀にゆや伺ひ奉つれと秀頼公仰付られたりとす
 上ければ大御所聞石れて夫は全く奉行共の間違せしと成べし卒爾の次第是非なき儀なり定
 て將軍家より昔時の如く普請有るべきと成んと然も事無氣に御返事有しかば兩使大坂に立
 歸り斯と秀頼公へ言上す其使將軍家の御使者として土井大炊頭利勝同僚しは機嫌を伺ひ奉

百四

つりけるに大御所仰けるは堀を埋ると時明さるやと尋問有ければ大炊頭承はりて平
 く公の御物語に凡堀と云者は堀易くして埋るに難き物成ぞと時々伺ひたるは辭成し
 今度實地を見分せしに果して違はざる由申上ければ氣色殊に佳しく然も有べきと成り
 の御意を蒙り退出せり斯て大御所同十六日早朝岡崎を發足あつて三州吉良に着傍あり此
 處に入日の間御逗留有しか井上計頭將軍家の御使者として來り是も御機嫌伺ひの爲且は
 大坂城堀迄破却の景況を言上せり其後成瀬豐後守正武も御使者として吉良に來りて大坂
 の城割等相濟て將軍家には伏見へ還御有し旨を申上りて退出せり夫より大御所は濱松へ入御
 有ける然るに將軍家も程なく駿府へ着御ありて兩將軍御對面有其日は將軍家濱松に御一泊
 有夫より大御所には御旅中御應待あつて二月廿八日駿府へ着御有せらる將軍家には十二日
 蒲原十三日三島十四日小田原十五日藤澤十六日江戸へ着御有ければ關東諸國の士農工商等
 何れも皆万歳を唱へ祝し奉つれり將軍家の御寮所は今度御和睦成て恙なく御凱陣有せられ
 しを限りなく御喜悅有けるも秀頼公の母室より連枝のお續合なり抑々越前の國守朝長
 景の旗下に淺井下總守久政と云者あり久政は淺井備前守長政の妻は織田信秀の女にて
 右大臣信長の姉妹なり長政には女子三人有て一は秀頼公の母室二は京極若狹守忠高の母儀
 常高院其第三は則ち將軍家の母室なり斯の如き最深き血統成故に和睦を限りなく御
 喜悅有しとかや夫是に付て御能を催し有て觀世金剛今春寶生の四座の輩ら御能を仰付ら
 れ譜大名にも其日拜見有て幸若八郎九郎も御前にて舞を催せしよ其美曲成と筆紙に盡難く
 聽人毎に感せぬ者ばかりしと抑々其幸若太夫と云者の素性を尋るゝ武中國の守護職桃

百五

并播摩守直常の未業あり此直常は元弘延武の大亂に足別高氏に属して屢々武功を顯し最も忠勇の譽有し者咸共如何成故にや然のみ恩賞もなかりければ後には方と後て新田義貞と謀合せ數度の合戦に及びけれ共天運の至らざりけるにや終に利有す浪々して直常戰死しける

○大御所は答に就大阪城中評定の事并大野治長難に逢事

秀頼公の使伊東青木の兩人並に三女歸阪して大野所の返事を申上ければ秀頼公老臣を召集此儀如何有んと御評定有しに老將共申上けるは舊冬御合戦の御も故太閤恩顧の大名關東の猛威に恐れ味方參る謀がらなし且當分御下知に相從ふ御家人等或は小身或は新參なり又當所は名城と雖も關東の計策は掛り外廓並に二三の丸迄破却致ぬる上は籠城成難し度場に於て相殿はんには軍勢少く關東の大勢と敵對し難し此後は大御所の仰に御隨從有て大和國に移り時の至るを御待有べし大御所は老練のと故餘命久しがるまじ他界以ては必然變の生ずらん時節を計り御旗を揚られれば故太閤の御恩を蒙る輩らは大身小身に限りず大和國味方に属し御合戦必定期運成べしと申上る又血氣の人々は當城を御開き有て大和に移り給ひせば彌々御威光薄く成其後假令御旗を揚らるる其甲斐なき御事あり然更太閤より參らせらるる大阪を御立退有て若他國にて不慮の御生害有は秀吉公在天の靈如何計口惜く恩召ん且は後代の嘲りを受賜はんも無念なり唯一筋に思召定められ御開城有まじさ旨急度申遣され共事異儀に及ばざ大軍を引受難に御一戰遊ばされ萬一不運まして叶はざる時城に火を掛各自並居て腹切たらんよと天下後世の間ねも潔よくいはんと申ければ此語を利を得て新參浪人の面々進出て當城を立退賜はんも然るべからず去年より今年に至る

遂關東の舉動を見るも終には秀頼公を亡し奉つるべき謀計とこそ存候其故は舊冬和陸の御は外郭の堀を埋らるべきとの約定成しに東國方より付置るる普請奉行惣堀の契約成とて押て二三の丸迄破却しは口上を仰入らるるに及んで奉行等事を問謀り卒爾の舉動是非に及ばず追て普請仰付らるるべしとの御返事成共其沙汰緩急し利さへ當城を開きて他國に移り浪人を追放して然るべしとの御事は皆勢を微にし戦はずして亡すべき謀計なり然れども備を動靜を考ふるに萬一大和國は御移り在さは浪人はは扶持を離れ所々に彷徨候はんより寧ろ心を一として當城に残り城受取に來る東國勢に向ひ一矢射て尋常に切腹をべし若又思召定められは一戰に極らは十萬餘騎の中三方餘騎を城に留て君を守護し奉つり七萬餘騎は伏見に向ひ城を乘取勢ひも乘じて京都に押寄不意に火攻の術を施しは禁裏仙洞を奪取て天子を守護し奉つり宇治瀬田の橋を引て關東勢を追散さは豫て故太閤恩顧の太名早晩降参し一味の徒も追々有べし斯なす時は味方の勝利極て疑ひなしと異口同音申述べれば秀頼公も此儀道理なりと一決し重て伊藤丹後守を以て故太閤粉骨細身して天下を一統し日本國の人民力を盡て建築せし大坂城を明渡し和州に移らんと思ひも寄す候又只今迄扶持致したる浪人御に追放せんも本意にあらす此兩條は曾て承引し難し此事は同意あきま於ては定めては人数を向賜はんか然らば運を天に任せ一戰も事を決すべしと手紙の趣き申參らせらるれ共大野所夫は秀頼の短慮なりとて猶和陸のとを取繕はせ賜ふにより兩使並に三女の往來三度に及びしか其終に手切と成ぬれば伊東并に三女は大坂城中に歸りけれ共青木は尙も板倉伊賀守に歎きしにより同人へ預らる大坂落城の以後年を経て召出され永く子孫繁昌す扱大坂城に

去九日の夜大野修理亮殿中の評定終つて宿所に歸る途中櫻の門の外にて一人の男突然走り出修理亮を一刀切付し儘東を指て逃行しが治長刀を抜て追駆けれ共手を負たれば歩行心も任せず即等山岡久左衛門問道より廻りて彼曲者を一刀切付ければ曲者は取て返し本道指て逃行ける然るも平山半兵衛と云者手負たる修理亮を肩より掛跡を尋ひて追來りければ闘ず彼の曲者に行達ければ平山得りと斬倒せば修理亮を掛猶二刀切付て其死骸を能く改むる處に大野主馬助治房が郎等成田勘兵衛が忍の者服部平七なりしかは早々成田勘兵衛を大野主馬助の邸に引來り糾明せんとするに成田斯と聞や否家に火を掛自害せしにより其事柄確乎譯らざるも種々の風説をあし主馬助兄の威勢を猜み密に刺客を用ひし共云又は關東より刺客を問者を用ひられし成其云て城中の人心洶々として穩かならずと云ん

○將軍家江戸御進發の事 并 洛中洛外騷動の事

四月十日將軍家江城を以進發あり御留守は竹千代君國松丸松平下野守(浦生秀行の長子)馬居左京太夫與平美作君忠昌内藤左馬助長政(帶刀忠興の父)酒井河内守重忠平野遠江守福島左衛門太夫等を留めらるる供の修先手第一番は酒井左衛門尉家次其組は松平甲斐守山内豐前守小笠原若狭守水谷伊勢守仙石兵部少輔同大和守相馬大膳亮第二番は本多出雲守忠朝其組は眞田河内守秋田城介淺野采女正松平石見守六郷兵庫頭榎村主膳正須賀攝津守一色宮内少輔第三番は榊原遠江守康勝其組は松平丹波守小笠原兵部大輔諏訪出雲守保科肥後守成田左衛門佐北條出雲守丹羽五郎左衛門尉藤田能登守等第四番は土井大炊頭利勝其組は堀美作守佐久間備前守同大膳亮谷大早頃北條久太郎由良信濃守溝口伊豆守第五番は酒井雅樂頭忠

清其組は牧野駿河守鳥居士佐守新庄主殿杉原伯耆守細川玄蕃頭比方掃部助稻垣平右衛門監阪主水正此面々將軍家御進發前同月六日又出立す老臣は本多佐渡守土井大炊頭御旗奉行三枝土佐守島田治兵衛屋代左衛門御鎗奉行範勘右衛門伊東右馬之允多門(阿部備中守土岐山城守御書院番頭青山伯耆守水野準人正松平越中守小笠原兼光)は本多助井上主計頭成瀬豐後守を始め御旗本の面々雲霞の如く供奉す慶長庚子關ヶ原以後西海一統干戈を藏め兵革を忘れ果たるに去年より珍しく軍陣に従事する人々は是を時と出立せしかば馬物具鎗太刀に至る迄四邊蓋明照輝き最も勇々敷行装なり當時信州松本の城主小笠原兵部大輔秀政の嫡子信濃守忠信は松本城の留守を守るべき山に聞ければ本意なきと思ひ万一留守致すべしとの奉書到來しては上洛叶ひ難からんと思ひ遮つて信州を立出せしを父兵部大輔は聊かも知ず居たりしが上京の上是を聞大に驚き本多佐渡守を以て上意を以て信濃守上洛仕つりし段恐入奉つる旨申上ければ罷る上は苦からずと上意にて將軍家の御前へ召れければ英法を背きたる恐れ有ば先御目見は速應仕つるべしとて御前へ出ざりけるが五月七日の合戦に討死しけること哀なり將軍家江戸御進發以來滞はりかく四月廿一日伏見より若御有奥州の伊達羽州の上杉佐竹等去年は御先へ出陣せしが此度は以後に従ひ追々出陣せり既に東國大坂と御手切成て彌々合戦に定まりける所天狗山伏の所業にや大坂より大軍を率して京都へ押寄空塔御座に至迄一字も残さず焼拂ふを恐る風聞しける程京伏見の輩ら去年預置たる資財雜具を頃日漸く運び戻しけるを又愛宕鞍馬の方へ馬車に積或は荷ひ運ぶ等して市中の混雜大方からず斯る所に又何者の申せしにや假令京中は焼失する共御禁中は別條なしと

ては内裏仙洞女院宮方の白洲に込入て假屋を立妻子を入置ける程に御所への御庭は雖
を立るの地もなく充滿したり勤番の青侍ひ是は如何成とぞと制しけれ共聞も入ざりければ
力無く門を開きてぞ入たりける此事大御所の御耳に達せしかば争か然事の候べき京都宣の
今に始ぬ臆病さよ騒ぐらん松倉等巡見して早々取鎮べしと仰付られければ伊賀守畏つて御
内裏を始洛中を守護し伏見は松平隠岐守定勝并大番頼松平丹後守渡邊山城守以下是を守
護す二條には大御所在ますより洛中の口々には成平下總松忠明本多美濃守忠政井伊備部
頭直孝以下大軍を率ひて是を衛護假令幾百万の敵兵押寄來ると雖も何の恐れか有べき況や
跡形もなき空言をや如何に町人風情成ばとて餘り不覺千万成舉動哉と論し恥しめければ人
民等は實もやと思ひけん漸次靜謐も成て家々も歸り始て安堵の思ひををし却て世の胡慮と
ぞ成にける

○大御所重て和睦の儀仰入らるる事

大御所は常高院並ひは後藤庄三郎光次を上使として四月廿二日 秀頼公並に淀殿の方へ仰
入られけるは舊冬一戦の際討果すべかりしを故太閤の舊好を思ひ且織若の交誼捨難とに和
睦しける處未だ半年も過ぎるに合戦を好み諸人を惱さるる條謂れなし此故は將軍には大軍
を率ひて伏見に到り大坂の城を攻落さるべきに定らる我等此事悲歎限りなし且秀頼を殺す
に忍ず此上ながらも和睦有ば和州にて領地等の事宜く沙汰すべし諸浪人の命に於ては聊か
仔細有まじき旨申遣はされけれ共秀頼公は此程浪人共の申せし異見違事と思されけるもや
一向承引なく唯一戦とのみ決せられ仰越るる趣さには隨ひ申まじく候とのは返事なり淀殿

是を問給ひ後藤庄三郎は大法大禮をも辨別さる町人常高院は破戒の賣僧俱に我等母子を賣
んとする者なり武士成ば生して歸すまじと怒らせ賜ひければ常高院も庄三郎も散々に追立
らねて凄々と大坂を逃歸ける

○諸國の大小名上國へ馳上る事

將軍家には秀頼公と御手切有て既大坂の城を攻らるべきに定りければ國々の大名小名等
是を聞て我もくと馳登る先加州には松平筑前守利常江州には京極若狹守忠高同丹後守高
知中州には松平武藏守利隆同宮内少輔忠雄堀尾山城守忠晴羽柴右近太夫光重四國には松平
阿波守至鎮幸駒殿岐守正隆紀州には淺野但馬守長景和泉には小出大和守吉英丹後には有馬
玄蕃頼重氏松平周防守康重岡部内膳正長盛奥州には松平陸奥守政宗(伊達)最上出雲守義光
米澤中納言景勝越後には上總助忠輝朝臣其外細川越中守忠興以下藩々の輩ら算ふるに這有
ず其軍勢道中引る切す雲霞の如くにして京伏見に居餘り在々所々に充滿し木の下岩の蔭も
軍勢有る所もかし斯て大御所は秀頼公の返答を聞れ太閤の後を斷滅んと深く御歎有られし
が今は是非あしとて將軍家へも此赴き申進せられ所々四月廿八日には大坂へは進發有べ
しと聞かしかば藤堂和泉守は河内の須奈に御陣所を造營す此時京極丹後守同く若狹守石川
主殿頭は牧方守口より大坂へ向ひ山陰西海の諸軍は神崎中島より攻入南海の諸軍は泉州よ
り海の大和口は越前少將忠輝朝臣を総大將として先手一番は水野日向守勝成其後は丹羽勘
助向丹助藤丹後守名松倉豊後守奥田三郎右衛門神保長三郎本多左京察山左衛門佐秋山右近
藤堂將監山岡主計頭多賀左近村越三十郎甲斐庄喜右衛門二番は本多美濃守忠政其後は伊勢

の諸將三番は松平下總守忠明其組は美濃諸將なり其中も水野日向守は殊更大御所御前に召され汝に今度大和國の先手を申付る旗本勢は河内路須奈四條繩手より押入べし旗本の先手藤堂和泉守三次は井伊掃部頭へ申付れば其方は大和越より國府へ出道明寺にて藤堂井伊と手を合せ申べし敵山中を取堅先攻方六ヶ敷は二筋に分て人數を押るべしと仰付らる日向守は誠に加至極に候得共去冬の合戦に大將衆を藤堂組下に仰付られい處仕寄を付るに及んで大和衆藤堂が命を用ひずみ某しと藤堂より猶も小身は候へば某しが事大和衆用ひ申さざる候へんよと却て思召に叶ふまじきかと存じ候旨申上げれば大和所は藤元近く召れ大和者藤堂と其方を何とて一口に申可や万一方の申處を違背する者有ば幾人なり共踏潰し候へと仰付らる日向守然様の拵はまはり候へば畏まり奉つり候とは請申上るよ大御所此度は其方人數を引廻し候様申付るにより往昔の一本鎗の心得にて一分の功を必ず争ふべからずと藤堂有しに日向守有難き御教諭畏まり奉つるとて退きぬ夫より大和を指て出發す

○和州法隆寺炎上の事 井塚の津放火の事

四月廿三日大坂より大野主馬助後藤又兵衛一万餘の大軍を率ゐて大和國へ乱入し法隆寺村の近傍を放火せしに頃日早打續きたれば忽ち樹木も燃移て炎焰天に漲り白晝變じて暗黒となり漸次く延焼し終に法隆寺も燃移りしかば塔の九輪地に響きて落る聲は金輪際迄も聞ゆやすらんと夥多し折柄風烈く吹出し金堂鐘樓經藏并びに八十六間の廻廊迄一時に灰燼となりしは淺間しかりし景狀なり抑々此法隆寺は聖德太子佛舍利安置の伽藍なるを如

何成故に燒せ賜ふと尋るに去年大坂より事起し時此寺院近傍に住居する番匠の棟梁中井大和ある者秀頼公の謀叛を關東へ告知せ剩さへ稻留と號し大砲を本丸へ討入侍女數多打殺しけるを秀頼公憤怒給ひ今度彼所を放火し僧俗男女を論せず燒殺し突殺されけること無慈なれ夫より生駒山を越郡山を燒擲ふ郡山は筒井主殿助與力三百騎にて勤番せしに此勢ひを見て福住にて防がんと引揚しが同所へは敵も寄來らず然共申譯なしとて其地にて切腹せり大坂勢は郡山の燒跡に陣取翌廿七日には東南三里の間奈良へ燒及ぼさんとす此由京都への注進を日向守は聞付揉に揉で一騎駈に奈良を指て急ぎ行處よ奈良の代官中防左近藤林市兵衛進來り日向守に逢て申辯敵は盤若寺坂迄乱入し中々防ぎ難し此邊にて動靜を御聞届然るべしと云ふに日向守奈良を燒せては弓箭の恥辱なり一騎も馳付討死すべし各自は奈良の所司ならずや是非同意せられよと引立て奈良へ駈付ける此時松倉豊後守は大和口五條に在陣し豫て忍ひの者を出し置大坂勢今日奈良へ燒及ぼすと聞手勢七百八程にて出馬し多賀分部桑山大和口の人々も早く出陣有べしと才觸けれ共此輩らは法隆寺上の太子も陣取て在しか敵大勢なりと聞怖して寂然返つて音もなし其中與田三郎右衛門藤堂將監の兩人は引分れ出馬して松倉に加はりぬ松倉與田より日向守へ急使を走賫殿方一遅延せば奈良は保難しと告來るに途中にて日向守此使に逢て倍々道を急ぎ黄昏に奈良へ着陣しければ松倉與田も南方より馳て敵に安居せしむべからずと其用意を告しにける扱一手は和泉國堺の津は般富の地として船泊福湊し其繁華云ばかりなく殊に百年以來燒土となりしとなし然るに昨年關東勢に取切れしが爲害を蒙りしにより此度は大坂より燒擲はんとて廿八日大野道大軍上

數千人を指添て堺の津へ遣されければ道犬馳向つて彼地に火を放ちしかば郷民等周章狼狽東西に逃惑ふ斯る處も東國の船奉行丸鬼長門守々隆向井將監勝小濱民部少輔光隆同久太郎等此事を聞て兵船も取乘堺の浦へ押廻り道犬が後陣へ鉄炮を討掛鯨波を揚敵兵を劫かす道犬が軍勢も思寄さりければ堺の津を燒果さずして逃たりけり

○京都火賊露顯の事并古田織部正父子切腹の事

兩御所京都は發行近々の由大坂城中に沙汰有しかば然らば兩所出陣の後京都を放火そべしとて數十人の間者を入置ける處に板倉伊賀守豫て洛中に觸て他より來る輩らを一々改め訴人する者へは金銀を賜るべしと定む然るに岡村喜左衛門と云る怪き者入込し旨訴人するにより早速召捕拷問せしに彼者其白狀しけるは去る十八日御出陣と沙汰有しかば其御跡にて洛中を燒拂ふべしと大坂より入込しに御出陣引しける故斯の如く露顯けるこそ殘念なりと申ける是等のとによりぬ出馬御延引になり居たりしが重ねて五月二日御出馬と觸渡さる然る所戸田八郎右衛門と云人江州の代官鈴木左馬之助を兄の仇なりとて日の岡にて討取三井寺へ退く其時鈴木が下部捨置たる剪指の内は大坂内通の密書廻文等數通あり鈴木が尾吉田織部止が茶道木村宗喜等兩御所御出馬跡にて京都を放火し禁裏仙洞を奪んとすると悉皆露顯す因て板倉伊賀守へ仰付られ嚴く吟味有て宗喜を始其黨廿八人召捕れ古田織部正は板倉を預られしが後織部父子は切腹其黨は悉皆く日の岡にて刑戮せらる此事より又々五月二日の御出馬は御延引となれり

○後藤又兵衛軍評定の事

是より大阪城先には古新の諸士を集會せしめ防戰の軍議せし所天王寺表も柵を結關東勢も付て一戰すべしとて一決せし時大野修理亮之後藤又兵衛に向ひ其許の軍慮如何有べきやと問ければ又兵衛暫く打案し申けるは小勢を以て大軍に對陣し野合の合戰仕つらんと容易からず殊に大御所は野合の戰ひも長じられたればとて川ふまじ其し思ふ所に因ば大軍に對て勝を得んとすると地形に因事には國府越暗黒陣新條越立田越是皆峻嶺に似へば此處へ人數を押し彼に先達て要害を搦へなば關東勢大軍と雖も山中の細道一列成では攻入事叶ふべからず先手二の手と切崩しはば後陣は奈良郡山迄も引取重ねて軍議して襲來り候には五七日の手間取べくは關東の大軍を廣場に引受る相談此又兵衛は同意仕つらずとすけるにぞ此趣も修理亮より秀頼公の御聞に達しければ秀頼公も道理と謂受られ何事も又兵衛次第のとにて又兵衛は即ち大和口の陣にぞ定められける

○泉州櫻井合戰の事

四月廿六日の夜半何者の申觸しけるにや大和口より敵兵押來る由風聞しければ大坂の城中俄然に騒動し先人數を發せしめ途中にて防ぐべしとて薄田隼人正兼相井上小左衛門時利長谷尾九兵衛秋定山本左兵衛晴宣北川次郎兵衛宣勝等平野に馳向つて敵襲來るやと晝夜馬の腹帯を緩めず相待けるは跡形もなき虚説成し故泉果城中へ引返す是より先城中新古の諸士を呼集め軍議有し所に兎角天王寺表にて一戰せんと一決せし處後藤又兵衛一人大和路の山中峻嶺に因て敵を遮り勝負を決せんと申所も道理なりとのとなりしが同日豫て大坂より紀州へ入置たる北村善太夫大野彌五左衛門等より紀州熊野有田筋高野山の麓の一揆共は皆



味方に相成候へば當時淺野但馬守紀州より出陣し泉州信達にて陣取候早々人数を發せられ
 淺野を討給はし跡より取掛り又前後より襲ひて淺野を討取候故紀州を一圓手に入られ然
 るべくいどの注進を聞大野主馬二万の兵を引具して此度信達にて淺野を討果し直に紀州へ
 發行せんと押出る其先手は塙右衛門へ申付られたりと聞て兼々勇を争ひ繼を競ふ岡部大
 學手勢をば跡に近侍二三騎にて城より安部街道を和泉峠へ馳行を岡右衛門は是を知す堺
 街道を安立間へ押出したる所岡部が組勢追々に馳來り乘越んとする故岡右衛門是を咎むれ
 ば大將大學は早和泉路に向ひ候へば我々跡に残るべきかと口論す岡右衛門今日の先陣は我
 に定りしを大學の軍法を破ればとて組下迄軍法を破るとや有べき一人も通すべからずと由
 辨て塙が人数道を塞ぎて徐々として押を行間夜も東山際も着て大鳥越を越し時は夜も長掛り
 て廿九日の未灰暗さ頃國府の山際に號砲と覺しく烽火の光見ゆれば大學が組下は周章狼
 狽けるを岡右衛門は少も動せず蟻通の明神の北より西に向ひ國府を過て貝塚へと押出し南
 を指て進ける扱淺野但馬守は更に其事を知らざれば廿八日に信達を陣を取て先手は佐野の
 市塙へ出張しける所紀州高田村の吉田次郎兵衛尾崎村の九右衛門等追々大坂勢此處へ大軍
 来て押來る由淺野致しければ淺野が先手の大將淺野左衛門佐野野右近淺野日向守等然らば
 此佐野市塙は四方廣くして大軍より利成れ共小勢として大軍と戦はんには地の利に因ずんば
 難儀成ん此邊の地理の立さは何方ぞと評議區々にして更に決せざりし所に九右衛門申ける
 は先年根來攻の時此邊に於て屢々合戦有しが人数は此後手なる舟岡山の繩手に池二ツ有其
 廣さ凡一町四方も有へし其池の廻りは沼なる故に進退不自由なり守て戦はんには此處然る

べけれ共進退に當り變化機に應せん御合戦に如何候はんや同くは信達村迄人数を引
 上られ川を前に當切岸の上陣を取て一戦あれば必ず御味方勝利成んと進ければ左衛門
 佐此儀然るべし其旨主君に言上せんとて九右衛門が述し通り遂に申ければ長展開て道理
 と同意し信達を發して日の出の王子に陣を取先手の一左右を待居たり右近口向守安井喜内
 龜田大隅等安松へ引取しが安松は所狭ければ大隅のみ陣取て其餘は長江村へと繰出したる
 佐野は後陣を支え左衛門佐大炊仙石因幡上木小左衛門等は残りたり明れば廿九日の曉天よ
 左衛門佐は家士矢木新左衛門長田次兵衛兩組の鉄砲を残りし其他は皆櫻井へ引取ける前夜よ
 り雨降出せしが曉方より雨は晴れ共露深くして前後も見分らず然るに岡右衛門は佐野市
 塙へ着して見るに紀州勢は信達へ引取候由郷人共告けるより和泉路の案内者は淡輪六兵
 衛紀州の案内者は山口兵吉同兵内の兄弟兩人斥候として蟻通の北池の端へ赴きければ岡部
 大學僅二三騎にて相待居て岡右衛門殿は漸々只今來られしかと評を掛しより互に口論
 に及び既に同士討する勢も見あける所に六兵衛并に山田五郎兵衛其間に入り漸々に鎮め蟻
 通の西の繩手に伏勢の有に氣遣ひ安松の此方にて人数を揃へ居ける時に山口の兄弟斥候に
 乗出しに龜田大隅も唯一騎にて斥候の爲に此方を目指て乘來るを見て山口等は引返し來て塙
 岡部も向ひ最早敵に程近しと云ば大學又塙を賺して前へ馳出る岡右衛門大に怒りて其方に
 先鋒はさせまじと横目も振す馳出しけるに六郎兵衛は我等こそ案内者なり跡に残りて何の
 詮や有べきと續て乗出しければ頓て大學と一緒となり安達の方へ進みけるに同所は大隅の
 一組殿重に備を立鉄砲五十挺を並べて一時に放ちければ岡右衛門大學事共せず押掛れば大

隅は線引に二町餘りも引退くに大坂勢は尙通さしと襲來る故宮の前にて引返し又鉄砲をぞ打立ける其間に左衛門佐は謀計を廻らし百姓共を廿人許遣はし蟻通の森の蔭に伏勢有と實説らしく申觸させければ大阪勢是を實事と思ひ森の中へ人数を遣したる間に大學は左の河原へ進む大隅は町外へ出て大學と鎗を合せしがもの分れとなり大學之馬の蹄を損はしおば便なからんと河原迄引退くに大隅も樫井へ乘戻て石橋又腰を掛け敵を待所へ左衛門佐來りて大事の退口に猶豫は無用なり疾々引取べしと云ければ大學貴殿も後より來らるべしと南を指て退さける上田主水は兩人を遣過し來も強ず退かせ一人にて踏止まる淡輪六郎兵衛東の河原より南の町へ乘込左衛門佐の家來永田治兵衛田會がしらに素鎗を以て淡輪が持し鉄鎗を撥返ければ六郎兵衛は十字の鎌を人家の格子に引掛振んとせし所を治兵衛は隙さず踏込で突伏終つ六郎兵衛が首級をぞ取にける其時上田主水は大坂勢の陣法を見て馬より飛下手鎗を掲げ突つて獲るに主水の家人水谷又兵衛河原小平太横井平左衛門も續て鎗を入ければ國右衛門が家來山縣三郎右衛門と主水鎗を合せしが主水の鎗中央より折しかば直ま引組しが山縣の力量や優りけん主水を下し組敷しを主水が家土横井平左衛門横間新三郎等駆付來り三郎右衛門を討けるよぞ主水は虎口を逃れしが至て深手を負し故直ち爰を引取ける龜田大隅子切左衛門安井喜内并に龜田の家人共も追々に引返しける大隅は敵二人を突伏て家土菅野兵左衛門吹田治兵衛等に其首を捕せ又松浦作右衛門丸森小傳次と鎗を合せる間に塙國右衛門は四尺五寸の大太刀を打振前後左右を馳廻り當るを幸ひ突立ながら敵坪よ立上り味方を下知する所を田子助左衛門半弓を滿月の如くに叩絞り颯と射る其矢刃たす國

右衛門の肩先に中りて浴馬する所へ助左衛門弓を捨て駆付引組を國右衛門起上り機助左衛門を投付る時八木新左衛門衝と走寄て國右衛門の腰の番を鎗の柄も貫れと突しかば再び撞と倒ふるよと大勢折重り終に國右衛門を討取けり大坂勢田淺右衛門熊谷忠太夫須藤忠右衛門も此所にて討れける龜田大隅は樫井の町外迄引取て待けれ共敵來らば其身も數度の合戦に手を負ければ其儘退さける此時但馬守が旗本の中より小野慶雲人数を引連て大阪勢の横合より突入ければ大阪勢は右往左往に敗走す大將大野主馬は員塚卜半と俱願泉寺に酒宴を開き居たりしが大鉢の大將塙國右衛門淡輪六郎兵衛の兩人討死して味方敗軍と聞えしかば一揆の相圖は殘らさず語し重いて戦はんと爲に士卒は過半疲れ居ければ如何はせんと評議區々成所、紀州勢樫井より樺木に人数を引き退たりと聞て主馬が膝下長岡監物上條又八御宿越前守等一同八人数を繰出しければ敵兵漸次に遠く成ければ力あくも樫井の邊に火を放ち擁擁ひてぞ歸ける主馬は安松蟻通の宮の前にて敗軍の士卒を集め大阪指て引取しが昨日未の半刻頃より夜通し出張したる軍兵其成ば殊の外勞居けるを漸く引繼て岸和田の濱邊を押通る所は城主小出大和守吉英并に加勢益森出雲守重頼小出伊勢守等の八敵追討しければ氣疲れたる大阪勢何かは以て堪るべき一戦にも及ばずして逃走ければ八方に追散し首二三級討取將軍の御本陣に獻す淺野但馬守よりも上田主水を使者として能首十三級獻す本多上野介正統首を見て門外に指置披露せし内は塙國右衛門の首も有由言上しければ御威有て則ち御覽有べしと仰られければ正統塙が首を見てはたれ首成しかば時分懸氣故にや思の外に損し御覽有べき体にあらずと申上しと云ん此の上田主水と云は去慶長五

平朝ヶ原台戰の砌と石田三成に和して紀州の合戦に敗北しける後は涙々の身と成て諸國を遍歴し居たししか剛勇の譽有者成ばとて淺野長晟是を召寄て扶持したりける或時大御所御目見を仰付られしに法帖して上田古宗入道と申けるを御前より召出され汝は何故に入道せしや疾く還俗して昔時の如く主水と名稱べき旨上直有て御脇差を下されける然るに此度大坂勢泉州に出張しける處主水比類なき術ありし處に但馬守より書附を以て委細に言上しければ兩御所御感賞有て大坂平定の後子息彌右衛門を御家人に召加られけり翌晦日の但馬守より關市兵衛寺川左馬助兩人を二條の浮城へ指出す所に大御所櫻井表の戦功を賞せられ飛田大隅上田主水田子助左衛門等の戦功御感賞大方ならず且紀州の一揆蜂起する由聞えければ但馬守大坂へ出陣せず直に歸國して國中一揆を取鎮ひべしと仰付られ使者兩人へも時服御馬を下したまわりけりしとぞ

○紀州一揆蜂起の事

淺野但馬守の旗本よりは大坂勢既に敗走する由注進有しかは仙石因幡守は今より軍を進め敵を追討せんと勸し處に種村有權寺等今日の合戦味方勝利と成し之故援掛して戦功を争ひし故て候後陣には大敵を追討せんとて味方の過失有は如何か其上本國にても一揆起り候由聞え候へば一先山中迄御引取有て然るべしと申により各自道理と同意す然る處へ紀州より園田彦右衛門仙石の陣所より來り御腹分の多賀羅兵衛戸津川入藏大倉孫四郎淺野宗左衛門湯川五兵衛山口喜内堀田若狭高石村の次郎兵衛脇村の半左衛門など大坂の催促に隨ひ一揆を起し其勢三千餘人にて和歌山を放火し城を乗取んと謀り候其起は吉野熊野の者共一味し

淺野勢引退して合戦に及ばば大野主馬人數を帥て力を戮すべしと約束す是に因て主馬が家人北村善太夫大野彌五左衛門の兩便相謀つて去年の納米を改めんと披露し村々を廻り叛逆を勸し但馬守が留守の者共此兩人を捕置候旨注進す但馬守は此告を聞や否や寺西清左衛門原勘兵衛は二千餘騎を添へ海陸二手よ分つて鹿ヶ瀬蕪坂などと云難所を越て一揆の後陣より急に攻立ければ一揆共思ひ寄す居たること故一戦に利を失ひ八方へ逃散けるを追討し討死大將分の首廿有餘其外生捕數多得て大將軍へ注進し惣て櫻井の一戦味方勝利を得大坂方散々に敗走しければ岸和田に押出し宮田平七父兄の警固せりし横島玄蕃九重利父子亦坐内膳止直親等各自聞怖し持場を捨置大坂指て逃歸ければ行末とても捗々しきとは非じと誓々囁さける

○秀頼公天正寺表御巡見の事

豐臣秀頼公は諸臣を召し仰るに標我太閤殿下の家督を繼ぐりと雖も田治部少輔の一乱以後天下兵馬の權自然と關東に移り日本國中の諸大名皆徳川の家風に歸順し御父太閤殿下下千辛萬苦して掌握し賜ひし天下を終る他人の者に歸せしめんと遺恨なく寢食の間も忘る、隙なし然るに去年義兵を擧しと雖も城中の軍議一決せず難城難儀及びしかは關東の所望に任せ遂に和議を調へし所故太閤殿下の厚恩を思ひ永く相違有まじきとの誓詞は全く反古となり生血未だ乾かざる早條約を違へ加之ならず城廓の惣堀とは云ながら二三丸の櫓以下迄破却し蟻聚自由の舉動をなし尙今度は直に京都を取固め大坂謀反と云傍條姦計言語同斷なり今は千悔其甲斐無れば關東の大軍を引受て潔よく合戦し籠城の諸士と同く討死し

百二十四
計程に俱に亡んと豫て我心決せりと宣ひければ城中の諸將士等一同に感涙を流し御意御道
理至極なり臣等不肖なりと雖も運を天に任せ一戦を試みべし定て敵兵は天王寺口より襲來
らん然すれば城中丁方の軍勢を二手にわけ此方よりも押出し兩御所の旗を目標討て蒐り
候はゞ御勝利疑ひ有べからずと又餘儀も無申上ければ秀頼公御機嫌麗しく御満足の御様子
にて其翌日天王寺住吉邊を巡見有べしと出馬し給へは苗の吹貫廿本金の切割の小馬騮十二
本千本鎗及び千々瓢箪の大馬騮を朝日に輝やかした閤在の旗本行列の如き出立にて大
野修理亮木村長門守原田左衛門佐を始とし七組の番頭何れも供奉し天王寺口より岡山邊を
巡見せられ秀頼公には茶臼山に登て御覽ある時木村長門守進み出去年御和睦の御御誓紙の
御判口届進すべしとの御使に此所へ罷越し時大御所の御前近くには是非運を天に任せ君
の心懸憤を晴んと在し所に大御所の近臣等左右に伺候し某し漸く座の中央より出しかは眼前
に我君の怨敵を見ながら之を刺すして其體立歸しこそ死出の遺恨此上もなし當年の合戦堀
は埋り楢は崩され剩さへ去年の戦ひに味方の好將士多く討せしかと平場の合戦最も大事な
り凡勇士たる者は戦場に望む毎に討死と定ると珍しからずと雖も臣等兩御所の御旗本とだ
に見は神速に駆入て討死仕つる覺悟あり御合戦御利運有は忠を泉下に報すと思召るへし若
君御生害に於ては死田の山路の御案内仕つらんとす上げれ之聞人毎々天晴無双の勇士やと
感賞せぬもの無かりけり時に秀頼公木村長門守長曾我部宮内少輔は久寶寺表へ向ふへしと
仰有により兩人畏つて其準備にぞ及びける
○兩御所京都御進發の事

并河野備右衛門御氣御免の事

五月三日己の刻將軍家伏見を御進發あり總白の御旗七本具先に押立て御旗奉行には三枝土
佐守島田治兵衛二行に列す其外金の七本骨の扇の日の丸を畫きたる大馬騮銀の鐃半月の下
に金の切裂付たる小馬騮を朝風に輝かせ最爽快に鎧たる武者數万騎次第を追て供奉す將軍
家には黒き御具足に山鳥の毛を以て織たる御陣羽織を召唐人笠の巾兜を頂かせ給ひ櫻野と
云名馬に乗せらる御馬廻り其外歩立の人々も黒具足に兜を御吹貫の前立を打陣羽織の
背に團扇形の中に組印を付左捲二ツ引輪の太刀を用ひ歩立河野左馬介忠正内藤主税助廣
信供奉す其他御旗本の大小名總勢三万余騎御近習御馬廻二万余騎勢五萬餘騎長柄弓鉄砲
行列等夥多敷去年に同じ河内國須奈御着陣大御所は同國二條の御城を御發駕有供奉の輩
ら皆具足を着せす總白の御旗七本具先に押立御旗奉行庄田小左衛門朝倉藤十郎御長柄奉行
大久保彦左衛門若林和泉守其次弓鉄砲の奉行等御從す御行列は金の五本骨の扇の日の丸を
畫きたる大馬騮銀の瓢箪の指通にて下に金の切裂付たる小馬騮並び白布へ厭離穢土依求淨
土と云經文を三州大樹寺の和尚登上人の書たりし吉例の御旗を御墨籠の脇に立られ使番
衆は四半に金を以て五の字を畫たる指物にて隨從す(是は徳川家軍目付の印なり)御騎番と
は小性衆は白と紫との襷掛銀の切裂半月の前立物など想の鎧に梨子地金紋付たる鞍籠
厚総の鞆掛大刀刀乃至迄皆光輝やき實にも天下の大將軍の陣押とこそ見あたりけれ然るも
泥を過給ひし時八幡の鳥居に向ひ陣押するは古昔より忌事なりとて鳥居を右に見做て河内
踏に掛り星田に御着陣有は腐預り松下常慶は御陣中御膳米五升干鯛一枚並びに精進其外味

附隨節澤庵等を相應し持せ參るべし此外は少も運送するに及ざる言を仰付られ御厨御賄ひの長持備に一ツよて事濟けり諸軍にも今度の合戦は然のみ日數も費すへから軍中三日分の兵糧を用意して打立べしと觸られしが神算少しも違はず其後至り聞人皆々感じ奉つりけり其夜は大方野陣にて有けるに其曉天より空揺曇り暴雨篠を突烈風砂石を卷舉ければ皆帷幕を垂敵も味方も此舉に乗じ万一夜討や入んと互に用心を盡し寄手の陣々に焚附けたる篝火の數幾千萬共知悉秋の夜空の星影の滄海を照すかと疑はる大坂勢是を見てアラ敵陣は焚附たる篝火の夥多さよ然ば味方にも篝火を焚やどて樹の枝青草薙ひ彼方此方に焚付れど折しも夏山嵐に吹消るも多く茂の下に夜を明す照射し影に異成す左右に大坂勢は氣を屈し寄手は愈々勇み立翌六日は此所に御逗留有へしと上意有同日の四ツ時分より天晴けれ共未だ出立も有ざるに將軍家より御使として久貝忠三郎高木九兵衛參向して大坂勢矢尾久寶寺へ打出しにより藤堂和泉守井伊掃部頭合戦を始むるへし注進候間將軍家は早御出立に相なりしと申上ければ大御所聞召れ敵城を出て遠く郭外に働くは味方の勝利必定成ぞ進めや者共とて星田を移立有ければ供奉の輩ら皆甲冑を帶して二三里を押行し機御馬を止められ先手の左右を待給ふ一時程も経て河野權右衛門首を持參し本多上野介に就て披露の事を頼ける然るに此者久しく御勘氣を蒙り我が屋敷に憤み居しが此度は出陣と聞て井伊掃部頭直孝の手に屬し先鋒に進みて高名しけれ即ち御前に召出されけるに紺地に金の丸の指物を指居けるが其指物の中央より鎗にて突裂れたる傷は前に出て平伏す特に合戦の次第を御直に尋問有しに權右衛門首を上井伊藤堂の兩手矢野久寶寺表にて戦ひを始め候

所最初敵強ふして藤堂の人数大いに打崩され候得共掃部頭旗本を以て敵の横倉へ討入二三町敵を追戻し候折から敵中より壹人の武士馳出味方を駭惱し候より其鎗を合せ漸くに討取て候と申上しかば御感悦て御勘氣御免仰出されたり此時權右衛門の父は庄左衛門とて随分高齡成しが共武道の巧者成故に御使番を仰付られ御前に伺候せしが今子息權右衛門軍忠により御勘氣を宥免る、旨の上意と伺ひ庄左衛門暫時涙を以て兎角のをも上得さりしが首上覽の以後此首の姓名は存じ居る者有やと尋玉ひしに大勢の人々一覽し中にも三好因幡守猪子内丘助堀田若狹守の三人見知たる様には候へ共只今は分明と申上られざる由返答し奉つる權右衛門は則ち供奉仕つるへしと仰付られける程に權右衛門上野介は對ひ只今の任合掃部頭に知せ申度由懇望しければ道理の事ありとて仰有て權右衛門は又掃部頭が陣へぞ赴さける

○大坂勢手配の事

兩御所隔々二條伏見御進發の事大坂に聞えしかば城中には急き口々に手配を定む先大和口壹番の先手は後藤又兵衛基次續て薄田隼八正兼相模島玄蕃允重利同苗庄太夫重宗井上小左衛門時利北川次郎兵衛宣勝古田九郎勝明其勢都合二萬五千餘騎古市に陣取へし茶臼山には眞田左衛門尉幸村同大助治幸同與左衛門信通江原右近高次御宿越前正倫多田藤彌滿範藤掛土佐守定方本郷左近晴賢早川主馬頭行重伊藤左近前村福井平兵衛忠朝大谷大學吉胤渡邊内藏助亂伊木七郎右衛門遠雄天王寺南門は毛利豊前守勝永同式部少輔勝家山本左兵衛晴宣極野勘解由昌幸其外薄田が從軍等土塔塚に陣すへし毛利が先手は眞田采女正信倍福島武藏守

正之同伊豫守正吉守玄蕃九好豐原又右衛門忠照石川肥後守數矩津田右京亮信澄結城權守
佐藤朝淺野周防守政賢武田永翁等あり天王寺岡山の間は木村王計頼宗明湯淺右近正壽明石
掃部助全住長嗣與五郎與秋小倉作五衛門行春真左肥後守助宗樋口淡路守雅兼津田平三郎信
貫内藤宮内少輔長宗織田左衛門尉信次三浦飛彈守義清稻木三郎右衛門教景此外大野修理亮
の手の者馳向ふ岡山へは大野主馬之助治房岡野縫殿助正繁岡部大學則綱新宮左馬之助行朝
山川帶刀堅宣中瀨掃部助定純二宮與三右衛門長範此外根來大野の人々相向ふ其他七組の番
頭伊藤丹後守長實堀田圖書助勝嘉速水甲斐守之時野々村伊豫守雅春中島式部少輔氏種具野
野後守頼包等天王寺と總堀の間を備へて立弱からん方を助くへしと遊軍にそ定られける木
村長門守重成山口左馬助弘定内藤新十郎長秋は須奈を守り長曾我部内宮少輔盛親増田兵太
次長慶等は平口野を防くへしと定けるか其期に至て皆相違しけると聞ゆる

○大和口寄手軍功の事 并後藤又兵衛基次討死の事

去程に大和口寄手の總大將越後少將忠輝朝臣は未だ奈良陣を取玉ひ伊達陸奥守政宗も
郡山に陣しける先陣登番水野日向守は大和組松倉豊後守桑山伊賀守本多左京神保長三郎別
所孫次郎秋山右近藤堂將監與田三郎右衛門堀丹後守丹羽勘助等を引率し一番本多美濃守と
伊勢組一柳監物古田大膳亮分郎左京亮管沼織部正を引具し三番松平下總守は美濃組織田民
部少輔稻葉信濃守徳永左馬助後藤但馬守西尾豊後守を引具し御旗本よりの御目附は中山勘
解由村瀬左馬助等にて國府に陣を取陸奥守政宗未だ郡山に在り雖も水利便宜の地を得んと
て片山の根小河を前にして松倉豊後守與田三郎右衛門と相並んで扣たり五日の夕水野日向

守は道明寺の方を見分せんと云ければ諸將も同道せんと云れば家來は殘さるへしとて主
八のみ同行して國府に並列したる片山に登りけるに諸將は此土地場所宜ければ此處に陣取
へしと云を日向守は大和口のとほ我等次第の上總成は各自方の指揮は無用なりと争ひ居
ける所へ二陣なる本多美濃守が使者來て貴殿方片山に出陣有に於ては我等は國府を陣取へ
しと申ければ日向守大に怒り此度の戦争は上様の御名代にて去年藤堂和泉守を疎みたる如
く我意を申されなは誰にもおれ踏潰し申へしとの御掟成は左様心得居らるへし殊に拙者は
先陣なり後陣の貴殿より指揮心得難しと罵りければ使者は這々の体にて歸ける跡にて日向
守は衆に向つて片山の地は平地より懸井寺(順徳の札所)迄足場所平地にて別して國府片山
の間は溝連川と云河水の流も好れば今夜は國府に夜を明し明日の曉天に本道を石川河原玉
宜園妙の方へ押出し片山へ登る敵を中央に取包は一人も洩す討取へしと述べければ中山勘解
由進み御資殿の申さる、所道理至極に候と云ば一同も是に隨ひて各自國府を歸りて陣取
る然に藤井寺と懸田の間に方り松明の火影多く見えければ日向守は敵兵若や夜討するも
計れを必ず油断有可らずと諸軍勢に厳く下知を傳へ家士黒川三郎右衛門を以て此方にて
鉄砲敷置備置たれば各自方も武器を著され足輕等を斥候に出し置るへしと觸させけるに案
の如く此時大坂方には毛利豊前守其田左衛門佐後藤又兵衛等相議して明日は夜中に國府を
越龜が瀨を後に三人の隊下一萬餘部を三萬を一手にし左右の山を取固め大御所の旗本へ線
込へしと約束し各自立別しか又兵衛は先日城中の軍議の時大御所の大軍を引受て平地の戦
争迎も叶ふ可らず東軍は必定大和路を越來るへし其先陣の山半過る所を一度は突て掛らば

十に八九之勝利疑ひ有まじと申ければ秀頼公も其儀然るへし我意も叶りて大和口の先手を命せられしかば五月五日の夜半に平野を打立松明数千本と燈連ね其曉天に藤井寺を著し後陣を待居しが如何處故か遅ければ中川左門を以て二の手成明石掃部介方へ敵は三千餘人白隠に見之候早々人数を寄らるへしと申す遣しける左門之藤井寺を出て譽田八幡へ掛り道明寺河原を越て松明を注進し候の者を遣しけるに右手小山に當りて關東勢段々と線込大橋二三萬騎も有べく候候と注進しければ左門は急ぎ此山を後藤の陣へ中遣しける又兵衛心元無と思ひて又片山大助を斥候し出しける松倉豐後守與田三郎右衛門等は片山近く陣取し故ハヤ鉄砲を討掛けるが與田は此度こそ關東勢に廻りさせては大和武士の耻辱此上無耳れや者共と叫りつ、一番に片山へ攻寄る後藤が先手山田外記片山勘兵衛古澤四郎兵衛都合一萬餘基次の旗本勢三千人許旗差物馬印を押立片山の北の尾崎へ陣取たり松倉與田は時刻移たりと多勢をも待合す切島を指て駈登れば後藤が勢は片山の上より鉄砲を放す此玉に與田の涙人岡本加助兵衛先掛て討板れ即死しければ與田の無念成と續て攻登るも後藤が物頭片山勘兵衛赤地金蘭の陣羽織と軍扇を腰に指鎗を取て進山田外記は鳥毛半月の指物を指鎗を捻つて駈出ければ續て足輕頭佐伯次郎太夫赤堀五郎兵衛湯瀬三郎兵衛等断付て與田が人数と鎗を合たり與田三郎右衛門は始浪人神子山四郎兵衛下野道仁井上四郎兵衛等後藤が大勢に取圍れ主從俱に討死し殘兵は山より下へ崩れ走るを見て松倉豐後守の續て藤堂將監と俱に山川帯刀北川治郎兵衛が兩陣の間を行過ければ水野日向守は烈く下知し敵を山より逐下す丹羽勘助も鎗を突入揉合にぞ雙方共々手傷を負しが此上は諸軍一度に取蒐んと藤堂將監高久松

倉十左衛門重正一手になり關の聲を揚て挑み戦ひけるが敵は大勢なり松倉藤堂の兩勢逐立られ敗北しければ敵兵勝り乘じて逐掛けるを天野半助と云者殿りして鎗を合す是に氣を得て重正が兵取て返し首三十許取り此時松倉餘りに深入して漸やく小性松岡才三郎壹人を召連破陣の中に紛居たりけるを山本權兵衛天野半助是を見て馬を駈入松倉を救出したり堀丹後守直寄は銀の鯨尾の兜糟毛の馬に乗白熊の腰指にて只一騎踏を揮て駈來る此所の大沼の石橋を壹番水野日向守續て中山勘解由水野美作守村瀨左馬助の諸將等乗越る鎗を捻つて馳向ふ其時本多左京が備は後藤勢に逐立られ石橋の方へ敗走し松平下總守が家士山田十兵衛は壹番駈出鎗を合せ相討に討死す菅沼七郎右衛門と云者是を聞て無二無三の馬に馳ち乗入て終に討死したりける是は目頃十兵衛と勇を競ひし故成とぞ下總守が察は片山の鎗筋を美濃組と俱に一同乗越來つて終に敵を追崩す此時奥平金彌川北權兵衛壹番に首を得たり後藤方にも古澤四郎兵衛同姓小源太松波藤左衛門豐田與右衛門津田勘三郎を始め其他若干討死せり時桑山左衛門佐同姓伊賀守丹羽勘助伊達陸奥守等は圓妙駒谷の山より尾崎を廻り後藤が勢を中央に取圍み討んとす此時越後忠輝朝臣の先鋒花井主水正城兵と挑み戦ひしが上田五郎左衛門を使として忠輝朝臣の御許へ合戦既に急なり疾く御馬を寄らるへしと告げられ然はとて忠輝朝臣進み給ひけれ共先陣の政宗郡山に猶豫したるに依つて心成すも滞留して西の京に屯し給けるが翌七日は敵悉く敗北し終に落城に及びて秀頼公にも多自害ましく忠輝朝臣の軍勢に敵の旗章をだに見ざりければ大所のは怒に觸終にほ勘氣を蒙りしとぞ聞ける條又本多在京の雜人等小屋道具を持て後藤が先手近く行けるを後藤勢は見

て追拂けるに元來難兵一戦にも及す遂にける左京之を見て大に怒り唯一騎敵陣へ馬を突入んとする處を上松八左衛門馬の口を取て暫時と押し止む此時左京は年僅に十六歳成けるが伯父本多外記に伴はれ松倉が先陣に進み神保長三郎と相闘ひて屢々戦ひ首數多討取しとぞ神保長三郎は後藤の兵を數多討取て引取ける伊達政宗是を見て度々我手先へ來るとを口惜く思ひけるにや鉄砲を打掛ければ是は味方成ぞ過失すなど呼はりけれ共此を耳にも掛す數百の鉄砲を連發に打放ければ大崎神保長三郎を始三十七騎同士の討取しとぞ疎けれ水野日向守勝成は諸手に下知し其家士杉野數馬一番首を得此外首數多討取しが先手の物頭多く討死す丹羽勘助も水野日向守と一手に成て桃と戦ひしが餘りに深入して敵に取圍れ既に危く見えけるを郎黨等生命を捨て相戦ひ終に敵を逐拂救ひける竹内越國府越竹山村の三筋の東國勢は後藤を目掛三方より馬烟を立て押寄たり此時後藤基次は黒半月の指物に茜の幟張の馬印押立僅か四五十人を従へ多からぬ我先手を分ては不都合なりとて討殘されたる軍勢を一手に纏め基次は此處にて討死すへし我に同心成人々は早く城中へ引取玉へと云ければ我々も討死とこそ覺悟致候死地を遁て争でか再度人に面を向べきとて田の畔を流ける清水神水とし各自一擲して咽喉を潤し打出たるは實に漂よき景狀あり此所東西南北共々廣くして馬は蹄を勞しければ兩陣互々射手を進て関の聲を一盤揚る程こそあれ敵味方數萬騎一度に頻と入亂れ思ひくりに相戦ふと半時計にして遂に勝關を揚二三町程も引離て敵味方を點見するに兩陣共に過半滅て屍は戰場に充滿せり此時大將後藤基次は片倉小十郎が手より横合に打掛たる鉄砲に内胃を討れ苦痛甚だしければ兵士前後に取圍で疵を吸血を拭ひける此

時井上四郎兵衛も討死す基次は吉村武右衛門を招て我斯の如く傷を負進退自由成ざれば我首を新深田に隠し敵も取すなど云ければ吉村心得泣々後藤が首を切深田の中へ押隠ければ知人絶て無りける干時基次四十六歳元和元年五月六日骸體は戰場に懸すと雖も名は未代迄残りけり然ば大將分後藤基次討れば先手悉皆敗軍しければ薄田隼人正兼相川上小左兵衛時利山本左衛門清宣山川帶刀堅信北川次郎兵衛實勝等は是にも氣を屈せず攻戦ふと雖も勝誇りたる東國勢數萬騎麻布竹章の如く取圍勇み進で陣を張ければ彼羽羽が山を援魯陽が日を返すの勢力有共此堅固の陣中に馳入て戦ふへさも見えさりけり薄田之敵の陣中を松原の間より遙に見やるに赤ハソカイの旗五十流四半の鐘の馬印を棹立たるは伊達政宗地黒に朱の丸の一個紋を附たる旗金龍の馬印立たるは水野勝成蛇の目の旗は堀直寄其外家々の旗數千流見えしかば敵は目に餘る大勢あり尋常の勝負にては勝利の程覺東無悉皆討死の覺悟すべしと白地の旗を僅に一洗真先に押し立直に討て死ねば敵も味方も入亂喚き叫んで接戦するに平地にて馬乘の進退自在なれば是が爲に徳永左馬之助遠藤但馬守等の歩行立の兵士等大に惱されて若干討死しける二番も戦ひ屈したる薄田勢を高塚より討んとて稻葉淡路守通吉西尾豊後守忠政が勢併せて二百騎許三階笠を突通す紋の附たる旗赤地榊松の紋附たるを真先に進たり薄田が二陣井上小左衛門増田兵太夫二三百騎にて二手に成て一人も餘さしと取圍み汗馬東西に馳廻り旗旗南北に馳へり逐つ返つ相送に生命を惜す桃も戦ひけるが稻葉西尾の兩勢は若干討れ續て増田井上の勢も大半疵を蒙りたり東國勢是を見て此敵に

田是を見て陰を閉て真中を破んと馬の鼻を雁行に立疊を並べて中に駆入火花を散して相戦ふ薄田は去年怕樂が淵の砦に於て利を失ひ敵味方又嘲哂せられしを口惜く思け居れば此軍に於ては縦令味方悉皆敗走する共我一人止りて討死すへしと獨言云つ、討出しが其辞違ず味方過半討る、と雖も更願見す精神倍々堅固として屈せそ撓ます東國勢が左右より指挾で討んとするを右に受左に除て防戦し龍隣は結んで筑れば龍隣に進で戦ふと數度に及びれば東國勢も開靡さ薄田の勢も若く討れて箭鉄砲の疵四五ヶ所宛負ぬ者は無りけり井上小左衛門は菅沼織部正が家人菅沼權左衛門を討取山本左兵衛長澤七左衛門其他は後藤の討死を聞込各自引返して討死す薄田は力量人に超最も勇猛成者成ば駈寄る敵を左手右手に切倒し胴切或は尻居などの打居ける處に本多美濃守忠政は段々の旗朱の瓢箪に本金の駿廉付たる馬印を馬乘に引付戦ひ屈したる大坂勢の中へ横合より駆入千變萬化して揉立く攻ければ大坂方の疲れたる軍勢我先にと敗走しける此時本多忠政が家人濱名三郎兵衛伊東角之丞太田新兵衛伊東八郎右衛門長井九右衛門等分骨碎身して相戦ふ松平下總守以下の東國勢一度又咄と喚で攻掛けるよぞ大坂勢もハヤ是迄なりと一支も支へず敗北するを薄田隼人正頼島玄蕃允同苗庄太夫山川帶刀北川次郎兵衛大久保左兵衛田古九郎八等心成すも味方引立られて俱引上げるが敵も然迄追さりければ取軍の士卒を集て揃一戦すへしとて八幡に陣を取てぞ評議しける

○薄田隼人正兼相討死の事

八坂方の大將後藤又兵衛基次既に討死しければ然ば此圖を外すへからすとて水野日向守全

官美作守本多美濃守同姓左京菅沼織部等先を争ひ追崩すに大坂勢は散々に打惱され山田外記中川左門官本傳右衛門片山大助等は石川河原を越て二陣の山川北川の兵と一團になり其他は道明寺を西へ藤井寺迄敗走なしけれと薄田隼人正頼島玄蕃允同姓庄太夫山川帶刀北川次郎兵衛大久保左兵衛古田九郎八已下其勢一万五千の者は譽田近傍に踏止つて敵寄來らば化々敷最期の合戦して討死せんと相待ける所に東國勢の中より水野日向守一番に進出鐵砲を放んとしければ大坂方には驚破敵方寄たりとて鎗を取て突て蒐る槇島は日向守と馬上にて敵合渡合しが槇島の從軍は玄蕃を討せましと支えける程に水野が家士杉野數馬小場兵左衛門廣田圖書萩新左衛門中川島助蔵村十左衛門有安相馬等も鎗を合せ烈く合戦す此時伊達陸奥守政宗の家士茂庭周防討て出双方の者共に我戦功を見せ呉んと懇望しけるを政宗種々に止めければ周防は手勢計引卒して駆入んとするを片倉小十郎見て取備形に押出る蒲倉仁兵衛一番首を取秋保刑部父子草苧源内牧次大藏今和泉城小田部大學松平若狭以下比類無敵さして薄田が先鋒を切崩し首數多討取ける薄田旗を振て兵を進め坂より真轉倒に落しかくれば片倉勢は山の麓へ捲り立られける此時本多美濃守の家士濱田三郎兵衛伊藤角之丞太田新兵衛伊藤八郎右衛門長井九右衛門等何も戦功大かりしと水野日向守の勢も川を追越て薄田を取討れと攻圍む薄田隼人正兼相は丈高く奮力衆に勝れたる武士にて此時萬蒲草包の鎧に星兜の緒を締三尺三寸の太刀を帶十文字の鎗を取黒き馬の太く逞しきに黒鞍を置紅色の鞆掛て乗出し軍勢の先に進み立近傍を拂て突入ければ東國勢は自餘の者には目も掛す薄田一名を討んとしけれ共着たる鎧の最も善良は矢疵をだも負ざるのみか打物とても達人成

ば近づく敵を斬て落し偶々組付者も有と力量の強きに解易して瞬間に數十騎許枕並べて討死したりける爰に日向守が家士川村新八郎と云者透を現て薄田に組付しが隼人はこれをも難なく組敷て其首を掻んとする處へ同家中の中川島之助寺島九郎等馳來りて隼人の肩先へ斬付新八郎を跳返して終に薄田が首を揚たり明石掃部長岡與五郎小倉作左衛門が兵士等は見崩して逃出しければ山川帶刀北川次郎兵衛横島玄蕃大久保佐兵衛古田九郎八等も堪へ得ず後陣に押し眞田が勢に加はらんとて引退さけり

○大和口後軍合戦の事 并 眞田幸村退口の事

毛利豊前守は豫て眞田薄田と約せし如く六日の曉天天王寺を打立藤井寺迄引返せしが後藤又兵衛は早討死せし跡にて道明寺より崩來る人数引も切す相圖も相違なしけり逆暫時猶豫する處へ山川帶刀北川次郎兵衛横島玄蕃大久保左兵衛明石掃部介長岡與五郎小倉作左衛門吉田九郎八等追々此處へ逃來るに上は眞田を待て一戦し討死するより外は有まじと評議すれ共眞田は未だ來らねば豊前守は大いに立腹して幸村も兄伊豆守へ内通し關東へ一味したるかと罵れば諸軍大に落膽しけるに關東勢には水野日向守父子本多美濃守松平下總守等大和組伊勢組美濃組の諸軍を引率し伊達政宗が軍勢も片倉小十郎先鋒となり總軍にて攻掛りければ豊前守の手よりは足輕を出して荒入せ眞田や來ると待ける間は己の刻とも思しき頃住吉街道の方に當り赤色の幟を押立眞田左衛門幸村七八千騎其後より渡邊内藏介大谷大學伊木次郎右衛門福島伊豫守全姓武藏守等一萬餘騎にて押來と見えしかば大坂方の歡び何に譬んものもなく勇に勇で居たりしが眞田勢は豊前守の加勢とてよまどまど

行ければ豊前守は大いに怒り眞田勢ハヤ謀反に疑致なしと罵りける諸眞田が人数は鉄砲の筒先を並べて伊達家の先手なる片倉小十郎石母田大膳等の人数を目掛て放出し又鎗を突入たり伊達家の騎馬鉄砲八百挺は其家中の二男三男を撰み仙臺駒の中にて最も勝たる駿足を撰出し馬上にて鉄砲を放させけるに百發百中一ツとして中らざるはなく玉の飛事死然雨散の如く黒烟天地を蔽ふて咫尺も分ぬ其中に眞田幸村は松柏を楯とし兵士は鎗を取せて平伏させ足輕共の討倒さるゝをも願見す静り返つて香もせず伊達勢の馬を駆入んとする所を鎗を擲へて支けるに伊達勢暫時躊躇程に砲聲も今は絶々になり烟も少し薄らぎたり好機會と見て眞田勢大音を揚蒐れよ者出と采を取て指揮しけるに軍士一同並立して突崩しければ伊達勢支へ兼て譽田の方へ逃走れば眞田勢勝り乘して逐塊譽田の山へ逐揚は片倉小十郎切齒をなし采を振立惣軍を指揮し引返して西方へ七八町も逐立ける此合戦に渡邊内藏助は手を負ければ柳田五郎介を始め其他大坂方の高名最多かりし伊達勢は眞田勢を追立く來る所へ眞田勢は池の有處を便宜として金の蠅取の馬印を押立雨霞の如き箭玉を物共せず逆も逆ぬ所あり一寸も引なくと厳く指揮し大返に引返れば伊達勢も一時逐崩され又譽田の街へ引上しが片倉小十郎牧野大藏等は此處にて華々敬高石せり陸奥守政宗と這々の休にて昵近共二三人を看其し伊達組の人数の中へ逃込たり此時松平信濃守定實と御旗本より片倉が備へ撥馳し馳來りて高名す眞田は充分の勝を得て伊達勢も構す徐々と毛利豊前守の隊中と一處に成て引揚たり此時幸村の一子大助治幸本年僅十五歳敵の首を數多得て其身も傷を負ながら父の側へ乘來れば毛利豊前守横島玄蕃等軍扇を開て扇ぎ立今日の手柄威する

に餘有と謗賞しければ父幸村は莞爾と笑ひ皆大助に打向ひ其方の疵は淺きかと問は大助は蚊の整たる如くなりと答へしと斯て豊前守玄蕃允等に幸村に向ひ其許が大軍の進退承知りしよりは百倍し實に感賞せりと云を真田打消て幸村今曉時刻を違取へ遅刻せし其中は後藤田既討死せし由然すれば今は軍議にも及ばず唯討死の外は無斯迄万端手等の違候事畢秀頼公の御運の拙きなりと悔泣に歎ければ毛到極島も貴論の如く既往のとは悔て違あり斯る處へ未刻頃大野修理亮より黃母衣の使番より寄手追々御城近く押來り候早々其表を引取れ御城へ御引揚ありて然上にて軍議評定仕まつらるべしと申ければ兩人も承諾し左様の儀成ば直嶺引揚中さんと返答しける此特東國勢は道明寺河原より西は墨田迄立備へ大坂勢は墨田の西より藤井寺邊迄橋とし白眼合て對陣しけるが伊勢勢の一柳監物督沼織部正は既に時刻も移りゆハヤ大坂勢を討崩さんと云けるを水野日向守打聞て其は道理あり併藤井寺前に備たる大野修理亮毛利豐前守を退崩さんは易けれ其野中の山に備たる真田勢に撥合より進入されれば味方定て難儀成べし然ば伊達勢に真田を防がせんと願て使者を遣し其許真田勢をだに防がねば日向守一手にて大野毛利等を退崩すべしと送りけるに政宗の返答に我輩人数今朝よりの進退に手負討死の兵多ければ中々其儀覽東なく候と御本陣へ引取れば日向守は詮方なく山中勘解由を以て本多美濃守松平下總守万へ使者とし軍勢三組の内一組は真田に向ひ二組は毛利大野へ向ひなば大坂勢を城下迄はよも引揚させまじ疾く出兵有べしと勸慰させければ美濃守下總守兩人が評議一決せざる間に越後少將大軍を引

率して若陣有ば大坂勢は遙に見て周章狼狽大方成ざりけり少將の從軍海口伯耆守村上周防守兩人又忠輝朝臣に勸けるに此機を失せず疾く追討し給へと銀幣帛の馬印を押し立てる其所へ伊達政宗片倉小十郎を使者として不案内の敵地を謂日既に昏なんとするは追打せんは宜からず御遺慮有て然るへしと止免ける其間大坂方之近傍を放火し真田を驚かし諸軍を平野の方へ引取れば東國勢は其儘道明寺藤井寺墨田古市邊を陣を取人馬の息を休めける緒又水野日向守は家士松田金兵衛竹本廣助を使として薄田井上等の首を御本陣へ獻じければ兩御所は日向守が朝合戦の勝利感るに堪たり迎御賞讃大方成す兩人の使者へは黄金一枚宛を下賜りける

○矢尾久實寺表合戦の事 渡邊勘兵衛攻名之事

御旗本勢の御先手左備は一番藤堂和泉守二番井伊掃部頭三番柳原遠江守小笠原兵部大輔同姓信濃守同姓大學助保科肥後守仙石兵部少輔諏訪因幡守丹羽五郎左衛門成田藤馬助如左能登守右備は松平丹波守水谷伊勢守相馬大膳亮六郷兵庫頭稻垣平右衛門四番酒井左衛門尉松平甲斐守松平安房守牧野駿河守松平將監五番本多出雲守真田河内守秋田城介淺野米文正松平石見守植村主膳正六番越前少將忠直朝臣七番筑前守前田利常等河内路より大坂指て發行す此夜藤堂和泉守は千塚に井伊掃部頭は立田越神立明神の麓に陣し其他の諸軍勢は飯森服部四條繩手の近傍に陣取ける和泉守高虎は其夜中須奈の御陣へ參向し御指揮を受けて立歸りしが翌る五月六日の朝大坂方を見渡すに大和橋の近傍に人数多く見えければ其距離遠ければ兎に角道明寺へ操田へしと近臣等評定しける爰和泉守の家士渡邊勘兵衛は去年の戦

争に新宮左馬之助が藤堂勢の隙を見て大坂へ入城せし時是を追討んと云者多かりしを勘兵衛止て人数を出さざりしかば和泉守大に怒り其後は軍議の席へ加へざりしにより夫より渡邊は無念に思ひ此度こそ是非大功を立て先途の恥辱を雪んと豫て思案し居ければ和泉守高虎の前へ出今日道明寺へ御出陣の儀御道理千万に存候昔時より矢尾平野邊は足場悪して大軍の進退自由成す日も既に闕はなり道明寺表は是より三里程も有可れば疾々人数御操出ありて然るべくと申ければ高虎も然るへしと答ふ勘兵衛重て申けるは出雲井の南の方より道明寺見之候へば某し馳付て遠近を見届申さん其間二十町も候はんか少も早く斥候に參んと勘兵衛馬に鞭ち駈出ける斯る處へ高虎の斥候の兵酒方與右衛門以下歸來り勘兵衛に行途て後藤又兵衛の軍勢數万騎出城して大和口より進み今既水野伊達兩勢と合戦最中なりと告げれば渡邊は聞て郎黨壹人を與右衛門に指添疾く高虎公に道明寺へ御出馬有べしと上べしと言送けるに高虎も道理ありと南へ向て道明寺の方飯盛街道へ操出しける此時勘兵衛は小山に登り道明寺表を遠見して歸んとするに西の方矢尾と若江との間に當り城兵の壹里餘り連続して此方指て押來るが中にも白旗に銀瓢箪の中指に白熊を畫たる旗押立たる一隊は木村長門守實地石餅付たる旗四五流を立たる長曾我部宮内少輔都合二万餘騎先陣は壹里許相距離勢ひ立て藤堂井伊の軍勢を目掛久寶寺川を東に向て押渡り地足に成て藤堂勢へ討斃るべき形勢に渡邊は是を見て高虎か先手の兵を半途に押し止ければ先陣の大將藤堂仁右衛門同姓新七郎同姓玄蕃同姓勘解由等何故有て勘兵衛殿には出陣を止らる、と詰問しければ渡邊は西を指て矢尾の方を見給へ味方西向に立て戦ひなば十に八九は勝利あらんと

存じ斯は止めたりと答ふるにぞ然事の有て止られしやと一同道理と點頭けるが獨高虎へ道明寺表へ向ふべし何故に斯は止けるやと大に怒れば渡邊之馬を馳て高虎より向ひ敵既に此處に押寄たり爰許御決戦然るべし足場悪しと雖も暫くは防ぎなん然れども敵兵若急に押寄來らば早く備へを立替らるべしと申ければ然らば先手を呼戻せと指揮しけるに渡邊は又申稱此道は宜かるまじ人数を立へき所に有て敵兵迄は凡そ四十町も候はん西へ見えたる横堤迄は是より十町餘も有ぬべし斯處迄の道筋は細腰四筋あり味方と西へ四筋の道を手寄次第に指向られ横堤にて人数を集ひ敵兵を見積て一戦然るべし北の二筋の軍勢は今朝より號令亂れ備止しからざれば横堤に至りて直に出陣仰せ付らるべし南二筋の軍兵は西堤にて仰の旨を某し申渡し南北の人数を一手に纏せしと道の南に埋伏させたる我が手の者許を引廻し自分の旗は四五町も跡より持來るへき旨侍士三人に申含め西の方に向て駈行けり先手の將藤堂仁右衛門同姓宮内桑名彌次兵衛無邊掃部等は一手に成各自旗を翻へし徐々矢尾御道へ押行今一手は藤堂新七同姓玄蕃同姓勘解由其他旗本の組頭共是も同く方へ行けるを勘兵衛は見て和泉守殿の仰なり西の横合堤に至らば必ず踏止るべしと指揮しけれ共仁右衛門か次將等皆聞ざる風情にて二騎三騎宛西郡村賀屋原村を指て西向に押出す是を見て南二筋の人数も止らばこそ何の者へも無押て行渡邊は謀計ハヤ組懸せりと切齒をなす其詮なく三戸村指て馬を逸ひ藤堂仁右衛門同姓宮内桑名彌次兵衛渡邊掃部等は矢尾街道を望で馳行けるが北二箇の道も細探りて北行至て難儀成ば或は二騎或は三騎宛押行ける此人數を難堤にて纏なば最も容易かるべきに各々意のまゝに號令さへも聽ざるこそ疎情かりける事共

なり情敵兵とても號合扇兼しが西那村と三戸村の間僅か廿町に過ぎる所にて早敵味方とも刃を接けるが其中に高虎の軍兵六十三騎と雜兵等二百餘人も討れける又高虎方へ討取し首も一徳二百餘級にして朝より未の下刻迄人馬俱も息も付せず戦ふたり夫より藤堂勢は漸次に矢尾村へ押行ける斯へ處へ長曾我部盛親が勢出張しける藤堂仁右衛門同姓宮内桑名彌次兵衛渡邊掃部等四組の軍士八百餘騎前後も備も怠り勝にて白地に石餅の紋付たる和泉守の旗を押立二騎或は三騎づ、敵の間近く押寄来るを矢尾堤の西迄引付置ける此日長曾我部盛親は唐絨緞の鎧を着しへ白星の兜に銀形打たるを猪首に着父元親の遺物成二尺八寸の大刀を帶黄色地へ石餅の紋付たる旗一流を旗と押し立三百餘騎の人数にて堤より東に向ひ吶と喚んで突立前後を遮り戦ひければ仁右衛門新勘七解由玄善宮内彌次兵衛等の面々一緒に成秘術を盡して戦ひしか共道は狭し左右は深田にて進退自由成されば此所へ突入彼所に退き一騎二騎づ、戦ふ程に双方共士卒を失ひ先手の大將藤堂仁右衛門同姓新七宮内勘解由渡邊掃部等以下古老の人々忽ち討死したりける仁右衛門が首は赤星三郎の手に新七の首は木村長門守の家士の手にこそ入りたり爰に桑名彌次兵衛は原は長曾我部元親の家人なりしが關ヶ原合戦後は宮内少輔盛親も浪人の身と成しかば家人等も皆夫々に暇を得て已が隨意奉公しけるよ此度不慮の兵亂起て秀利公の命を受古主盛親大坂城に楯籠り付譜代の家臣等相集つて桑名を招で申けるは各々方如何思ふ、か新主を憑に奉公すれど古主の盛親大坂に籠城せば譜代の士卒の分として是を他所に見るべからず因て皆城中に入て討死せんと早くも決定致せしなり足下も其言篤と思案し何に成共決心あれと辭齊しく言放てば桑名は暫く考へ居

しが新主の思受しは何も淺深無内にも新主の思は最も深し其事故を委しく言んに古主には昔時生命を借す忠誠なせしかと浪人なして其後は扶持するとも出来ざりしを今の新主を仰みてより露命を全く繼ぎたり古主には數度の戦功を顯せし、も新主には未だ是といふ恩義を報することをさへなく夫のみならず新主を捨敵に屬せん程あれば不忠不義の名免がれ難し唯此上の覺悟に之名だ、る敵に涉り合討死なせば舊主の名も俱々擧る道理なりと憶する色なく昔しにそ舊友等は皆呆れ大坂城に立歸り盛親に告げるは桑名は君の近臣なりしが斯様くの心成なれば定て先鋒の列に加り高名成んとする成べし用心有て然るべしと盛親聞て大に怒り彼は定て先鋒なる和泉守の手に加り接戦成べき意成ん今此處よりて桑名來らば他に捕老彼を討取血祭して門出を祝して士卒を勵し唯一戦に勝負せんと思氣を合せ待掛ける内ハヤ桑名の一手第一番に寄來りぬと注進す諸桑名は平常人に談る様刀脇指の両刀ながら用立ぬ程接戦して討死し度ものなり杯云しが果て其辭に違はず此度の合戦には長曾我部の家人近藤長兵衛と涉合暫時勝負も決さりしが長兵衛の槍術や優けん彌次兵衛胸部を突入れ刀を抜て槍を切んとするに刃中央より折ければ又脇指を援て防んとするに槍疵至て深ければ終に長兵衛に首を捕れける斯て高虎が次將等枕を並列て討死しければ士卒等皆指物を打捨て逃ける中に藤堂勘解由は味方の散亂するをも顧みず八方に敵を引受大音響て呼はる様生命は主君の爲に捨名は子孫の爲に遺す我と思ん人々は此勘解由を討取て高名し給へやと呼り懸つ、大勢と暫時の間は戦ひしが寡は衆に敵し難く終に盛親が兄四郎兵衛の子息水正が手に討取れける然ば長曾我部盛親は勘解由が等倫に越て勵さけるを感

と彼が兜を取子孫に傳へんとて秘藏しけるとそ然るは大坂落城の後藤堂高虎は長曾我部主水正を召抱けり爰又和泉守高虎が郎黨等の多く討死せし故由を尋ねるに彼の渡邊勘兵衛は元中村式部少輔一氏が家臣よて去天正十八年北條左衛門大夫氏勝が楯籠たる豆州山中城の登乘して秀吉公の御威に預かりしより其名世上に高かりければ高虎召抱て寵愛しければ家臣等は猜忌て私語ける家臣中の我輩も戦功有と雖も御威に預かりし事さへ無に渡邊勘兵衛と如何成故か寵愛深く些少の武功も賞讃られ恰も他に人無が如くにせらるゝこそ口惜けれと感嘆に言言る此事老臣等の耳に折々入れば機會を見合せ高虎に諫言を成げれども高虎少も聽入る氣色の無れば老臣等始士卒に至る迄も高虎を恨み居しが或時酒宴の席にて新七仁右衛門宮内左番御解由等を傍聴七八名も集合酒宴も既に闌に及じ時新七言やう事新しき申様なれども此度大坂に御陣觸の有しより此新七は彼地に至なば一番懸く討死せんと思定めて候なり各自如何思ひ玉ふと有ければ一座の面々答へて今の一言素來覺悟なり凡武士たる者戰場に出んとするに臨み誰か生命を惜みて卑怯成擧動をなすべし縱令軍略拙くして軍難儀に及び候とて討死するの上はなしと云を新七は聞取す某しに於ては全く勝負を争ふに非ず唯々敵と見掛れば引組で討死せん心なりと云に此時勘兵衛は喉を振舌々夫は不忠の至なり如何と成ば是下の如き家中の一身一手の大將分たる者が所謂無しと討死せば其從軍の郎黨等は自然と敗北すべし斯る拙き計略は思止まり賜ふべしと碎を盡て諫めければ新七は微笑して答ふる様日来是下の碎は家中に於て万々一非常の事の起し時物の用は立可者は唯勘兵衛一人のみ其他の軍兵は有六無が如し杯と云れしと今更忘却は成るまじ此度討死

の契約に蓋を一賦參せんと勘兵衛が前に指出せば此上は何れも退すべき珍しき蓋なり迎三獸迄見事に飲酒仁右衛門に指ければ是より順々に蓋廻りて爰に討死を契約したるが果して此坐に居合す面々登人も洩す討死せり却説渡邊勘兵衛は此合戦の最中よりは三戸河野にて長曾我部盛親が先手の郎黨吉田内匠の一手を追散し一息吐て前の方を振返り藤堂の陣大に亂れ石餅の紋付たる旗廿余流を打捨矢尾村の東を指て逃走るを遙に見て南を指て乗出し仁右衛門以下を助んと彼討死の場所へ横合に突入無二無三に戦ひ終に敵の首四個迄取暫時挑戦ひしが敵は彼四組の輩と精力を盡て激烈戦ひければ今勘兵衛の新手に不意は横合より突入れ驚き忙て備を亂て堤の上へ逃上られたり最初長曾我部の兵は仁右衛門宮内彌次兵衛等部の四組の兵と逐立し矢尾村を東へ押行けるが勘兵衛の兵も又長曾我部の兵を慕ひ跡より追行しを盛親は早くも見て深くは敵を追すして矢尾村へと取て返し相戦ふと數時前大坂勢には敵兵の逃走りけるを面白さに思す深く長追して息絶精神疲勞ける處へ渡邊が新手に挿立られ何うは以て堪へき矢尾の町家の南の方へ先を争ひ逃行けり此時渡邊が兵士共は首十八級得たりける是を見て最初追立られし藤堂の四組の軍兵一同に取て返し盤川河原と云者渡邊と一緒は成粉砕碎身して戦ひしが彼の四組の大將の合戦し危かりける時勘兵衛是を他所に見做て助けたりしは平常彼等と不和成故と後にぞ聞けるとなん扱渡邊勘兵衛は此度の軍に五分一の士卒を以て陣誇たる盛親が兵を追崩し兩所にて兜首廿二級を得たりければ勇悦ひて西の川道を引揚げる途中堤の中を見受けるに石餅の旗二三流を風の隨處飄へして朱の三桃灯の馬印を押立軍勢凡二千餘人も懸來る景況なるよど郎黨士卒に打向ひ是

百四十六
は定めて長曾我部の旗本なりと覺たり假令幾萬騎の勢有共戰疲勞し軍兵成ば然のみ恐怖と
かはとて暫時此處より止りけり然るも長曾我部の軍勢は臆病者の東國勢が目立程の合戦は
豈夫致さし掛れやと呼りつ、咄と喚て討境を渡邊は堤の上へ馬を乗上敵陣を見下
しければ矢尾久寶寺の間に川通大橋の後より方々北に向て二三百騎又四五百騎と所々に群
集し久寶寺村へと引揚げる其旗の紋所は皆盛親の旗本と見えければ追境て戦は、利有へし
とは思へ共味方の兵士手負多く戦功有し人々は過半道を持参して旗本指て行たる跡なり殘
兵僅に三十餘騎如何成んと躊躇けるも好機會高虎の兵士等廿騎許來りければ都合五十餘騎
一團になり盛親の三ツ桃灯の馬印を目掛けて追境たれど廿分一の兵士にては廣場の合戦心元
を暫く堤上に引上んとて敵兵を會釋しつ、徐々ど一町餘りも繰引に退きける諸敵兵は二
三拾間も跡より來るにぞ渡邊勢も大返に引返し高中に戦ひしが暫くして渡邊は堤上迄
引取ける騎武者七人の内五人は俱々取ひしが二人は敵に押隔られ終に討れて死たりとぞ盛
親は二千餘騎を矢尾堤に備へ勘兵衛は東の田中陣取しが此時渡邊勘兵衛も是に加り續て
味方の兵士も馳來都へ百騎許になりけれ共敵の大勢も恐怖して急に戦ひをも始す又先手の
兵は今朝の合戦に打惱されて再度集合偽勢も無し此時高虎の旗本は廿餘町も隔りけるが先
途を主とする兵卒等援々馳加り陣間の内に三百餘騎も集ひしかば互に氣を得て稍二時許
も對陣す然も高虎と先鋒の敗軍を開て大に怒り野使清右衛門を使者として早く矢尾堂に火
を放ち疾く引取へしと申遣さんとしける處に渡邊勘兵衛の家士川崎彌右衛門馳來りて申け
るは此方にては小勢成共軍も堅固に備も出來候幸ひに高虎公の旗本をも寄られなば長曾我

部を討んと易かるべし是を開て高虎は倍々怒り今朝の合戦に仁右衛門以下の郎黨を見殺に
敗走せしめ渡邊死地を遁たればと唯今斯の如き廣言を吐こそ心得ねと返答し返しければ
渡邊聞て阿々と打笑ひ扱々大將たるの辞ども覺ぬ物かな斯大合戦の歴々有に一度敗走すれ
ば逆夫を例とせらる、こそ可笑けれ今朝味方の敗走は土地不案内の故として殊に勝負は平
常のとなり然れば横堤には止らずして兵を進め大將諸士討死して從軍郎黨左右に逃走しが
適々勘兵衛如き者有て踏止り防禦せしを賞感有んと思の外死地を通たる卑怯者と惡口され
しぞ口惜けれと其不運を悔しが切角堅固に陣營も整ひければ此機を外す一段せん又使者
を高虎の旗本遣し疾々御出陣有べしと申送ければ高虎愈々憤怒に堪ず早速軍勢を引揚來
べしと使者を追返され尙も引揚可との使者を立催促すると櫓の齒を挽が如なり其使者渡邊
が陣に馳來て敵兵の舉動を見に距離僅に四五十間を隔て今や開戦す可体よて軍兵の兜の緒
を縮鎗を提げ扇の中に駐場を殘して陣取居ければ彼使者情々思ふ様我は是より先鋒に加り
家人を以て敵の舉動を知ること肝要あれと其旨家人に云合め其身は先鋒に加りけり此知
せを開や否や高虎が旗本勢を初として昵近の者迄も忍々に馳來れば渡邊は大に力を得しに
彼の井伊掃部頭が亦備若江の合戦に木村長門守を討取勝誇て木村が殘兵を襲撃するを見て
勘兵衛時分は宜と采を執て軍兵を指揮し烈く討て出ければ長曾我部勢一支も支す敗走しけ
る勝も乘じて追討せり爰に増田兵太夫と云は其の父右衛門尉長盛と供に關ヶ原以後武州忍
ぶ配流せられしが故有て兵太夫新恩を蒙り宰相義直卿の御家人に召加られ冬御陣は寄手
の備へに有しかと其刻東國勢の勝利と聞ば愁傷の色を顯し城兵の勝と聞ば大に悦ぶ由内々

大御所の御耳に入れれば开は奇特成志操なりとて却て御感賞有て此度の再亂にも萬一大坂に籠城成ん心ならん其方の隨意にすへしと御内意迄も有ければ寛仁大度の君かなと坐に感涙を流つ、嬉し喜ひ大坂城に入城しければ秀頼公も其志操を御感有て赤地の錦の胴服を賜りたり此日兵大夫は其陣羽織を着て出陣し長曾我部が手に在しが盛親の兵の敗走するまで一人踏止り藤堂の幌武者藤野平三郎に討れけること哀なり斯て長曾我部の勢は悉皆く敗走し渡邊以下の軍兵等は勝鬨を揚て遠く敵を追ければ久寶寺の方より足を崩て天王寺邊まで敗走す東國勢は勝に乗じて廿余町を逐行三拾有余の首を得たりければ一先是まで引揚べしとて首を懸て引揚ける此度の合戦に高虎方へ討取し首二十余級を星田より御本陣へ参らせければ大御所御感悦斜ならざりしと今朝よりの合戦に其得し處の首數都合五百六十余級其内三百六十級は討新一組まで引取ける

○若江表木村長門守討死の事 井伊勢高名の事

扱も木村長門守重成は山口左馬助弘定内藤長十郎術秋等と俱に京街道へ押出さんと思しよ兩御所には須田星田の方より四條繩千千塚を越道明寺迄御下向有て平野天王寺の方より袋塚有んどの風開を聞然らば京街道へ進撃するも其詮無と五月二日大坂へ引返しける秀頼公は去年の吉例とて長門守重成を今福口へ備させ自ら天守より御覽有べしとのと故長門守畏りて山口左馬助内藤新十郎等と俱に五日の朝出陣しけるが今福口は殊の外地理悪ければ東國勢も豈夫此處へは寄來るまじ唯今の風開に因ば敬之道明寺より平野へ向ふ由成ば彼所へ寄んと思とも既後藤真田の兩士其外數人の備も有ば押寄行んも無益なり明六日は場所を

扱て兩御所の旗本へ横合より突て入一戦に勝負を決せんと思し一騎重成は若江村の東の河原迄巡見して今福へ歸り來り明は六日丑の刻四千七百餘騎を引率して若江を指て出陣し東國勢の旗先を見るも齊く雀躍して今日の軍唯一戦に決べしと内藤長秋山口弘定其外へも夫々指揮を爲たりける切木村が加勢には眞野藏人入道宗信長曾我部宮内少輔盛親父子五百余騎なりしが七ツの鐘の響や否や長門守には平塚五郎兵衛を先鋒として若江の莊屋飯島太左衛門を案内者とし大和橋を押渡り東山の際より見出せば北は八幡殿盛より南は道明寺國府邊迄野も山も一面に焚燒たる篝火にアテ多敷軍勢やと諸軍驚き恐れり左右する内東雲近く成鐵火も漸次消しにハヤ後藤勢は道明寺にて戦ひを始しと思て砲聲夥多敷聞えければ長門守愈々急迫立ける此時道明寺星田街道に連續る東國勢は全銀の指然或は旗馬印等幾千本となく旭日に輝きて引を切せ見えければ土地の農民共は陣へ來り兩御所には唯今御着陣有しと認へけるまぞ長門守愈々急迫す最早陣備するに及ず疾々一戦を決すべしと若江を南へ乘せしが沼田深くして行べき道路無路方盡て又若江へ引返し我部下の者共と備を立て陣取ける矢尾表に有東國勢の第一の先鋒藤堂和泉守高虎二陣井伊掃部頭直孝が軍勢押續きて此處に來ると見ゆし問ふハヤ藤堂の先鋒は鉄砲を打掛て長曾我部が勢と開戦しける木村長門守は最前南へ乗出士卒に兵糧を喰せ居し所へ斥候の者駈來て東の山際に將軍の御旗御馬印等見る候と告げれば長門守は悦びて急ぎ支度し鉄砲三百六十余挺を備へ先手内藤新十郎山口左馬助其次長門守の旗本銀の茶臼の馬印を押立其身は金の捻竹に白熊付たる兜を頂き白母衣掛たる白栗毛の馬に我身も馬も白沫はんで乗出し若江を立て玉越川の堤へ押行

たり佐久間藏人忠頼は斥候に出しが馬を早めて駆歸り敵を其處に來り候と云かと思れば
 藤堂勢藤堂新七同姓玄番銀の牛舌の指物にて千有餘騎にて押寄來れば長門守の軍勢是と暫
 く戦ひしが長門守は平塚五郎兵衛に命する様此度の戦ひは最も以て大切成ば皆々軍令の固
 く守り不行儀無様嚴重に制すへしと言渡ける此平塚五郎兵衛と云は去る慶長五年關ヶ原に
 て討死したる平塚因幡守の甥にして去年の合戦にも最も勳功多かりければ長門守の部下に
 取立られ黄羅紗の陣羽織に采配迄も許されし者なり斯て青木七右衛門は黒き切先の指物に
 て藤堂勢の千有餘餘の中へ竊直らに駆入て戦ひたり藤堂新七は兜の頂上に采配を掛白紙子
 の陣羽織に金の指物にて十文字の鎧を掛へ多勢の中に奮戦せしが終に討死成たり
 けも藤堂玄蕃も深手を負しが家士齋川權左衛門の肩に掛て退ぞく途中是も同一死たりけり
 又藤堂勢の田中内藏允は黒田四郎左衛門と相討して首を得る爰も平塚五郎兵衛は采を執て
 長逐を制し兵士を集めて長門守の旗下へ引返たる頃は申の刻許なりけり非伊掃部頭は道明
 寺の方へ藤堂勢に引續て押行しが木俣右京庵原助右衛門兩人來つて唯今より道明寺へ向ひ
 玉ふ其後藤堂ハヤ敗軍の櫓子成は向はる、も其聲なし若江の方には大坂勢の見え候へば是
 へ行んとせらるれば若江の敵兵必す喰留申へし然ば若江へ御出馬の方然るへしと勸奨けれ
 ば郎黨諸士は道理を同懸し直に備を西へ替て押出せば掃部頭も引續き備を立て出陣せり扱
 木村長門守は藤堂勢を退崩し玉越川の堤にて八方に目配し兵士の指揮をして在しに立田山
 神立明神の麓高安の邊より赤備を數限りなく押立一万餘騎の軍勢は唯一色の赤備にて押來

るを疾くも見て長門守と諸軍と言やふ是が即ち東國方名高の赤備成を用意せよやと注意
 て其身も兜を頂きて采を取つ、乗取けり井伊家の老黨川手主水と只討死と覺悟あり部下の
 兵士を引卒して我眞先と進ける又鉄砲頭長阪十左衛門と「其聲如林、不動如山」
 天下無双長阪十左衛門と書たる金の制札の指物にて乗出し味方に向つてサける堤の此
 方と彼勝利有て味方必定難儀成ん堤の西こそ宜けれ疾々堤を乗取へしと烈く指揮なしける
 又ぞ庵原助右衛門三浦與右衛門等も進み備を立て替々れ木村勢の堤も備し兵士等と鉄砲の
 筒口を揃へて放出せしか再度玉を込る隙なく井伊の軍勢も堤を乗取れたり庵原助右衛門采
 を執て此合戦餘り短兵急あす可らず御り居ても必勝成りと言けるを川手主水と聞居しか
 面も同意の様となし不意を討て高名を顯さんと忍び、又拔掛しければ是を覺りて満野七
 左衛門山口伊豆守遠山甚二郎勾阪彌五助等も是も續て討出たり扱木村方と佐久間藏人
 禮三郎川島和泉來智徳院平塚熊之助等鎧を携へ今や敵の來ると待居し所へ主水騎馬よ
 て突進りければ急地鎧もて突伏たり是を見て熊之助主水か首を捕んとする所へ山口滿野勾
 阪遠山の四人走り來て熊之助を突伏けるを遠山と其鎧下を潜て熊之助か首を取斯て
 木村長門守と采を執て勝鬨を揚先鋒の方より齊く打城らせけれと山口伊豆守勾阪彌五助滿
 野七左衛門等も奮戦せしかと終に敵せずして皆々討死す庵原助右衛門と川手主水の御幣の
 指物見るを見て適れ主水を討すなと下知なす詞も未だ終ざるを八田金十郎と突伏られし
 味方の屍を踏越て我姓名も名乗つ、壹番掛は笑出せを敵兵も又三方より突出しかを金十郎
 も既も危く見ける所も戸探左大夫續て蒐り井伊家も名たはる十本鎧と世も知れし其人々成

島彦左衛門松井小左衛門同姓七左衛門岸藤七戸和田太郎右衛門丸山八郎左衛門朝比奈彌太郎林三十郎河野六兵衛齋市之丞等各自鎧を突入れける丸山市大夫と此機を外す鎧脇目懸て駒立たり此時長門守重成と去年今福の合戦より一騎當千の剛兵と呼べられたる長屋平大夫青木七郎右衛門伊藤七左衛門山中彦之助半田市郎兵衛川崎和泉波多野兵庫藤岡右京大塚助右衛門黒木藤右衛門等面々二三百騎の勢を授け必死を究て戦する程と井伊の大軍を左右と突破り木村之鎧横天地と出沒して陽と開き陰と閉て下知しければ從兵等争か生命を惜へざる自討死を一時又決て勇戦すれを井伊家と世と聞わし此等の勇士等の討死手負多く有しと爰と掃部頭直孝と馬上にて采を執て指揮しける機敵之何も小勢として殊と加勢の兵も無今此時機を外さずして疾く蒐れや者共と最高聲を號令するも旗本勢の八千餘騎勇進んで突蒐る今朝よりの戦ひは疲勞果たる木村の軍勢山口左馬助内藤新十郎真野藏人等の勇士の此所を先途と防さしかと終て大軍と取圍れたり青木七郎右衛門早川茂太夫等と長門守を諷る機秀頼公の御大事今日をかざるべき此所を我々兩人踏止りて討死せん其間と御身と退き賜へと促しければ長門守と耳も入す聞捨て露殿の如き敵中と前後も振ず突入て左往右往と蹴立つ、此所を先途と戦ひければ近付者と更と無道を開きて通たり此時庵原助右衛門と十文字の鎧を携け立出て溝越え長門守の幌を目掛て引倒せを倒れながらも長門守と血氣盛の壯士と云殊と名も負勇將成を跳返さんと急遽しが此方も然者助右衛門と起も敢ず上と誇り長門守を討取ける斯る所へ安藤長三郎馳來て是を手柄其首某子へ賜れと云々れ之助右衛門莞爾と打笑長三郎よと奇特なるや分かな此者木村長門守と屢々名乗と其真偽さへ隨

手に知す假令眞の長門にもせよ我等の牛角には足ぬ者なり懇望成は其方の軍功とせられよと白幌に首を包みて長三郎に授與白熊金槍竹の兜のみを分捕けり憐ひべし木村長門守重成ハ今年廿二歳秀頼公の乳母子にて其才智無万人に賜れ通れ豊臣家第一の忠臣義士たりしも不幸にして若江の野邊の夕霧と俱に其身も果敢無消しが國に報せし忠魂は世の鑑とぞ稱られ敵も味方も一同に惜ぬ者そ無りける内藤新十郎も今年廿一歳秀頼に扱置せられ一方の大將と成て千有余人の兵士を率ひて踏止り此處を先途と防戦せしかと終て日下部源太郎朝比奈左近の兩人と討れける山口左馬助は八田金十郎に討れ真野入道は正木合人と討れ牟禮彦三郎は日下部三郎右衛門大島彦八等に討れける其他佐久間藏人川崎和泉守水谷忠助川上十大夫篠岡右京大塚助右衛門松浦佐吉青木七郎右衛門早川五太夫波多野兵庫黒木藤七根來徳智院等は各々長門守の鴻恩を受し者成は義を重し命を殞せしが皆重成が遺骸の側を離れず杖を並て死したりける爰に長屋平大夫青木七右衛等は近藤若見の手に生捕れて御本陣へ送致しが後と至て助命せられしと井伊方遠甚三郎は最初平塚熊之助の首を捕て庵原助右衛門に見せし時は其身至て深手なりしが終に其首を離す死にける勾坂彌五助は突伏られしかと從者に助られ踏陣して後療養を盡せしかは終に全く平癒せり其他軍功の輩ら數多有て討取得し首級三百五十余級となん聞えし大御所此時は須田を御渡駕有て二里許も渡せられしが少く御輿を止めさせ賜ひて御先手の汗進を待せ玉ふ所に安藤長三郎は木村長門守が首を懐に包み持來りて松原の野崎にて寶檢に備ける然るに長門守の首は毛髪へ薰物を焚込しと覺く香氣芬々たれば重成討死の覺悟にて斯せし成んと其用意を感しられ彼は若年成と

義勇有者と惜せ給ひける山口左馬助は玄蕃が嫡子にて松平右衛門太夫より山縁有は是に頼て其首を拜領すへしと申渡されて安藤長三郎と御褒美とて金十枚八田金十郎日下部源太郎は各々金三枚宛下賜けれ之衆人異口同音に掃部原が軍勢を譽稱ぬは無りけり

○小幡勘兵衛景憲反間之事 并小幡原秀政本忠朝討死約束の事

爰に小幡勘兵衛景憲と云るは武田晴信入道信玄の舊臣小幡豊後守昌盛の三男にて母は原美濃守虎胤の女なり景憲性質智勇非凡人に勝しかは十一歳の時徳川家に召出され將軍家御幼年の時御御役を勤しが如何成との有てか其後浪々の身と成普く諸國を遍歴し彼の關ヶ原の役には井伊勢の陣に有て戰功最も多かりしが去年の冬陣には加賀の先鋒に在て眞田が丸へ押寄し時武田家よりの古傍輩なりと姓名を呼はりて眞魁けに接戦せしかば城中の將卒等も是を見て天晴強勇の者かなと感せしとそ斯て御和陸後大坂には再叛の北侯有て武功有諸派人等を召抱られし時大野主馬は禮を厚くし辭を卑ふして景憲を味方に招きしかば景憲は伏見の城代松平隱岐守定勝京都の所司代板倉伊賀守勝重の方へ來り申しけるは某し關東へ忠勤の志慮有共彼御勘氣以奉未御免を得す今よ於て諸國を漂泊して雪霜を送れるが然るに此度大坂より禮を厚ふして某子を招かれ候是を俸俸に聞者と成て城中の密事を關東へ告奉つるへし然共聞者とはいへ敵中よ在ば諸人無ては後日に至て降參不義の名を取ん是残念の至なり天晴剛勇証人に成玉は、景憲城よ入て反簡の謀計を行はんと云けるにそ定勝々喜は是を聞て是は莫大の忠節なり御前のごは我等兩人宜に執成へしとすければ景憲は大に欣喜願て大坂の招に應し入城しけるか景憲は武田家の軍法に熟練せし者とて城中の諸士尊敬

大方成されども諸老臣等をは景憲が胸中疑ひ起証文を參すへしと云けるを景憲少も慮せず報答を認め應判を押差出せしかは是よて城中の疑念も晴大野修理亮木村長門守渡邊内藏介等迄も心懸を許し其後は軍議の席へも屢々加へられしに因秀頼公が再叛のと續て京都へ聞者遣し兩御所の御出馬後に洛中洛外を放火し禁裏仙洞を奪ひ奪らんとの密計迄も洩なく隱岐守伊賀守等迄進し兩御所の御耳にも早く入奉つり置けるとなん此に冬陣の節城中よて眞田後藤等が糧々を軍議せし席に於て以て景憲末座より進出某子卑賤の派人にて諸將の計策を奪せんとは憚り多しと雖も愚慮を包みて申さるは却て秀頼公の御爲を思さるに似たれば取捨は各位方の御思慮に任ず上なる兩軍師の違らる、計策は一應道理とは聞候へ共謀計は敵よ困て轉化せすんは有可らす彼の大御所には千戈の中に長成難難苦戰幾度となく關玉ひ參り野原の合戦川を隔たるの軍等能敵の多少剛臆を豎り虚實を察せらる、と孫吳に勝り其神算妙謀は鬼神をも欺くへき大將なれば當時誰か是に敵すへきや今其一例を舉ぐんは姉川小牧關ヶ原等の合戦皆小勢を以て大軍を敗りしと世押て知所なり併し乍ら大野修理亮殿が像てより仰せらる、如く聞驚の癖有大将なれば此度も容易には其押來るまじ其間又近國奥富の地の進退自由成所陣を張て合戦有んには敵よ如何程の軍略謀計有共決して氣遣有ましくと事も無けに言出ければ後藤又兵衛は頭を振今小幡の云はる、所一應利ありと雖も其は餘りに大略の策あり幸村殿と某と三方騎程の兵を以て宇治瀬田の兩所に馳向ひ江州石部の驛より此方の在家を一軒も残らす様拂ひ關東勢に足を止めさせす橋を燒落し船を碎き其上反間者を敵陣に入種々の街説を云觸し日夜敵陣を劫かし睡眠を妨げさせ其間隙よ

百五十六

諸將の内一人を京都に遣はして板倉伊賀守と合戦させんは宇治瀬田兩所の戦と雖も心易かるべし其上明石長曾我部等の諸將は大和路を守らせ七組の衆中には茨木城を堅く守らしめ大野毛利の面々は天津近傍に出張して伏勢を設け城中には遊軍を備置弱からん方を助させ然上にて戦端を開なば長途に押寄來りし關東勢成ば入馬も俱に疲勞押尚數日を経んには近國近郷は言も更なり中國西國まで放豐太閤の鴻恩深き諸大名等數十人必定制御味方に馳加らんと辨舌滔々と論じければ小幡は片頬を笑を含て此説を駁する様昔より宇治瀬田を隔るの合戦は治承四年には源三位頼政彼川を隔て足利又三郎忠綱が爲即敗走し元暦元年には木曾義仲川木をて支へしも佐々木提原の先陣隔遂に追退けられ承久の乱には官軍川へ出張して北條勢に追崩されり後醍醐天皇の御宇官軍新田楠等も同所に於て防戦せしも足利尊氏の勢も追散されたり都て往古より宇治瀬田を根據として利有し戦ひ一度もあし其上此度は日本全國の諸大名を敵に引請かから唯此川一ツにて支んと遠き志慮共思はれず敵兵前後左右より攻來らんには後陣より必定敗れ崩るべし又大津近傍に出張して江州近郷に伏勢等を設置其板倉伊賀守松平隆岐守等斥候を出して探索事必定あり其上井伊勢は佐和山の入敷を次て兩御所御上洛の道路を守護し油断なく供奉する由風聞あれば味方の伏勢は敵の爲に擒と成べし多からぬ味方初度の合戦に利を失はゞ氣を屈するのみ成らず偶々秀頼公も隨從成さんと思ふ將士等も志慮を變じ關東に味方すべし能々思慮有べしと云ければ大野修理亮渡邊内藏介等は是を聞いて只景憲の云處遠き志慮ありて感伏しける備景憲は此後も數度の軍議に關東勢の不爲と思へば一々説破し其都度隆岐守伊賀守の兩人へ洋進しけれ其大

坂の城中には更に其事を知者絶て無りける然るに兩御所の京都御出馬前に景憲は大坂を立退二條の御城まで并闘せしが此等の功に因て御勘氣御免有直に御旗本に差加られ其後七日の討にも軍功有しを以て領地千五百石を下賜て御使番を命せられぬ儀も五月六日の合戦に城方皆敗走しければ今夕は兩御所御旗を進られ平岡に御陣を定らる「一説に將軍家は道明寺大御所は千塚とあり」從軍諸卒は出雲國四條總手矢尾若江井府邊迄充滿す其夜小笠原兵部太輔の本多出雲守忠朝が陣來て語けるを某し今日若江の北岩田村に於て木村主計の軍勢に駆向ひし所神原遠江守には聊か追討の功有共某しは手を空敷せり今に於ては某子油斷成さる旨言上すと雖も御心底には落させ給はさるへし且諸士の思くも宜からず所詮明日は爽快く討死するより外なかるべしと云に忠朝聞て我去冬鳴野の邊に陣を張し時前に沼有て進事能はされは此言を言上せしに陣場を嫌ふと思召けるにや亡父忠勝は戰場に出て平素場所を嫌はすとの仰あり我等も此事を言上して御旨又違ふ事を懼れり相摺て潔よく逃に討死を遂へしと兩人暫時間密談せり是縁者なるか故に此事を言合せしなりとかや

○越後少將忠輝朝臣軍評定の事

越後少將忠輝朝臣は今度大和口の總大將として五月六日午の刻田尻を越て人數を押し出されしが道明寺口の戦争ハヤ終りし後なれば何となく手持無沙汰に所謂喧嘩過ての極地切かなと諸軍嘲哂る者多ければ從士等は皆口惜きと思ひける中に家臣花山主水正曾川老甫笹瀬左太夫小野淺之助舉進出て守けるは疑に溝口村上の言上せし通り今日大和口の先鋒水野本田の兩氏を初め諸軍共戦功最も大かりしに此方の軍勢のみ其期に後れ手を空くせしと口惜



きとにひはすや人の誹謗世の聞え是に過たる恥辱や有へき今日大坂勢道明寺矢尾より敗走しけれ其城迄は引退かす陣備も彼所に見えぬ終日戰爭疲勞たる軍勢成は定て油断し居る成ん孫子か臨賈の第六に行こと千里にして勞せざる者は人無の地へ行はなり攻て必ず取者は其守る所を攻ばなり守て必ず固き者は其攻る所を守ればなり故に善攻る者は敵を守る所を知すところ見え候疾々御出陣有て彼等を一刀の下に討果しむへど且勤め且諫言しければ朝臣も道理なりと伺し給ひ玉虫對馬守村平之丞の兩人は最も武功有勇士成は後前に召出され今晩敵陣を襲ひ一戦を試みんと思は如何にやと尋給ふに兩人は承はり日既に昏昏に及り只今より攻城らんには必然夜軍に成ひはん土地不案内にして戰爭んと餘り思慮無に似たり願くは明日城郭へ押寄爽快く戦端を開かれなば諸人の睡眠をも覺すへしと申ければ忠臣朝臣も實にも宣ひて今夜は朝臣にと圓妙山は先鋒は圓妙河原に陣取ければ軍兵等は皆本意無事に思ひける此軍師玉虫對馬守は甲州武士と云城伊庵の弟よて屬々戦功有し者故大御所より附置せ給ひたるなり又林半之丞は堀左衛門督秀政の家人たりしが武功他に勝れしとて少將石抱へられしに此度の諫言圖を失ひ忠輝朝臣は唯一戦をし給はさる内に敵を悉く敗走し少將は軍事に怠惰しとて大御所深くは憤怒有つて終に其勳氣を蒙り配所へ赴き給ふと天廻とは申ながら疎情かりける事共なり于時日も稍西に傾きければ諸陣より秘密の斥候遠見等を出し油断なく敵の舉動を窺はしめ烽火を焚續て我陣營を守り用愼してそ夜を明しける

五月七日兩御所御出陣の事

大坂方には道明寺若江矢尾三口の號令相違して惣敗軍と成殊に頼りに思ふ木村長門守後藤又兵衛薄田隼人正井上小左衛門山本佐兵衛山口左馬允内藤新十郎眞野藏人入道増田兵太夫を初め屈指の勇將剛兵等數多討死して城中へ逃入者少からずと注進しければ秀頼公にも心を惱せられ黄母衣の面々を諸手へ繰出させ兵卒どもに一先引揚よ明日は早天より岡山筋天王寺口へ出張せし奇手と合戦を挑ん其時如何もして敵兵を圍き出し天王寺口へ引付て討取へしと號令ありしかば諸將士卒等皆城内へ引揚けれ其長曾我部宮内少輔其子右衛門太郎之歸城せずして京橋口に密に陣取ける大野主馬も茶臼山邊へ陣を取敵兵の不意に奇來らんかと用心して備たり又眞田左衛門佐毛利豊前守福島伊豫同姓武藏等は其儘天王寺庚申堂邊に陣を取て夏の夜の短きに明るを避しと待詔ける關東方の諸將は其夜半野の陣へ赴らんよせしも大和組伊勢組美濃組の諸將并ひに藤堂和泉守井伊掃部頭等は先鋒の輩らは陣々を堅固に用意せし故終に御陣へは赴かさりしと云儲又將軍家の使番佐久間將監大御所の御使番横田甚右衛門の兩人を井伊の陣中へ遣し戰爭の景況を尋問遊されし將監は逸早くも歸來りて掃部儀今日の軍に打勝勇氣凛々と見へし其川手主水滿野七左衛門等の剛勇討死し其外負傷最も多くいへば明日の先鋒は他人には縁替有て然へしと言上ければ大御所は御耳にも入給はぬ御容子にて掃部今日は功名なりとのみは意有し處に甚右衛門も續て歸陣し掃部儀今日の勝利に倍々勇立ち明日も此威勢に乗して城兵を追崩さんとの用意最中よ併し掃部儀は如何にも勇氣盛に見受候へ共討死負傷も尠からず然ば明日の御先鋒は餘人を御撰舉有て然へさか併掃部の承引覺東無半何分も御賢慮有んことを乞奉つると言上し

ければ大御所大御機嫌悪しく如何様明日の先鋒は岡山筋を加賀の筑前守に天王寺口を本
多出雲守に繰替んと仰出され加賀本多の兩陣へは御使番を以て驅逐されける是全く甚右衛
門の言上方の將監を優し故と聞入大に感しける其言上の意味は粗同けれ共大御所兩入の言
上に因て御取捨有しかば將監は大に赤面して退きたりとそ其時本多上野介罷り出明日の御
本陣は何地にも御御厨の品等天々運送致すへきやと伺ひ奉りしに明日は茶臼山に陣取へし
去年の如く心得諸事取計ふへしと御意有ければ只今茶臼山は大坂勢の充満しけるは斯の上
意は不審成と訝しく思あからも其旨趣を向々へ觸渡けるに果て七日は茶臼山を御本陣と成
れしかば何も其神算を感し奉りける爰に越前少將兼三河守出直朝臣は五日の夜四條繩手
宿陣にて六日の朝遅く着陣せられ戦争の間に合さりしを残念に思て家老本多伊豆同姓丹下
（後飛騨守）の兩人を御本陣の佐渡守迄遣され明日の先鋒を何卒當家へ仰付られ度と口上
を述居る處へ大御所通御有れしかば兩人の者は平伏して在けるを御覽有て耶處に平伏致居
るは何者ぞと仰有しに佐渡守答へて三河守殿方の兩本多にてい言上す大御所屹度御覽有
て如何越前の者共今日は午睡を致居し哉只今頃何の用向にて相越しやと上意有しかば佐渡
守は明日の軍議に付て參上したる處を言上しけり其時大御所には兩人に向はせ給ひ明日
の先鋒は加賀に付たりとのみ上意有て直に入御有れしかば兩人共恐入て早速退し斯
て七日の曉天近く成しかば御先鋒の面々も追々に出陣し大御所にも其御用意あらせられし
が御甲冑を召給ねば藤堂高虎は訝しみて今日は御具足を召給はせやと問ひ奉りしに然ばな
り家康は數度の戰場に臨て最早事訓たり秀頼如き乳臭き小兒を征伐するに具足は不用なり

とて焦茶の御羽織に活の御袴を召せられ御乗輿有ければ佐渡も澁色の帷子を着して山
駕籠に乗籠御扇にて蠅を拂ひながら御後に隨從す御出興は卯の上刻なり御持旗御長柄等は
住吉の近傍に立置可と觸示され城と住吉の間に御輿を留置先鋒の注進を待給し將軍家に
は是より先寅刻御出陣にて黒の御具足と御兜を頂き山鳥の毛を織たる御陣羽織に白熊の白
旗をお携へ有て櫻野と云る御秘藏の名馬に召れて御自身に隨陣を御遊見在せられ御指揮を
加へらる此時加藤左馬助黒田筑前守細川越中守等承賜しけるに如何も御機嫌悪しく追付々
々と仰らる大御所の御旗本御歩行頭左りは阿部左馬介松平右馬人右は松平豊前守松平志摩
守酒井左衛門尉なり將軍家の左右には樺村出羽守松平大隅守内藤主税助（後右見守）松平左
近等を始め大番頭御書院番頭御歩行頭等各其組中を従へ次第を守て隨從せり御小姓組の
番頭は一番水野監物二番井上主計頭三番板倉周防守四番成瀬豊後守と漸次に繰出しける其
前には鉄砲數挺并御旗を立られ虎の皮の投網の干本鎗は開戦の節歩立の者に渡すへし
と御指揮殘る所なし大御所には御發駕前家康は茶臼山に向ふへし將軍には岡山へ向ひ給へ
と宣ひけるに將軍家には御得心無にや更に御請無りけり岡山口は大坂城より道程は僅か成
共路悪くして踏入べき所無れば此處より敵兵は討出せしと思召て御請無にや其後も屢々岡
山へ向ひ給へと宣ひけれ共染々と御挨拶もなく御不興氣に見えさせ給へと大御所にも御氣
色損はせ給ひ若々數見をけるに本多正信は心を痛め兎も角も上意に隨はせ給へと頻に諫め
奉つりしかば漸く御請有て岡山へ向はせ給ふ

○越前少將忠直朝臣先登の事 并寄手備前之事

五月六日の黄昏時越前少將忠直朝臣は家老本多伊豆富正同姓丹下成重を大御所の御本陣へ遣し明七日の御軍令を伺はせしに兩人は御前へ召れ道明寺矢尾若江三ヶ所の戦争も越前の者共は午睡して知さりしが明日の先陣は前田筑前守と命じたりと宣ひ衛と入御ありしかば兩人共御請の辞なく凄々として歸陣し上意の旨趣悉く述べければ忠直朝臣は大に耻玉ひ斯の加さ仰を蒙ると忠直の武運も盡神明の冥慮にも放れしか義を見てせざる勇無なりと孔子も教へ玉ひたり此上は越前守を還し奉つりて高野山に整居するより外なし忠直荷くも大御所の嫡孫と生れながら筑前守に見替られ何として武士の中を面を合さる可と怒れる眼より涙をハラノと流給へば本多伊豆是を見て然迄に御決心有し上は明日當表にて御軍令を破られ思の儘不行跡を成れんには是より願ずして公儀より越前國を没収せらるべし此儘如何やと申上ければ忠直朝臣は少く顔色を和げ玉ひて開は至極の快事なりと宣ふを伊豆承まはり然いはく吉田修理を御委頼有て然るへしと言捨頼て修理を伴ひ出来る(此修理は若年の昔時關白秀次公に仕官同公御自害の後流浪せしを武勇の名譽有はとて御父秀康卿に召抱られ評定衆の壹人に加られし者なり)諸修理と伊豆に伴はれて忠直朝臣に調していふ様大御所の君を耻辱玉ふ事全く其忠勤を勵さんが爲成ん臣君を諫るに君日常は最輕々と扱へや有其一例を擧んに治承の往昔今井四郎兼平主君木曾義仲を諫るに君日常は最輕々と扱へ玉ふ御鎗の今俄然に重く見らば續く味方の無故に臆病神の附し成ん此兼平壹人を千騎万騎と思召るべしと義仲を辱し先しは是を不忠に似たる忠言なり況や君父の御身として御子孫への御教訓誰か恥辱とや可き唯明日の合戦先登は進んで士卒を勵し敵兵を討崩され

ば忠孝共に至からん此處の道理を考へられ仇を思にて報ひ玉へ斯云内も加賀勢に路を遮れば心は矢猛に思ふ共進退共に不自由成ん幸ひ某子此土地の案内を委く記應たればお委任有ば先陣して御案内を仕つらんと憚る色無陳述ければ忠直朝臣も老黨等も此儀最も然るべしと爰に軍議決せしかば然らば修理は先陣仕らんが夏の短夜成ば唯今より御支度有て然るべしと兩本多にも旨を含め支度次第に押出すべし御両所にも疾々御支度有べし續て朝臣にも御用意あれと殘る方なく指揮して一先陣營を退さけり斯て士卒には兵糧を遣せ軍馬の支度整頓しかば旗指物を真先に押立白吹貫に二ツ引幅の馬 驗 拭に角取紙の付たるを静々と風に翻へし來りしは是なん修理の手勢なり然るに久寶寺を打過んとする時藤堂高虎の兵進出夜中に陣所を通るゝは誰人にやと詰りけるに修理取敢ず越前少將忠直朝臣今日の先鋒を承はり士卒を引具し來る旨を答ければ上意の上は左右に及すと開門してを通しける夫より平野を左に見て南へ廻行程に加賀勢に行逢しか加賀勢は道を横切て只今大勢を引具し來玉ふは越前の御勢と覺候今日の先陣筑前守上意を蒙る上は壹人も先へは通ましと伺ければ修理聞も終す其方は如何思ひ居るや拙者は豫て筑前殿にも御存知の吉田修理なり今日岡山筋の先鋒は加賀勢天王寺口は越前勢に仰付られたり御軍法に違背するやと罵りながら修理眞先に本多伊豆同姓丹下小栗美作多賀左近山川讚岐以下接續して加賀勢の中央を横に突切て押通るを加賀勢是を見て這て浪藉なりと云を耳にも入す通抜しかば二萬有余の加賀勢も聲方盡て通しけり然らば越前勢は夜半前に天王寺茶白山の近傍まで押來り此口の御先手本多出雲守か備の左の方へ陣取ける

○大坂勢備立の事并御和詰術計の事

斯て大坂城中には關東勢彼冬陣の如く持揚を定め軍勢を漸次に押寄せれば開戦は多分明日(八日)頃成んど風聞區々成しが平野岡山等東西四五里の間を遙に見渡すに平常に見馴ぬ村の如く見えずは旗指物村里と思ひしは陣備にて日の出るに隨ひ旗長柄の露を帯たるが朝日に映じて見えず渡り東は矢尾若江南は平野堺をかけて三四里の間寄手の軍勢一面に襲來る有様なれば毛利豊前守の家人松岡彦兵衛南森三右衛門等急ぎ斥候として出張せしが程無歸城して眞田毛利の兩將へ云々なりと告げるに城中是より騒ぎ立既に昨夜も秀頼公の指揮に關吏勢を圍き出して天王寺へ引寄せんとするに既に彼より押來れりとして夫々に備を立ける先天王寺表には眞田左衛門佐幸村同姓大助治幸の先陣一千有餘人茶臼山の上に赤旗一流と唐人笠に幣付たる馬騷を押し立茶臼山の南の方は伊木七郎右衛門遠雄大谷大學吉胤渡邊内藏介紀原の方は福島伊豫守正守同姓兵部少輔正鎮等紺地に白石餅の旗を立て吉田玄蕃石川肥後守津田左京結城權之助の二手は眞田が旗本茶臼山の上に陣取是より北庚申堂の前に之毛利豊前守勝永筋違の旗鳥毛輪貫の馬騷騎馬武者は金の半月の番指物東の方小堀口には毛利式部少輔永俊山本佐兵衛櫻井勘解由等北良の方は木村主計頭湯淺右近長岡與五郎小倉作左衛門青木攝津守眞木豊後守樋口淡路守津田平三郎内藤宮内正知三浦飛彈守稻葉三右衛門天王寺石の鳥居南は江原石見守藤堂土佐本郷左近早川主馬頭山間平左衛門細川讃岐守岡山表に之大野主馬治房斧の紋付る旗四五流押立其組二宮與三右衛門岡田縫殿介岡部大學旗島玄

善允山川帶刀中島掃部助新宮左馬助御宿越前守和施傳右衛門等少く前陣取又根來の徒主馬が後陣に備ふ西北の方毘沙門の池南口には白地と宇都宮笠の紋付たる旗同し笠の馬印寄合組二隊并に後藤藩田等の殘兵を一緒に招集て大野修理亮備たり其次に勝曼院の前には七組の諸組武士を隨へ白幌と白き一本竹刀の馬印は中島式部少輔氏種折入菱の旗黒半月に横綱付たる馬印は堀田圖書介勝嘉段々の旗輪貫の馬印は津水甲斐守時之此時は未だ秀頼公の御前に伺候しけれ共組中家人は出張したり黒地の旗銀の角折敷三重の馬騷は伊東丹後守長平(冬野)の時の馬騷は鳥毛の棒(冬野)白地の旗に大文字銀唐團扇に熊の草(冬野)後陣に備ふる馬騷は野々村伊豫守雅春赤白段々の旗は眞野豊後守頼包此外小性組の面々は後陣に備ふる秀頼公の旗金の切裁付たる馬騷は津川左近親行預り奉りて櫻の門の前に押立たり其成勢關東陣の下に金の切裁付たる馬騷は津川左近親行預り奉りて櫻の門の前に押立たり其成勢關東勢も恐怖に足らず諸人思けり今日は秀頼公も天王寺表へ御出馬あり直に士卒の剛應をも御訊取有て御身の安危を決定らるへしと有ければ諸軍も皆々勇み立大將軍の御前にて最精麗なる討死して名を万代に残さんと軍事を勵み身を碎き假令骨を粉にする共一足たり其退くまじと威勢強く見へよける初秀頼公には梨子地緋緋の具足にて太平樂と號たる七寸三分の青馬に梨子地の鞍を置て玄關前より引出けり櫻門の外より堀端邊に甲冑を着し弓箭を携帶たる武士順序を守り整列して秀頼公の出馬を待ける景況は故太閤殿下の御在世を思出してはと譜代の諸將は覺す鎧の袖を濡しける爰も大野修理助は御前に來りて其子是より茶臼山へ罷越兵田左衛門佐と軍議致し追付愈快の御一左右上申すへしとて僅十騎餘の兵士を隨從茶

白山へ馳行ければ秀頼公は櫻門の内に床几に腰を掛給ひ修理が歸城を待給ふ其中に諸將
 大手の櫓を押登りて見渡すに關東勢天王寺口より岡山の方へ備を立二里有餘も引續し其中
 に唯今平野の方より馬煙を立て押來る一段は即ち大御所成へし率大御所の着陣前も開戦有
 らんにはと思慮有者は歎息せしとなん斯て修理は茶臼山に行て今日の軍議如何あらんと評
 議せしに左衛門佐聞て兎にも角く天下の一大事東西の雌雄只此一戦あり疾々秀頼公に
 も御出馬有りて諸軍を御指揮あらば兵士の勇氣も日來に十倍すべし足下早く御勦撃有りて
 出馬を促さるべし又明石掃部介は西國勢の押へとして船場に陣を備へたれば因て掃部
 は密に旗を伏寺町筋を勝曼院の下へ掛り茶臼山を南へ廻り上の段を安倍野へ押入り寄手の
 後備へ突入りおば大御所の旗本不意を討れ定めて混乱するならん其機に乗して諸軍急を押
 寄横合より突入おしは勝利を得んと疑ひなし疾々命せらるべしと手に取如く述べれば修理
 も大いよ是を感じて與田壹岐等と謀計を談じ約を誓ひて城に歸り秀頼公へ與田幸村の計略
 を一々説明して明石掃部介方へ急に使者を出し早く船場を出發して西の岸蔭より住吉へ赴
 き大御所陣營の背後へ廻り横合より突入るべしと申遣し秀頼公には疾々御出馬有べしと促
 し奉つり其支度も殆く整ひし時秀頼公今御出城有べ城内より敵に内應して城に火を放たんと
 企つる者有由風説頻なれば城兵等大に驚愕して上を下へと騒立ける所へ大御所より重て
 以和陸の密使來り今日止を得ず日々戦ひを挑むと雖も秀頼公とは素來縁者の交宜有ば旁々
 以て忍ひ難し猶和陸して是迄の如くせば和州に於て領地を興ふべしとの仰なりと述べれば
 此時大坂城中には昨日迄股肱耳目と頼たる木村後藤藤田内藤以下屈指の勇將等討死し鬱々

として居る折節成ば和陸の手術に勇氣も挽み秀頼公にも出馬を止られ近臣等を集へ評議の
 上左右の返答なすべしとて夫より諸將を呼集め各自の意見を問給ひけるも皆一同に以和陸
 有て時機の至を待給ひて然へしと申けるに此時速水甲斐守進出今日斯迄も成行ひを今更
 和陸を勧め奉つるは如何成所存か既に天王寺表の寄手のハヤ開戦成ん体も見え能々御思
 案有べしと憚る色かく述べければ秀頼公の出馬も遅引し剩さへ此軍勢の爲切角出陣したる諸
 將迄も召返されける程なれば城中大いに狼狽し這は如何成とぞと不審を懐くのみよて更に
 其治定を付たりけり凡そ戰場には味方壹人成共増す士卒大に勇み立減すれば氣を損ふの慣
 習成に斯の如く老黨諸將の城中指で引退さしかば争で士卒の勵むべき俄に諸陣營騒擾しけ
 れば大御所是を賞られて猶も戦争は急ぐ可らずと御指揮有其處へ將軍家より安藤治右左門
 佐久間時監の兩人を以て城兵は日夜を待て合戦爲ん体よて既々天王寺口は開戦ありしと覺
 く響響の音夥多しく聞えし瞬間も早く御開戦有て然るべしと仰遣はされけるも大御所には
 點頭給ひ追付予も彼處へ出馬すれば旗も天王寺の方へ指立置べしとの仰なり其時與田左衛
 門佐幸村は明石掃部介全軍の兵の住吉近傍へ押行んとする時刻を量りて茶臼山の上へ登り
 關東勢の陣法を見せしめけるにハヤ毛利豊前守は茶臼山の東方へ足懸其を出して東國勢の
 先手本多出雲守と砲戦を始しと雖も鉄炮の響夥多しければ幸村は大に驚きて毛利豊前守の
 許へ軍使を立て明石と約束の仔細を告時を謀り皆一同に開戦すべしと述べれば毛利は
 同心して直に軍使を馳砲戰暫時見合すべしと觸渡しけるに諸陣は此令を聞入す愈々烈く砲
 戦しければ與田毛利ハ士卒共の號令を用さるを憤怒り自身制すべしとて馬に鞭ち乗出し陣

々を駆廻りて號令を傳へしかど悍傑の士卒等は聞ばこそ倍々鉄砲を放ちけるにそ關東勢も是に驚ひ掛れば眞田毛利軍倦怠て此は大事を過らたなり臍を噛み其甲斐史に無りけり

○眞田幸村子息治幸を城中に歸遣はす事

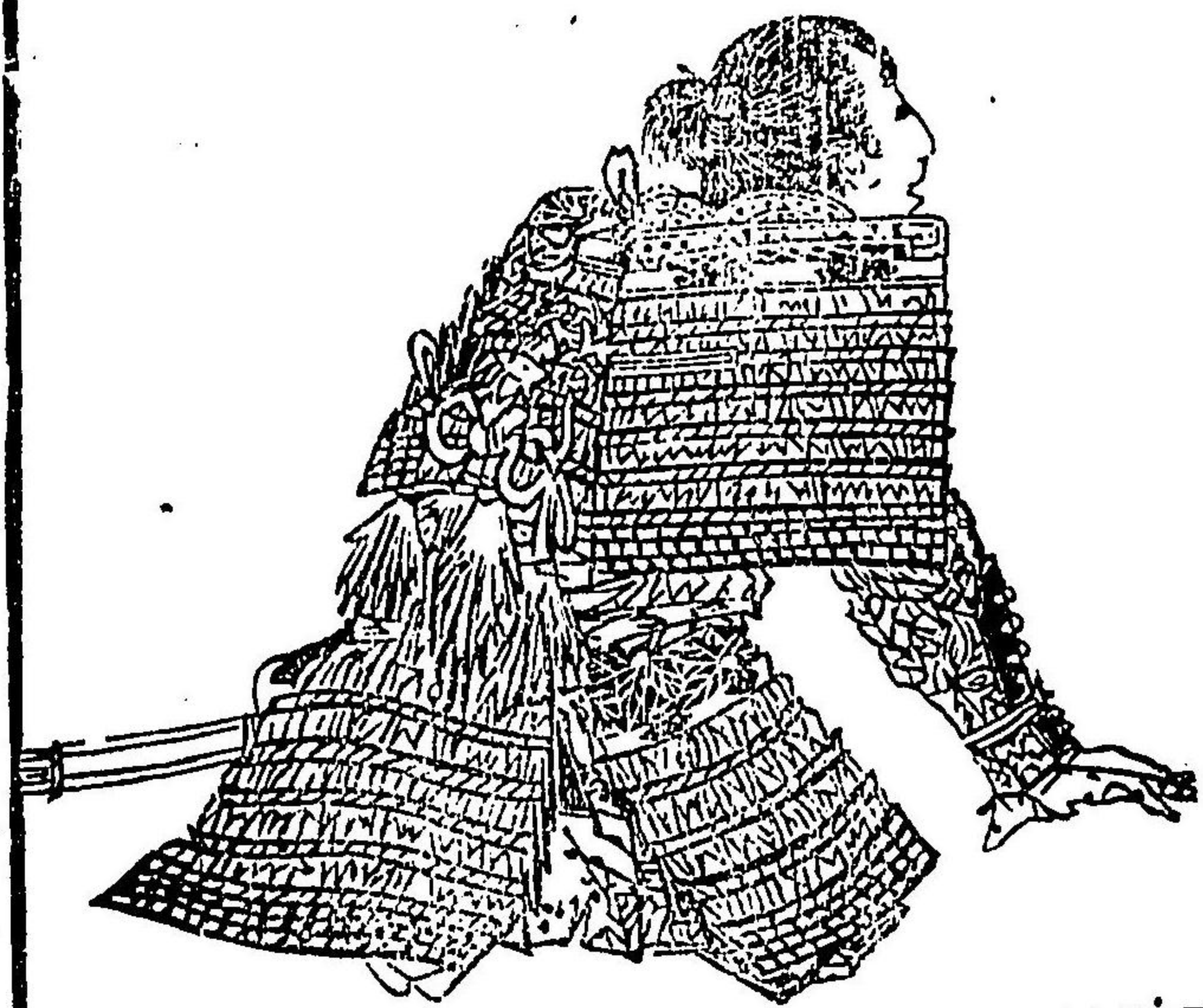
眞田左衛門佐幸村は像ての計略悉皆相違し利さへ秀頼公の御出馬も遅延せしかば此處にて之落城も近に有ん我二心無を示んと思ひ一子大助を側近く招て言けるは其方昨日の陣に負傷たれば今日一戦争定めて難儀成ん疾入城して秀頼公の御長期の御供仕つれと他事なく吩咐ければ此時大助は父の顔の尋常成ぬを見て嚴父は最早討死の御覺悟と覺たり某子生てより御両親の御膝元に成長し本年僅に拾有五歳片時も御傍を離れ奉つらず客年高野山麓より大坂へ御入城の其時は母上には生別れなし參らせしが其後屢々書簡の便に萬一嚴父御討死有し時は其方苟くも武士の子として敢果ならし生命を存命て母に逢んと思まじ嚴父御最期あらんには同じ枕に討死し眞田異代の名を汚す可らずと仰越れしと度々なり只今斯の如き危急に臨み嚴父を捨て入城せんと思ふ寄すいと嚴父の鑑に継り付號哭暫時止ざれば左衛門佐も從兵等も俱に涙に咽ひしが幸村態と聲擧げ汝能長の言を聞べし一旦の生命を保せん爲る歸城を勸るに非ず唯我懸念とする處は秀頼公の御先途なり汝は先途を見届なば俱は黄泉の御供して御案内仕つれ生て親子の而會は今を限と思ふへし再會の程難し名残を惜む所有す父は死手の山越て三途の瀬踏すべしとは豫て思ひしと成て武家の習慣の家しさは身を終るまで忠信を忘却するをば道とせり然ば秀頼公には斯る危急を如何してか免れ給ひ何國へなりと落延て時節を待て護兵を起し彼の會稽の恥辱をば雪んとし給はん其時

時汝も又生命を企ふして一族の苦難を壹人にても召具し其時にこそ君の爲忠戦なして幸村の冥魂をば慰むべし是に過たる孝道なし疾々秀頼公の御側にて參候なして御先途を以届奉つりいへかし夫さへ左右すあば死後迄勘當致すありと云れて大助困じ果何と返答も無りしが暫時有て大助は嚴命の趣旨承引せり然し戰場恙なく折角の厭ひ有べしと馬に一鞭打しかど跡に意の惹れてや嚴父が姿を見返り躊躇居しに幸村は鑑と睨見て聲荒げ卑怯未練な大助哉嚴父の庭訓を違背するか不孝の罪は免れ難しと口には云ふ幸村も是ぞ此世の名残なり器量と云武術と云恥しからぬ大助の死期を急げと促すは武士の義理とは云ながら流石親子の愛情は覺えず涙ハラ／＼と鑑の袖を濡しける隨從部黨等共、涙に咽けり大助は父の嚴命重ければ乗出さんとはしつれ其猶恩愛に惹れてや幾度となく馬上より嚴父が方を顧見しが斯ては果ほど氣を勵し漸々にして茶臼山の麓を過て大坂城に難なく馬を乗入けり往昔楠正成纏弄ふ於て其子正行に教訓を遺し、と今茶臼山にて幸村が其子大助に忠戦を勵し、は事全一として彼に傳る共猶劣らじと此時人々評せしと然ばこそ今に至て猶難波津のなみならぬ名を残けるこそ全く節義の節より出づると人々感じて止ざりける

○越前勢合戦の事 眞田幸村宿政倫列の事

五月七日の未明越前少將忠直朝臣の先鋒吉田修理は茶臼山近傍に押寄未明放れぬ中にハヤ備も整ひければ物頭諸奉行に向ひて昨夜大御所の旨意に越前の軍兵と午睡して有けるかと上意有し由に承まはり然ば今日と午睡の夢の醒たる如き戦功を顯して上覽に入すば諸將等も面目無べし各自其處に心を留られよと自身に諸陣を指揮しける此時水野日向守本多美

大 幸 別
身 村 名



澤守松平下總守を始大和伊勢美濃三組の諸將等越前勢の茶臼山へ押寄せ見如何は控定なればとて我々此儘此處に在陣せば今日の戰爭手を空くすべしと言程こそあれ途中より士卒を北へ押直し越前勢の左側の方へ並ひ茶臼山の麓へ陣取りたり越前勢之前の小山に登て見渡せば茶臼山近傍は悉皆紅の旗指物を立列べ恰も露の花一時咲乱たるが如く華麗に見えければ是を眞田の軍勢ならんと人々目を驚かせり其時越前勢の中より武者奉行梶原美濃太田美濃水谷兵部管沼伊賀の四人斥候として駈出し續て二番の斥候大川田藤太夫江川安左衛門伊藤長左衛門藤田大學の四人駈出せり越前少將は今日討死と覺悟し玉ひしと成ば軍機を密にし待玉ふ茲に片岡丹波と云るは此頃少將の御樹氣を蒙りし者なるが今日忍來りし出陣し先陣に加り居ければ本多伊豆守は是を見認て少將の目前に出陣丹波儀は勘氣の身を以て今日忍て先陣に加り居れば殊に彼者の舉動を見るに今日を最期と決心の様子に候は勘氣の中に彼討死なさは永き黄泉路の障りにも成んかと思憫然と存候此上は彼は免の傍辭を給はらば死後迄の思出に有べく候と伊豆守涙を浮めて中上ければ少將には聞有て扱と懇然のとなり疾々定へ召寄せし仰有ければ其側より在し使番深澤長左衛門馬に鞭ち先陣へ駈行丹波に其旨を達せば丹波は喜びて旗本指て乘來り少將の目前にて下馬をなし兜を脱て平伏し頻に落涙を催しけるを少將には傍覽有て丹波汝が勘氣は免と何有けるを丹波は如何思けん返答も成で少將を見上つ、其儘馬を引寄て打乘先陣を指て駈行しが今日開戦の有や否や第一番に敵中へ斬込一騎首を討取て其首を提帶乘歸るを三番の斥候眞子何某は見て其旨趣を少將に注進せしかば少將は感悦有て彼の陣陣を待玉ふ所に名有首級を賜け

て片岡丹波乗騎しを少將遙に見認玉ひ立せながらに湯漬を食され兜の緒を細其儘にヤア丹波今日の戰功援辭なり予は兵糧を既に喫たれば是より俱に引返べし縦令修羅の街に戰死す共豈夫俄鬼道へは落入まし閻魔の廳に至て再戦せんも爽快しと感れ玉ふも片岡が名だ、る首を取しに愛られ斯は宜ひし物成ん夫より直に馬を引寄せ打乘玉ふ其有様は往古の名將と雖も是より優るまじく流石は大御所の御嫡孫なりとて人々感歎したかりとぞ此時迄を敵味方とも互に白眼合て居たりしが本多出雲守が手より鉄砲を放しければ城方毛利豊前守の陣聲騒立て暫く是と放合ける越前勢の青木新兵衛守津半市其他弓鉄砲の物頭組々を分て出陣す本多丹下は小高き所へ乗備て城兵共の動靜を窺ひ居たりしが本多毛利の兩陣開戦すると見るが否や丹下は腰なア塵配押取り掛れや者共と呼りつ、透間も有す下知をなすに越前勢は七八百挺の鉄砲を釣瓶打に放ける其跡より貳万有餘の大軍潮の湧が如く無二三と突て掛る其先陣は吉田修理無懸黒烟を立真一文字に茶臼山より東出堂迄備たる眞田の勢の中へ會釋も無突入は續て青木新兵衛守津半市乙部九郎兵衛萩田主馬豊島主膳等乘込駈立何れも百戰敗れて一陣と成其勇怯未練な舉動をせまじと相透に罵りて勇氣鋭く突立ければ城兵も是に渡り合て防ぎければ其勢は衆を敵し難く士卒多く討れて死たりける此時眞田勢は味方の散乱するに氣も掛す魚鱗も速りて駈破り虎帽に別て海廢け脚手拵繩十文字に掛破らんと馬の鼻を雙て一勢駈入つ、敵の大軍も事どもせず左右前後も切斷け進退自由節有度有鷹の雀を驅如く犬の兎を以て其神速成と迅雷の耳を掩も尙及す越前勢も是が爲に些か瘡んで見えけれ共軍兵少も動搖せず節も應じ機に隨ひ其敵する所に因て變化すると恰も神

の如く道理なる哉越前勢の將士等は、大御所累年調練を志し、玉ひし三州以降の家人にて、江州姉川三州の一向亂、遠州味方ヶ原、濃州關ヶ原、數ヶ度の難戰苦闘に臨み、股肱羽翼と成て、最も忠戰有し、勇取不變の士卒なみならず、少將忠直、朝臣の尊父中納言秀康卿は、龜造士卒を愛し、玉ひ諸家の浪人にて、武功の名譽有者、之夫々大祿を與へて、扶持し、玉ひし故、今般の軍にも龍の翔り、虎の嘯く如く、勇を振はれしかば、是に依て、忽地、敵を挫きしとぞ、大坂勢は之に勢ひを碎かれ、漸次に逡巡に成て、敗北しける斯る中に、伊木左近祐光は、大喝一聲、衆に云やう、今日を限の戰争ぞ、凡戰たる者、生命を君の爲に殞すに、何か惜べきと、暮來る敵を尻目に、睨て、爰を先途と踏止りて、忠直朝臣の家士山形甲斐守と、鎧を合せ、双方、迭に火花を散して、戦ひしに、暫時勝負も決せざりしが、甲斐の鎧之や、優りけん、左近が瘞むを、突伏て難かく首を取にける、然るに、大坂勢の惣大将真田左衛門佐幸村は、父安房守昌幸が、軍略智謀に、もをさく、劣らず、彼の唐士の孫吳をも、欺くべき、智勇兼備の將士成ば、關東勢の大軍を、唯一吞にして、客年以降、秀頼公の爲に、密謀秘計を、盡しければ、進退此處に、谷れりと覺悟やしけん、大音聲に、本年四十六歳にて、今日最期の時、判れりと、獅々奮迅の怒氣を、なし、縱横無盡に、駈廻り追來る敵を、突伏く、無二無三に、戦ひければ、關東勢の大軍も、真田壹人に、避易し、何時討べきも、見あざりける、然其幸村、其身、金錢に有ざれば、漸次に、身体勞れ、逡巡になりけるが、此時は、即黨從兵も、多く討死し、或は、何方へか、散亂し、今は、僅に、主從三人になりしかば、本道より、少く隔たる田の畔に、腰打掛、暫時休息しける處へ、越前勢の足輕、頭西尾仁左衛門、駈來りて、突然、幸村の背後へ、廻り物と言ふ、突伏ける是と、齊く、越前勢大勢、斷集りて、突立ければ、真田、勘解由大塚、清安、高梨、大膳等も、同じ枕に、討死す、扱幸村の首は、仁左衛門

門の手に、打捕しか、共其誰成や、判らざれば、鼻を、割落さんとしける處へ、旗本よりの、淨使者番、真田、隱岐守、馳來て、其首は、我見、知たり、兜は、如何と、問けるに、是も、倭と、指出せば、其は、真田、家累代の、重寶たる、抱鹿の、兜にて、是が、正く、我甥、左衛門、佐幸村の、首なり、前齒二枚、抜て、有ん口を開て、見玉へと、云ふ、仁左衛門、心得て、口を開に、果て、其如く、成ければ、是は、紛も、無幸村の、首とぞ、定りける、爰も、宿、越前守と、云ふと、奮、賊前家、又仕へ、去年以來、大坂に、籠城して、大野、主馬が、組に、編入され、此度、秀頼公の、御合、萬一は、利運に、於ては、越前國を、賜る可との、契約にて、既、先般、越前守に、任せられ、今日も、主馬、又、隨從、岡山筋に、出陣せしが、真田と、軍議のと、有て、茶臼山に、來けるに、此場所、ハヤ、大坂勢、逡巡の、景況、又、陣、丞大に、混亂せしかば、此場、に至て、歸ると、を得ず、直に、其勢、三百余人、武田、菱の、旗、二流、五色の、幣の、馬印を、山嵐に、吹靡せ、自ら、手鎧を、携帶て、茶臼山の、頂上より、本多伊豆守が、陣に、突て、掛れば、本多勢、從軍を、陽に、開きて、討出んと、するを、宿勢は、備を、陰にて、破られ、まじと、争ひ、突戦すると、稍久しかりしに、宿も、今日を、最期の、合戦と、思定めし、事成ば、何か、些少も、猶豫すべし、雜兵共には、目も、懸す、大将、目掛て、躍入、假令、千騎が、一騎に、成共、退くまじと、短兵急に、息をも、吐す、攻、戦ひ、數多の、敵を、討けるが、引、率したる、我軍、兵數、百人、討なされ、身も、突、疵切、疵、數ヶ所に、多く、負たれば、今は、白糸の、鎧も、緋、緋と、變じ、苦しき、息を、吐て、後陣を、顧見れば、真田も、ハヤ、討死せしと、覺く、六文錢の、赤旗、四方に、散亂せしかば、御宿も、今は、是迄を、りて、大聲に、呼はる、様誰が、爲に、惜からぬ、生命を、存命べき、家系を、亂せば、武田の、一族、甲斐、駿河、兩國の、住人、たがりし、葛山の、若丸、ぞや、近き、頃迄の、業成は、武勇の、程も、知つらぬ、越前守、討取て、高名、せよやと、呼りつゝ、喚き、叫で、突、廻り、本多勢も、接、戰乘て、右往、左往に、散亂す、本多伊豆守、是を見て、鼻、味

方の舉動かて我に續や從兵と失石を雨霰の如く抛つたり此時關東方より放たる鉄砲大將御宿越前守が左の腰刀を討貫ければ宿は眞轉倒に落馬しけるを譜代の郎黨田良千介泉主水加藤治太夫上田權兵衛足洗藤内生田外記以下屈指の士卒主君の首を敵手と取れしと前後左右に奮戦して各自討死なしかれば此間に殘る郎黨士卒等近傍に落散薪を小柄な時時血を吸統を甜ける折節六七騎を従へて此處へ來掛る越前勢野本左近を御宿は見て團扇を揚て招きて言樣其許とは往昔より契を結ふと借老にも越たり我身今既に深傷を蒙り進退意も任ず殊に尸を路上に曝んと武士の本意に有す越前守不肖ありと雖も秀頼公に仕官奉つり苟くも白旗を預る大將の一人たり舊好を思出に我首取て公の實檢に入奉つり勳功の賞に預り玉へ又二には竹馬の文証を忘却無んは一逼の回向を手向玉へ其許の刃に掛らんと我身も取ての儘倅なり疾々と促しければ右近は辭する辭も泣々に鎧の袖を絞りつゝ帶たる太刃を援勢し御宿が首の根討落し乙鋒に貫き具足等を夫々家士に持せつゝ本多の陣に入にける然程に今日の戰爭は越前勢第一の勝利にて討取たる物首數三千七百餘其内本多伊豆守の手に取し者百七十三落合美濃守の手に取し者四拾八あり翌朝に至り御本陣へ此旨御披露に及ひしかば眞田幸村が首級を上覽有んとて西尾仁左衛門を付れ首級是へとの御に隨ひ早速御前に指出しけるに幸村は是迄一度も拜謁せしと無れば大御所にも容貌を御存知なく只前齒二枚缺在とのとを問召ければ則ち口を開かせて御覽あると果して前齒二枚缺たれば仁左衛門は好首級を取たりと仰られたり夫より野本右近も御宿が首を持來て上覽に入しかば疾御上覽有て扱々御宿も重齡たりとの上覽有續て右近も其時の勝負は如何有しとの御尋も右近平伏して

御宿と唯一騎にて乘來候ひしが某子を見て馬より下候へ共接戰は一向仕らずと言上しければ并は勳功なりとの御意有しのみ願て右近は退出す其後御側衆への仰に御宿め今少し若かりせば右近如き者には討れまじきにと御意有しとか抑々御宿越前守は舊駿河國葛山の城主葛山播磨守綱氏が嫡子にて御宿監物入道友綱が養子なり友綱は武田信玄が旗下にて屢々軍功の有し者成が天正十年壬午三月十三日武田四郎勝頼没落の節越前守は若丸と稱して未だ幼稚成ければ密に小田原へ赴きて氏政の家に食客と成名を御宿勘兵衛と改め屢々武功を顯せしが天正十八年北條の門族豐太閤秀吉公に討亡されて氏政氏直悉皆滅亡しける此時中川實秀康卿を厚ふして勘兵衛を招玉ひしに因越前家の麾下「壹方石を領す」に属すると數年なりしが聊か秀康卿を怨恨る事の有て越前國を出奔し終に秀頼公に仕官て一旦の表を守り生年四十九歳を一期として難波の夢と消たるは武運拙き武士なり是より先御宿書を野本右近の許に贈て予けるは臣政倫秀頼公に仕へ奉つり大坂城に楯籠ると雖も浪々の身にて良馬を持候事能はず仰希望くは公の御馬を賜り御軍勢と血戦して爽快く勝負を決せんと欲す希くは此旨宣敷忠直朝臣の上聞に達し給るべしと書たりければ野本右近も秘し置べきとに有すとして其儘を具に言上せしに忠直朝臣大に憤怒給ひて何の答も有さりける其の老臣老黨等交るゝ諫言申上流派といふ秘藏の良馬に鞍迄添て贈られけり然ば宿は此荒派に打乘は勝敗を競ひけれと運命爰に盡しよや最期の太刀も恨ずして難波の街に討死す此時大坂所は合戦を以て上覽有んとて乗馬有ける處へ横田甚右衛門は先陣より駈來り敵既に敗軍せしと覺しく然ながら茶臼山にて討死されたる敵兵我勢と小戰爭最中にて候暫時此所にては上

有可也上上げれば大所には然ばとて茶白山より大坂城の際迄透間なく人数を配當し大
小砲を立並へたる景況を御覽有て土手の前より有栗の木を楯に陣を居玉ひ兵士は皆此土手
に鎧を伏置歩行立にて敵兵押來らば我指振ら隨ひて一度に突立鎧の穂先を揃て接戦なすべ
しと御日身は惣人数の前後左右を御乘馬にての巡見有れしと二三度も及しが此威力にや
恐怖けん敵兵壹人として近付者はなかりけり

○松平伊豫守忠昌朝臣高名の事

國を出ては妻子を忘れ敵に向て其身を忘るゝは武門の習ひなり然ば越前少將忠直卿の命
弟伊豫守忠昌朝臣は今年僅に十九歳なれど此度の合戦には將軍家に昵近して在けるが六日
の夜本多佐渡守よりさる、様明日は兄弟將必す先陣に進ずと思はるべし因て某しも今夜よ
り兄弟將の陣營へ振さ彼手に加はり相應の各戦なさんと存するなり此旨將軍家へ言上し玉
はれど只警云れしは佐渡守早々御前に出陣と言上に及ひしかば將軍家聞召れ左右の御返答
も無ししが暫時有りて仰には伊豫然程に思詰しと成ば勝手次第になすべしとの意なれば佐
渡守は早々將軍家仰の趣きを傳へしに伊豫守大に悦ば然らば御趣に伺候すべしとありけ
れば佐渡守夫にも及ふまじしと申す忠昌朝臣否々然にわらず是を今生の暇乞と存すれば是
非共同候致すへし疾々と云る、よそ佐渡守は大に感じ其旨早速言上せしに將軍家にも感じ
給ひて御機嫌難しく見あける處に忠昌朝臣伺候し暫時御物語に時を移されしが頓て退出有
て直に越後少將の陣營へ赴かれしは明日の軍體最中成しうは忠昌朝臣も種々所存を述べられ
翌日吉田修理より引續て出陣有しが越前勢の左備へを四五十間も進出陣列を別に張越前勢一

同に押寄る時に臨んで本多勢(越前家老を乗越)自身十文字の鎧を引提城兵一人を突伏て家
人關治兵衛に首を取しめ直に將軍家へ贈られける其時城内は念流左太夫とて劔術の達人有
しが自身名を名乗つ、伊豫守を目懸て突て出る其神速成事雷光の如く太刀打鋭くして防禦
も隙や無りけん忠昌朝臣は馬上に於て鞍を左へ捨り忽へは丁も外れて馬の口付を凌ぎ掛に
切拂ひたる太刀の尖突忠昌朝臣の膺當に中りければ忠昌朝臣は馬よりおり立る、間に郎黨
安藤治太夫透さず討て斃るを心得たり左太夫は大太刀返り直し治太夫の首を半程も切付
しかば尻居に倒れたり是を見て吉田五左衛門同竹右衛門等雙方より打て掛れば左太夫
得たりと確立るに兩人も手疵を負、引退く然る所へ小入隊の戸田六兵衛は朝臣の前に立塞
り火花を散して暇ひしが是も同く手を負たり後より相成し高瀬彌右衛門は未だ士ひ分らね
共走り來左太夫の右腕を目懸て切付しに少し疲し所を忠昌朝臣衛と引組押て首を撞
落し郎黨等右衛門に持せて將軍の御旗本へ送られけるが此際ハ合戦最中にて敵味方入乱て
茂右衛門も既に計るへかりしかば餘儀なく彼臣の鼻を斬首に添て忠昌朝臣討取れし旨を言
上せしに兩御所の御機嫌斜ならず何地にて計しやと詰尋給ふに茂右衛門具言上す時に永
見志摩守も首一級家來相良半兵衛も首一級を伴たり此永見志摩守には合戦の最中貂の草の
指物を誤まつて取落しけるが此儘にて歸陣せば武門の恥辱と馬引返し又敵中に駈入難立々
々縮横に馳廻り終に彼の指物を取戻し徐々と引揚たり扱又忠昌朝臣は自身乞て戰場に臨れ
し程成ば粉骨碎身して働かれしにより繼ぐ士卒等も必死を盡して戦ひしを以て主従首五十
七級を得られ忠昌朝の首弟松平出羽守直政にも此手に加り自身太刀打して高名せられし程

今日の年功は越前家を以て第一とす依て閏六月十九日越前少將忠直朝臣は從三位宰相に昇進し給ひ松平伊豫守忠昌朝臣は翌年信濃國川中島の城を賜り十二万石を領せらる松平出羽守直政朝臣も同く九年越前國大野の城を賜りて五万石を死行はれしは何れも今日の戦功を御感賞有てのとなりとぞ

○本多出雲守忠朝勇戦の事并保科甚四郎の事

本多出雲守忠朝之中務大輔忠勝の二男にして十九歳の時父忠勝と俱に關ヶ原合戦の砌り島津の陣に馳向ひ大に戦功を顯し有名の首二級迄も打取しが曲りし太刀を鞍の前輪に當て押直しノノ取ひけるが後其太刀半程も鞘に納らざりけるを腰に横たへて御本陣に伺候しければ大御所其勇猛成を御感賞有て翌慶長六年父忠勝は越前桑名之城を賜はりし時忠朝は父の舊領上總國大多喜城に五萬石を添て賜りける然ば忠朝は君にも御寵愛を蒙り世の人も其武勇父に劣らずと稱美したりしが去年大坂の一戦の時先鋒の命を奉して出陣せしは陣營の向ふ川ありて水勢激激殊に底深くして城攻に便宜悪かりければ陣營を他に移さんと衆議一決し此旨言上せしかば大御所御氣色を損じ給ひて汝が父忠勝は戦争に臨みて山にもせよ川にもせよ嫌なく我指揮を守て合戦せしに汝は父に似合しからぬ子息なりとの上意に忠朝此御詞を承まはりて世も口惜きとに思ひ城攻の時には第壹番に戦かつて討死成んと覺悟せしが程なく御和睦となりしを以て心安からず鬱々として在し處に此度再び戦ひ起りしかば今こそ本意を達するの秋至れりとも勇氣凛々として平日に倍し江戸表發足以前腹心の家士に内々其事柄を告知せけるに加藤忠左衛門大屋作左衛門藤平治右衛門日杵七兵衛等は萬一此度

の戦争は主君の御討死有成は我々も同じ枕に討死し冥土黄泉迄も御供せんと誓書を認め血判して忠朝の前に出せしかば忠朝は欣喜大方成す世にも頼母數者共かなも賞有しが小野勘解由は武士の戦場に臨みて討死せんと世に珍しからず何條誓紙を書へきと筆だに手にも執さりしと斯て忠朝には此度華々敷奮戦して討死成ん覺悟なれば八尺有餘の鉄の棒を八角より手元三尺程を丸く作り兵卒等七八人の力量にて漸く持運ん程なるを最輕々と引提徐々と發向ありて江州瀬田の橋近く來り遙彼處を見渡せば濫帷子を着し破れたる編笠眞深に打冠若黨壹人小者二人を召具して小高き岡に腰打掛休息居たりしが出雲守を見掛つ、笠を取捨會釋をなし是はく、出雲守殿拙者は保科甚四郎正貞にて候兄に勘當を蒙りし某し忍ひて是迄來り候哀菅御陣を借用して爽快一戦なさんと思ひ態々是迄推参せり御許容有は千萬添けなしと申ければ忠朝は馬より下式禮して這は易きと候得ども拙者此度の戦争は聊か思ふ仔細有により他の御加勢は受難しと辞て許容さりしかば正貞重て才様其御所存を推察せし御態と御陣の借用を懇望しなり御許容なくは夫迄とて思ひ詰たる有様成は出雲守も止を得ず終に其意に任足輕十八并に馬武具迄添て貸渡しければ正貞大に欣喜打連立て馳登りしに又匹田道印と云浪人も五月六日の黄昏も忠朝が陣に荷擔したり忠朝今度こそ最期の合戦と思ひ定しと成に今日道明寺口の戦ひに眞田毛利等の舊戦なせし時兄美濃守には伊勢組の大將にて幸ひ其場に在ながら汝等の兵を支ゑも敢ず無事歸城させたるは最良法成舉動にて殊も本多の名汚なりと大に憤怒て其黃昏兄の陣營へは赴けど面會さへも爲ずして甥の中務大輔甲斐守能登守等を呼出し芝生の原にて今生の暇乞ををし此以後其祖父忠勝公の